

朔北のいぶき







講話集

朔北のいぶき

第二十二回神道講演全国研修大会
北海道大会

御 挨拶

神社本庁総長 矢田部正巳

第二十二回神道講演全国研修大会・北海道大会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。神道講演全国協議会の皆様には、常日頃より神社本庁の諸施策に対し、格別のご理解とご協力を戴き厚く御礼申し上げます。

さて、本研修大会は、長きに亙り神道講演を通じて斯道の興隆にご尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の御志を受け継ぎ、昭和四十六年より回を重ねてこられました。研修会参加の皆様は、ひたすら研鑽を重ねられた成果を、奉仕神社における社頭講話を始めとする神社活動の場で実践してをられることと存じます。これは、斯界にとりましても実に心強い限りであり、深く敬意を表するものであります。

昨年、神社本庁は設立六十年の節目の年を迎えました。戦後の幾多の苦難、そして復興と繁栄の六十年が経過する中で、社会構造や価値観は大きく変化し、近年は人々の心の荒廃を心配する声が大きくなってゐます。一方で、そのやうなときだからこそ、私どもの祖

先が營々と培つてきた普遍的精神に立ち返らうとの氣運が高まつてゐるのを強く感じます。かかる状況にあつて、先人より連綿と受け継ぎ語り継いで参りました伝統を将来に伝へてゆく責務を担ふ私どもは、神道の信仰と精神を分かり易い言葉で氏子崇敬者に説く必要があり、創意工夫を重ねて正しく伝へてゆかうとする本大会の意義は、ますます注目されることと確信してをります。

どうかご参会の皆様には、教化活動の第一線に立つてゐるとの自負と氣概を高く持たれ、国民精神の昂揚を以て、斯道の興隆をはかるために、尚一層のご尽力を賜りますやう切に願ひ申し上げます。

結びにあたり、貴会の愈々のご隆昌と参加各位のご健勝とご活躍とをお祈り申し上げます。ご挨拶といたします。

序

北海道は一ブロックのため、全国規模の大会等は、ほぼ十年毎に当番が巡ってきます。講演講習の場合も、前回は平成七年、釧路支部管内の釧路市鳥取神社で開かれています。この時は教化に熱心だった先代故・鈴木瑞彦宮司さんのお骨折で、全国から三十八人参加して実施されました。

平成九年の第十三回伊勢大会以降、必ず講話集が発行されています。昨年地区幹事の芦原高穂旭川神社宮司さんから相談された時、神社庁の全面支援態勢が引受けの前提になると思いました。そこで十八年度教化事業の一環とすべく、役員・教化委員各位のご理解をいただき開催の運びとなったことに、先ずもって御礼申しあげます。

会場については当社が指名されました。例年著名大社で行われており、朔北の小社に受講者が集まるかどうか懸念が先立ちました。ただ、男女五十人前後は合宿できる故をもつて、僭越ながらお受けし、最も快適な新緑六月に、期日を設定させて頂いたわけです。

幸い、文字通り全国各地から、講師先生、聴講を含め四十九人の参加をいただきました。

自習室で夜を徹して講録作りに励む姿も見受けられ、熾烈にして、厳しく楽しく自転する。本講習の伝統が継承されている状況を目の当たりにし、感銘一入でした。

当社としても、又とない全国研修であり、総代や敬神婦人会の協力も得、万全を期した積りではあります。しかし偏境にて、多々ご不便をおかけしました。石井・佐古岡先生の慰霊祭を含め、全日程完遂できましたことは、実行委員長さんはじめ事務局の準備と運営、受講の皆様のご協力あればこそと感謝のほかない次第であります。

どうか、朔北の大地に響いた言霊の息吹を、神社の興隆と地域の平安に生かされ、「日本神道は必ず世界の宝となる。固く信じてご健闘」下さるよう念願してやみません。

北海道大会会長

士別神社宮司

北海道神社庁庁長

佐藤公聰

目次

御挨拶

神社本庁 総長

矢田部 正巳

序

士別神社 宮司

佐藤 公聰

記念講演

北海道開拓と神社の創建 Ⅱ 士別神社を中心にⅡ

士別神社 宮司

佐藤 公聰

第二十二回神道講演全国研修大会・北海道大会

笑い飯^{めし}

佐藤 勇穂 22

思う心

村田 和弘 26

愛の輪

畠田 明彦 30

神の御恵みを信じて

河野 誠 35

倭心に帰ろう

井手 潔人 39

伝えられる命

今村 早紀子 43

大いなる河

生 寫 經和 48

正式参拝の後で

人の中のものさし

秋の例祭を終えて

家庭婦人への教化活動について

智仁勇

さわやかなあいさつを

初心者神職

真心を捧げて祈る時

太鼓と『おまつり』

地神祭の後で

米と日本人

乃木將軍と辻占売り少年

お宮参り

山崎 努 53

會田 史男 58

成田 浩二 65

佐々木 裕徳 69

堀 康弘 74

佐々木 美津子 78

浦 隆一 82

牟禮 照子 88

菅野 剛 92

鎌田 耕作 98

西尾 酒子 103

松吉 宣和 109

西村 純子 114

春祭のあとで

結婚式の後で

常若とこわかの祈り、中今なかいまのつとめ

— 民族派青年有志「神宮参拝禊研修の集い」開会にあたりて—

未来につなぐ命の緑

新しいものと古いもの

神道と動物

国歌と愛国心

神道人として

浦安の国 日本

言霊と化学

前の宮司が教えた一途の心

日本の神様

武智輝子

鎌田告人 117

大野康孝 125

野口拓志 130

池田元教 134

中谷英明 137

上村章義 141

吉田隆宏 146

佐藤恵美 150

中木屋豊 154

寺本正徳 159

三橋昌功 163

日々感謝

日本のお寺さん

おいしいワインは、ストレスの強いぶどうから

人は神の子

思いは叶う

スタート&エンド

戌歳にちなんで

おじいちゃんの子育て論

プラス発想

日本国の終わりの始まり

心の絆が権威を紡ぐ―昭和祭に念う―

神道講演構成法

北海道大会の記録

佐々木 景子

村田 佳子

木下 久榮

川崎 太久美

渡邊 知宣

村田 和之

佐古 一洌

芦原 高穂

原 茂子

田代 壽興

木下 鎭二

神道講演全国大会のあゆみ

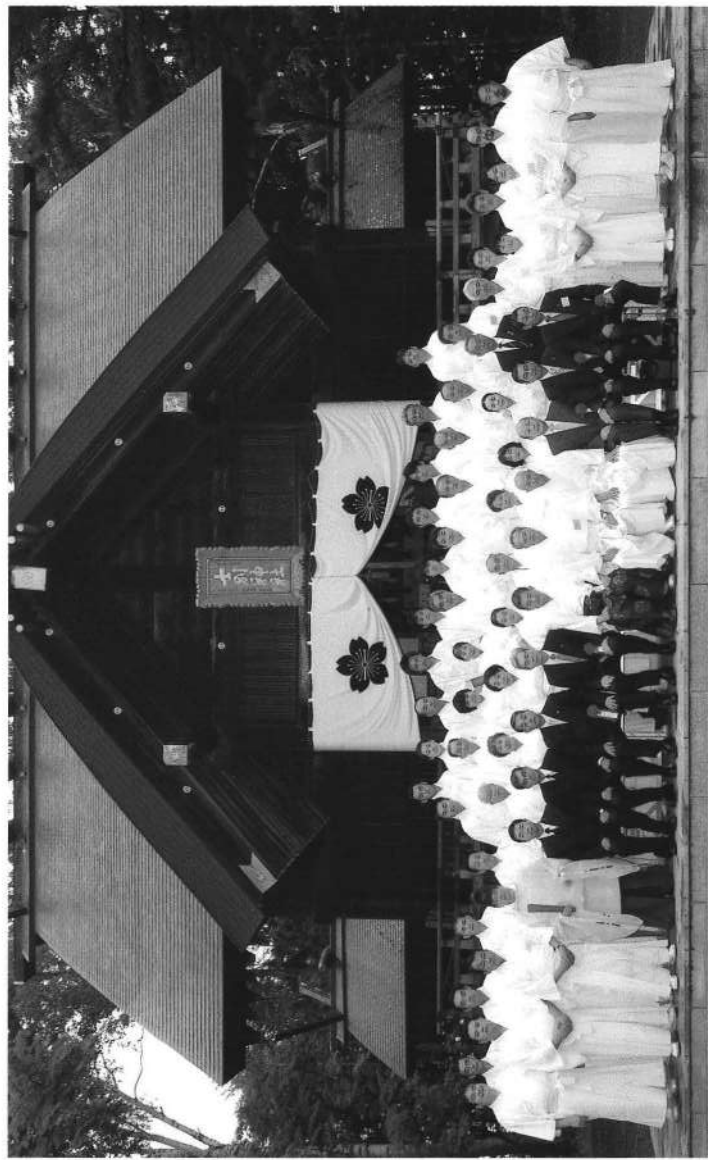
神道講演全国協議会役員名簿

あとがき

北海道大会実行委員長 村田和之

245 244 242

表紙撮影 氏家 桂子（九十九山の樹氷）



第22回 神道講演全国研修大会 北海道大会

平成18年6月23日

第二十二回

神道講演全国研修大会 北海道大会

とき 平成十八年六月二十一日～二十三日
ところ 北海道 士別 神社

北海道開拓と神社の創建

Ⅱ 士別神社を中心にⅡ

士別神社宮司 佐藤公聰

はじめに―石井、佐古先生の功勞

本年は石井壽夫先生、佐古幸嬰先生が帰幽されて、それぞれ十五周年、八周年に際会いたしました。先刻、先生の慰靈祭が当神社祖靈殿におきまして村田和之会長が斎主、当社佐藤元保禰宜、当神社庁佐藤勇穂録事が斎員奉仕、上川雅楽会狩野貴美雄会長はじめ三神職雅楽奉仕のもと、いとも厳肅に斎行されました。

顧問の大野俊康先生（靖國神社元宮司）のご提言を活かし、祭詞の次に佐古先生の辞世二首を、吟道師範でもある當麻神社鎌田正彦宮司さんが吟じ、遺族代表石井陞氏が挨拶の中で、力強く石井先生訣別の辞を引用、何れも参列者に配付され、感動のうちに終了いたしました。参列できなかった受講の皆さまに、謹んでご報告申しあげます。

大野先生によりますと「両先生を直接存知上げぬ」新同志が過半数になっている現況です。私は昭和三十二年学卒帰郷いらいご指導賜ってまいりました。節目の大会に当り、先

ず両先生のご功績、特に北海道とのかかわりの一端をお偲びしたいと思います。

「警世の神道家」石井壽夫先生、「不世出の語り部」佐古幸嬰先生のご功績は、大きく二点に集約できると思います。

第一は、現任神職教育のご功績です。北海道では、昭和二十九年札幌神社（現北海道神宮）における五泊六日の講習会からはじまって、石井先生帰幽の前年の平成二年、上川神青主管で、新築なった旭川神社社務所での神道理念と講話講習会まで、じつに三十六年に亘ってご指導いただいております。

こんにち、男女平等が極端になり過ぎの風潮さえ見受けられますが、佐古先生は社家出身神社界の大先輩でありながら、常に石井先生を立てられ、一步下がった謙讓の美德を備えられた明治の女性であり続けられました。先生のこのつましやかな仕草が、一般に二人コンビは長続きせず解消されるというジンクスを打ち破り、二人講師の長所を引き出したところに、講演講習が永く継続できた一因があったと思わずにおれません。

実習が終れば、すぐ両先生による呼吸ピツタリ、対称的アウンの掛け合い講評の妙。これが講習の魅力的な一大特長でした。受講者は一回の登壇が済めば気楽ですが、先生の方は一人づつ丹念にノートをとっての、親切で心暖まるご指導にどれだけ多くの受講者が勇

氣百倍して帰途についたことでしょうか。本当に有難い幸せでありました。

佐古先生には平成七年、釧路で開催の全国大会までご指導いただきました。天性の語り部の佐古先生でしたが、言行不一致や日常の神明奉仕をおろそかにする、巧妙な話術のみの口舌の徒になることを厭われ、講演栄えて神道亡ぶと、厳しく戒められました。私共神職にとって最も大切な心構えを、先ず説かれたことを、私共は決して忘れてはならないと思う次第です。

第二点目として、氏子への直接教化に挺身されたことが挙げられます。幅広く一般大衆に講演活動あるいは著作物を通して、道義の恢弘、神道こそ新時代を中心文化たることを説き続けられたご功績であります。北海道では昭和三十二年、上川町層雲峡における講演講習会の前後の期日を活用、全道各地で大衆講演会が開かれ、実に半世紀の永きに及びました。教育委員会や公民館主催の社会教育講演会という形で行われたり、神社主催で開かれたり、後には「お宮と婦人の集い」「お宮と氏子の集い」「氏子青年の夕べ」等々、様々な形で、まさに血となり肉となるご講演をいただきました。全道神社関係者大会や支部の関係者大会の講師として出講いただいた事もしばしばでした。

佐古先生の場合は道南、上川、空知方面を中心に、毎年のように各地で巡講され、神社

信仰とその基礎となる生活上の正しい生き方を、だれにでも判るように、やさしい言葉で語り続けられました。先生のご講演で希望と勇気を与えられた熱心なファンが出来、「今年は先生いつ来られるのですか?」と心待ちにされる人々が、年々増加したのです。

石井先生は、スケールの大きい『古代の日本神道と新地球文化』をはじめ、『現代の危機と日本の心』『お伊勢さまの御遷宮は世界の宝』『明治天皇』など、硬軟合せて二十冊以上の著書を世に送り、佐古先生と共同監修講話集も十冊に余り、書物による啓蒙、道義国家建設のために尽瘁くださいました。天皇陛下御在位六十年上川地方奉祝の集い、旭川市民文化会館で開催されましたが、管内から予想外の三千人もが参集、人波は館外にまで溢れ、私も石井先生の大熱弁を場外拡声器で拝聴した一人です。

平成御大典記念「士別市奉祝の集い」の講演は、佐古先生にお願いしました。「美しの日本、ありがたきこの年」、まさに八十六才の年齢を全然感じさせない、張りのあるお声での名講演でした。市長はじめ士別市各界各層の有志、老若男女を問わず、旧社務所大広間狭しと四百人の参会者が、手に手にハンカチで目頭を拭きつつお聞きした情景が、今もって脳裏に浮びます。会場は大感動を巻き起し、クチコミで聞き伝えられた人々から、ビデオの貸し出し要望が殺到し、対応にてんてこ舞いしたことが、つい昨日のように想い出され

ます。

以上神道教化史上に燦然と輝く偉大な指導者、石井・佐古両先生のご功績の一部を、北海道を中心にお偲び申しあげました。

この上とも両先生の御霊の御安鎮をご祈念申しあげます。ご生前の御教え「自ら強い信仰に燃えるマッチの軸」となって、教化の火を燃やし続けることを、皆さまと共にお誓いいたしたいと存じます。

最後の屯田兵入地

折角、朔北の士別までお越し下さったので、屯田開拓の始まりからお話しさせていただきたいと思います。

士別市は明治三十二年（一八九九）、北海道最後の屯田兵によって開かれたマチです。

屯田兵の資格は中々難しく、品行方正とか、家族構成では農耕に従事出来る者が二人以上いること、十七〜二十五才の男子で、士別屯田兵は百人が選ばれました。第一陣は隣の釧路屯田と共に、東都丸という船で、六月十八日神戸港を出発、途中五ヶ所に寄港して、六府県から集結した人に乗せて、十日後の六月二十八日に小樽に上陸しました。

当時は、狭い内地でくすぶっているよりも一旗挙げようという風潮がありました。中には北海道には地面に金が落ちてゐる、かき集めれば自分の物にできるなどとデマさえ飛んでおりました。しかし、木の葉は落ちて金など落ちていないのは当然ですが、がっかりした開拓者もあつたとのことです。

県によつては屯田兵制度が理解されず、まるで罪人になつていくような見方をされて、役場でも相手にしないところもあつた。とにかく、情報が未発達で、どんなところかわからず、外国へ移住する気持で生れ故郷を後にしたのが実情でした。

小樽に上陸した一行は汽車に乗つたのですが、客車ではなく、石炭を運ぶ台車に TENT を張りゴザを敷いて旭川へ到着、ただ一軒の旅館三浦屋で一泊。第一陣五百人、鯨詰め一夜を明かしました。七月一日、早朝五時集合、やはり無蓋台車に乗つて終点の比布町蘭留まで来ました。鉄道は和寒まで工事中で、特別に建設列車を利用して輸送されました。石狩国と天塩国の国境の険しい坂は、線路が敷設されて間もないため、振動が激しく、機関車に給水車と一輛の台車だけをつけ、やっと塩狩峠を越え、士別の隣の隣、和寒に着いたのです。

和寒からは只一筋の荊分道を歩いて、二十キロ先の士別へ向いました。子供を背負い、

手を引き、年老をいたわり、和寒の東の山のすそ伝いの道は、両側は未だ斧鉞おのまさかりの入らない原始林で、あたかも林のトンネルを通るようで、昼なお暗く気がめいるようだったといえます。

何せ二十八県からの寄せ集めです。屯田兵百人と家族を合せて六百二十二人。意気揚々として進む屯田兵もあれば、下駄履き、草履、モンペ姿、長袖にいたいこ帯の少女、菅笠姿やこうもり傘をさす人、かすりの着物や縞の筒袖等々、さながら風俗行列でした。

泥炭地 耕すべくも あらぬとふ さはれ美し 虎杖いたどりの秋

この歌は、十年後の明治四十三年秋、文豪徳富蘆花がこの地旅行の途中で詠んだもので、市内に歌碑が建っています。一面に黄葉した初秋の虎杖の美しさを詠っていますが、屯田兵入地の夏は、連日の炎天に乾燥した道は盛上って、土は丁度ゴムの様にプカプカとして土煙をあげながら歩きに歩いて、ようやく剣渚村ビバカルウシの舟付場に辿り着きました。

これより先は道は全くありません、老幼女子は、看護兵が付いて、アイヌの人の丸木舟数隻に分乗、剣渚川を下って旧観月橋のもとに上陸しました。この舟付場は道路橋梁が整備されるまでの輸送の拠点で、剣渚町史跡に指定されています。旧観月橋のもとには、

「土別屯田兵家族上陸の地」の碑が建っています。

和人がアイヌの土地を奪ったとか、とかく抗争のみが強調される昨今ですが、隣の名寄にはアイヌの人と結婚していた和人も居り、交易も盛んで、草分けの新保寅吉はアイヌの人を雇用して、丸木舟で資材の運送がなされ、協力関係もあり、開拓の協力者でもあったわけです。

一方、屯田兵及び壮健な家族は、剣渕村屯田兵第三大隊本部（今の剣渕小学校前）に立寄り、昼食をとって陸路、樹林をぬって、今の南士別から南町にでて、大通を経て士別に入りました。屯田兵の移住を待ちわびていた草分けの大内勇記氏、後に大内渡船場を開設した人ですが、兵屋建設に携わり将来を見込んで残った工匠の高島与作、木挽の清光勝太郎、鳶職の吉方市蔵、それに士別市街地商店第一号開店の河村米三郎の各氏は虎杖いたどりで歓迎アーチを作り、紋服に威儀を正して、感激の萬歳を叫びながら一行を迎えたということです。

開拓のはじめに神祭り

屯田兵屋は士別神社の森の西下、神社通から北側に東十戸、西六戸という風に、一番か

ら百番まで、番号がついて並んで建っていました。ですが、雑草や熊笹にさえぎられて、割り当てられた家を探すのも一苦勞でした。六十七番の家が士別市立博物館の横に士別市文化財として復元保存されています。天井もなく半分が土間になっており、家の中までフキや虎杖いたどりが伸び放題という有様。「もう内地へ帰ろう」と泣き出す子供もいました。しかし当時はロシアに対する防衛と開拓は至上命令、逃げ出すことなど不可能でした。

その夜は遠い人は一キロ以上離れた中隊本部、今の寺田医院あたりに、炊き出しのご飯をもらいに行ったはいいが、帰りは道に迷った人もいました。夕暮れになって、やっと家族揃って開拓の第一夜を過ごしたのです。

士別屯田は七月一日と二日、十二日と十三日の二陣に分かれて入地しました。全員が揃った七月十三日の夜のことです。丁度百番目、清水喜助さんの家が、火災に遭って焼き出される災難が起りました。七月とはいえ寒い夜で、炉に火を入れたところ、灰の中にカナ屑が埋まっており、あつという間の全焼でした。密林のため、火事に気がついたのは、ほんの近くの人だけ、今聞くとウソのような話です。焼け出された清水さんは、隣の剣淵屯田の空屋に転出を余儀なくされました。中隊本部では指令を出して、炉の下を点検するよう命じたとの事です。今の視点からすれば士別における欠陥工事の第一号になるかもしれ

れません。

いよいよ開拓をはじめようという矢先に、思いがけない災難です。屯田兵と家族の人たちのショックの大きさは大変なものでした。

中隊長名越源五郎大尉は、この動揺を静め、心を一つに緊急事態を乗り切ろうと、幹部に議りました。そして、練兵場の一角に四本の落葉樹を植え、しめ縄を張って、真中に「天照大神」と墨書した木標を建て神祭りをして、入隊式を行ったのです。

明治三十二年七月十五日、「兵員は掟を守ります」と誓い、ここに屯田兵第三大隊第五中隊九十九人の士別屯田兵が正式に発足しました。午後からは、屯田家族も一戸一人召集、天照大神の木標の前で「兵員に協力して開拓に従事します」と誓いました。これが士別の開基、開拓の礎であり、同時に士別神社の創まりです。いらい士別まつり、士別神社の例祭日として、盛大なお祭りが行われてまいりました。間もなく百八回目の今年の祭典を迎えるため、二階の奉賛事務室に役員さんが詰めて、準備を進めているとあります。

三年後の明治三十五年、士別村が剣渕村から独立を機に、名越中隊長は標柱を祠に改めることを一同に議りました。そしてそれまで無名だった今の鎮守の杜が、九十九人の屯田兵に因み九十九山と名づけられ、共同作業によって三尺四方の神祠を建立しました。士別

神社の現在地への鎮座です。

鎮座祭を奉仕したのは、当時の東旭川村社芦原伊佐雄社掌、今の旭川神社芦原高穂宮司さんの曾祖父に当る初代で、上川地方先駆神職の一人でした。

地域共通の心の支えに

屯田兵の規律は厳しく、毎朝五時に起きて訓練、非常召集もしばしばありました。道路開削、灌漑溝掘りなどでも拘束され、家に帰るのは夜暗くなってからでした。従って農作業は家族皆んな、子供まで協力して荒地を開いた訳です。開拓の功労者は家族だったといわれる所以です。

大木を伐るのは大きな鋸のこぎりや鉞まさかり、畠を耕すのも鋤や鋤、全て人の力。ブルドーザーもトラクターもない時代、重労働でした。冬は零下三十度を越え、布団の襟はカチカチに凍り、吹雪が隙間から入って一尺も積ったりしました。

屯田以外の開拓者はこれ以上大変でした。こちらは土台のない掘立小屋、ワラを積み上げて寝床にする。風呂にも入らない冬眠のような生活でしたが、却って暖かった、とはいいますがー。

困ったことは、士別屯田は二十八県人の寄せ集めで、今のように学校教育による標準語が普及していませんでした。それぞれのお国言葉、方言のためチンプンカンプンで言葉が通じません。困り果てた中隊本部では、標準語の講習会を開きました。さしずめ士別の生涯教育第一号といえましょう。

また当時は鳥獣の棲み処、特に野ねずみが多く、農作物は荒され冬は家の中で悪さをする、上士別の開拓地では眠っている人の頭がかじられた事もありました。ところが猫がいません。北海道庁に陳情して三匹の猫が配給になりました。くじ引きで決めましたが、当たった家はうらやましがれた、という話も残っています。陳情第一号、猫の事始めです。

こうした屯田兵はじめ開拓者の苦労によって、今に見る開けた士別となったのです。これは何も士別ばかりではありません。開拓地ではどこでも同じように、故郷に帰りたい泣きたい気持ちを打ち払って、がんばった開拓者の不屈の精神がこもっております。

原始林との闘いに打ち勝つには、共通の心の支えが必要でした。必ず神社を祀って、地域全体の開拓守護神、共同信仰の場として仰ぎ、北海道の開拓は成就したのであります。

北海道は海岸線から開けました。一番古い神社は函館の船魂神社、平安末期保延元年（一一二五年）、海上安全を祈って、仏教の融通念仏宗開祖の良忍上人という高僧によって

祀られたと伝えられます。神仏習合の時代でした。道神社庁が刊行した『北海道神社史』によりますと、平成十一年道内公認神社数は単立を含め約七百社、戦前の国の神社制度で一村一社のみ公認となり。未公認神社が二千社以上あると推定されています。この内八割以上は明治になってから創建されました。殊に内陸部の上川、空知はすべて明治以降開拓された地域です。

開基と同時に創建という土別神社の例は少ないのかも知れません。ご創祀の形態としては、それぞれのふる里の氏神さまから、ご分霊を戴いて背負って入植しお祀りした例、或いは開拓の木を伐採してそこへ神様をお祀りする、いわゆる切株神社という形、やや落ちて着いたところでゆかりの神社から分霊をお迎えしたところ、また村役場開庁に当たって、庁舎内に神明を奉斎して開拓民の心の支えとした鷹栖神社の例など、さまざまであります。石井壽夫先生の言葉をお借りすれば、二千年来の信仰を、北海道という処女地によりみえらせたのが北海道の神社、つまり二千年来の伝統あればこそ、地域を中心には必ず神社が祀られたのです。

藪は畑に畑は田になり轉れる

そば蒔きからはじまって、薄荷、亜麻、馬鈴薯、除虫菊、ビート等々、時代と共に主流作物は変遷しました。ですが、米作への願望は事の外大きいものでありました。

当初、塩狩峠を越えて上川北部では稲作は無理といわれておりました。名越中隊長は今の北海道大学、札幌農学校出身ということもあつて米作に理解がありました。

入地の翌年の明治三十三年西暦千九百年ですが、二戸の屯田で水稻を試作、このうち畑善藏氏は三畝作つて五、六升の収穫でした。一般開拓者も明治三十四年試作しています。が青米が多く、馬糧のわらを獲るのが主目的でした。馬は農耕の主役となり、特に士別は多く飼育され、雪の道路は馬糞の山となり、馬糞まちの異名があつたほどです。

本格的な米作りが盛んになったのは大正中葉以降で、次々と造田されていきました。

藪は畑に 畑は田になり 轉れる

境内の句塚の真中に刻まれている句です。当地方俳句の大先達、荒谷松葉子が作句したものです。藪が畑に開拓され、やがて水田美田が連なつた状景を詠んでいます。

冬は積雪も多く、零下三十度以上になりますが、夏もプラス三十度を越える日がある大陸性気候のため、士別は北限の米作地帯となりました。昭和四十二年には産米五十五万俵を突破、単一市町村日本一を記録しました。市民会館大ホールに祭壇を設け、産米

五十五万俵突破豊穰感謝祭を行い祝ったのでした。

天塩川上流総合灌漑排水事業も起工、昭和四十五年には待望の岩尾内ダムも完成、水の心配が無くなったのに反比例して、皮肉にもこの年が減反元年、米の生産調整がはじまり、今や六割以上が畑への転作を余儀なくされております。

北海道の食料自給率は一九二%、我が国はわずか四〇%。品種改良も進んで、穫れるのに作れないとは勿体無い話。私のような食べるに食なしを経験した飢餓世代には、何とも納得できません。

終戦後の六十年前、米よこせデモが皇居にまで押し掛けたのです。

そのころの歌

豊葦原の 瑞穂の国に 生れ来て 米が食えぬとは ウソのような話

若い皆様に、食糧不足のお話しをしても、それこそ、うその様な話に思われるかも知れません。ですからかつて忍法作家として活躍した山田風太郎氏は、次のように改作しています。

東海の 小島に一億 ひしめきて 米が余るとは うそのような話

経済大国になって、お金の力で途上国等から食糧を買い漁っているからです。

士別は敵機来襲や戦災も無かった穀倉地帯、農産加工場や木工場が立並び、焼け野原となつた都会からの疎開工場も盛業を極め、生産都市として敗戦後とはいえ、すこぶる元気でした。

自慢しましょか 数えてみよか 並ぶ工場の 黒けむり

或いは

天塩川原を はてなく染めて かすむ馬鈴薯 花ざかり 黄金波打つ 稲穂の唄よ

昭和二十三年、開基五十年を記念に公募、唄われた「士別小唄」の一節です。

士別祭りを中心に七月十三日から十七日まで、産業振興博覧会が催されました。十五日は広い農村地区も含め、破天荒といわれた士別中のトラックを連ねての自動車渡御で士別全町を、夜八時近くまでかかつて巡りました。初めておみこしを迎えた市民の奉迎ぶりは熱烈で、ある地区では期せずして一斉に萬歳の声がわき起こった事が、語り草になっております。

当時二万人の人口、博覧会入場者は六万五千人を突破、会場の士別小学校は人波に溢れ、開闢以来の人出となりました。飢えていた都会では珍しかった水飴や澱粉、乾燥野菜、ビスケットなどを買い求め画期的成功を収めたのでした。非常時に強い田舎の底力を発揮し

たといえましょう。

地方の時代、北国の意志を

昭和二十九年、昭和の合併で近隣の上士別、多寄、温根別三村と合併して士別市が誕生しました。更に今般の平成の合併で、昭和二十四年上士別から分村した朝日町と対等合併、平成十七年新士別市が発足しました。ですが、最盛期の昭和三十年代、四万三千人を数えた人口は、朝日を含めて二万三千人に減少、高齢化の進行、後継者不足著しいものがあります。

この事は士別のみならず、地方がかかえる最大の悩みです。北海道は東北六県と新潟県を合わせた面積を持ちながら、一道のため、道都札幌圏への一極集中が極端に進行中です。十年後には五百七十万の人口の半分が札幌圏に集中すると予想されております。

最近、団塊の世代という言葉が、よく出てきます。昭和二十一、三年頃は人口が急増して、産児制限の啓蒙に大わらわでした。これ以上人口が増えたと、餓死者が増える、事実餓死した人も沢山おりました。それが、六十年経って少子化が進み、少子化対策が問題の時代に大転換したのです。

価値観も大きく変わりました。経済や科学一辺倒の冷たい心だけでは、幸せになれないことが判ってまいりました。

鎮守の森の効用も再認識されています。士別神社の境内は約十町歩（三万坪）、道内では北海道神宮に次ぐ広さを誇っています。戦後の窮乏期や土地ブームの時代、道内の神社境内は切り売りで、ずいぶん減少しました。当社は屯田開拓ゆかりの神域護持の市民意識が強く、本当に有難いことです。

市街地に隣接した憩いの森、北海道の環境保護地区に指定され、財団法人森林文化協会の北海道自然百選にも選ばれており、今後とも公共性の保持に努めて参りたいと思っています。

人類は現在、環境問題という最大の危機に直面しているといわれます。私たち日本人の祖先は、太陽を拝み、山や森を崇拜し、風や水、火をも祭ってきました。戦後、未開野蛮な迷信と蔑まれました。

しかし、太陽の光、きれいな水、澄んだ空気、豊かな緑こそ、人間が生きていくための根源です。環境問題の解決には、神道の心を活かす以外ない、と世界から注目される時代が到来しました。

北海道、中でもこの地方は極めて厳しい状況にさらされております。

直ちには 海に下らず 北を指す 天塩川は 北国の意志

平成十二年、境内に建てられた歌碑に刻まれています。士別でかつて眼科医院院長だった歌人でもある斉藤昌淳氏が詠まれた歌、地方の時代が叫ばれる昨今です。必ずや過疎地に脚光が浴びる日が再来することを確信して、北国の意志、開拓魂を振り起さねば、と心を新たにしているところでございます。

皆さまともども、石井先生の予言を信じ、実現に努力しようではありませんか。なお、石井先生の予言について書かせていただいた小文のコピーをおくばりしてあります。ご一読賜れば幸いに存じます。

付記 士別屯田については学生時代、当時氏子総代の阿部儀一郎氏、屯田兵で後に町役場助役を勤められた方に取材お聞きした話、『士別市史』『士別よもやま話』等を参考にさせていただきました。

北海道新聞

北 海 道 新 聞

1993年(平成5年)4月27日(火曜日)

好まな言葉

「あな、たのし〜、とほし〜と書けばよいのに、
『古語拾遺』の一節。うれし〜といふことであれば、
ああ、と書けばよいのに、
言いつらく、あな、と書いたのはなぜか。実はここが穴なんです。あ、とは舌（あ）れな、とは汝（なれ）。」

昭和二十四年、日蓮上人の「謗法(ぼうぼう)の国はびなむ」を引いて、ソ連の亡国を予言した道の師、石井寿夫先生から、いつも聞かされた言葉である。師は大学教授への道を

あな、たのし!



打ち捨て、原爆により焦土と化した広島から、ひたすら道義日本の建設と理想の地球国家実現を説き巡られ、一昨年清貧の生涯を終えられた。

家庭の崩壊、政治腐敗など、心の焦土は経済的繁栄

に比して広がり一方の日本。世界に目を転じて、紛争や戦争にゆれ動く世紀末の様相で、あな桑しとは

だが、家庭や職場での、あな桑し実現に努力しつつ、全人類があな桑しと喜べる、理想への道は眞失いなくないものと思う。

(土別市教委教育委員長)

笑い飯^{めし}

佐藤勇穂

さて、皆さんはこの「笑い飯」とは何かご存知でしょうか。同じ系列のグループに「オリエンタルラジオ」「南海キャンディーズ」も含まれます。これでお解りでしょうか？大ヒント「明石家さんま」「桂三枝」も同じグループです。もうお解りでしょうが、この方々は、すべて浪速のお笑いカンパニー吉本興業所属のタレントです。吉本興業は、所属タレントが「休みを下さい」というと、「一生やすましたるか？」と返される名物会長率いる大証一部上場企業です。近年は、お笑いブームといわれ、お笑いタレントの活躍の場が非常に多いことから、殺伐とした事件、事故が多いこの今の時代が「笑い」を欲しているのかもしれない。今日はお笑いブームに乗って「笑い」についてお話させていただきます。

私は、こう見えても「駄洒落」好きです。ただし、友人より「おまえのギャグ古い」とつっこまれます。それでは、古い笑いはどのようなものでしょうか。私達神職の教科書、日本人のルーツを知る書物である「古事記」では、石屋戸の段で、石屋戸にお隠れになっ

た天照大御神のお出ましを願ひ、天宇受売命が石屋戸の前で踊ったところ「高天原動りて、八百万の神共に咲ひき」と記されております。その様子をご覧になった天照大御神が石屋戸からお出ましになり、世の中に明るさが戻ったのであります。八百万の神々の笑い声が天照大御神を石屋戸から引き出すきっかけとなったことが伝えられておりますが、遙か神代より笑いには人々の心を一つにし、幸せを招き寄せる不思議な力があると信じられていたのかもしれませんが。また、日本書紀には応神天皇の条に「歌既に訖りて、即ち口を打ちて仰ぎ咲ふ」とあり、これは、右手を口にあて、左手を床について上体を右斜めに傾けて笑う「国栖奏」という神事で、奈良県浄見原神社において毎年旧正月に奉納されています。この「国栖奏」は、中世までは、大嘗祭などでも行われ、今上陛下の御即位にあたっても、宮中で披露されました。

その他、伊勢では、玄関に「笑門」と書いた注連縄が掛けてあり、まさしく「笑う門には福来たる」ということのようにです。「笑い」は、コミュニケーションの潤滑油であり、現代医学でも笑うことが健康によいことが解明されつつあります。私は、この「笑う」ことの重要性について、父より「困った時ほど笑って」と学びました。父は、高等学校の古典教員で、主に定時制を担当していました。当時は、大変失礼な言い方ですが、いわゆる

「ヤンキー」な方々を相手にしていたそうです。ただ、怒らない先生ということで荒れていた生徒もついつられて笑ってしまいうそうで、退職後も親交があるのは当時のそういう生徒が多いそうです。

先に紹介した「笑い」の祭りはごくごく一部であり、山口県「笑い講」、和歌山県「笑い祭」など特殊神事、神楽に多く伝承されています。この背景には「笑い」というエネルギーが祓いなどの特別な力を持っていると信じる人の思いがあるのではと思います。

最後に一首、

飛びたちて 大空にまふ こふのとり 仰ぎておれば 笑み栄えくる

どなたの歌かもうご存じでしょうが、秋篠宮妃殿下の本年宮中歌会始の御歌であります。今年のお題は「笑み」ということでこのようにお詠みになりました。御懷妊が発表されて、皇室典範改正、女性天皇などの議論が活発になってきましたが、私達は、百二十五代に亘り連綿と続くこの伝統を護持しなければなりません。お子様の御誕生により日本中に「笑み」が溢れることと思われまふ。

「笑い飯」というのは二人組のお笑いコンビで、お笑いで飯が食べられるようにということでしょうが、私は、そのように考えておりませんので、お間違えないようにご注意ください

さい。普通にご飯がいただけるようにがんばります。

(北海道 土別神社 権禰宜)

思う心

村田和弘

今の日本、スポーツ好きな人の半分以上の人達の「思う心」は何と言つてもワールドカップ、ジーコジャップンの事ではないでしょうか。私自身、野球少年でありましたので、サッカー事態にはあまり興味がありませんが、ワールドカップと言う言葉を聞くとつい思いになり日本はどうなるのだろうと思ひ夜遅く迄サッカーの試合を見てしまうのです。

年配の方々が思う「思う心」と言うと、大半の人達は子供や孫の事を一番に思う事だと思っています。例えば、正月やお盆には結婚して家を出て行った息子、嫁に行った娘達が里帰りて帰つて来る。当然孫達を連れて来るのを楽しみに首を長く長くして待っている事だと思っています。いざ、帰つて来ると一番に元氣にしていた？病氣などしていない？と声を掛けて、コミュニケーションを取っているのが当たり前、仮に声を掛けて返事をしなかったら、返事位しなさいと怒られるのもごくありふれた光景だと思っています。

挨拶を済ませ家に入り、神棚や祖霊舎・仏様にお参りする。それから祖先のお墓参りに出

かける。こうした出来事が、ごく普通の当たり前の事でしたが、最近ではどうでしょう？。お正月もお盆にも帰って来ない。ましてや、連絡もサッパリ無い。心配して連絡してみると誰も居ない。珍しく連絡があると、今度、子供が学校でクラブを始めて色々とお金が掛かるからお金を貸して貰えない？と一方的な自分勝手な内容の話をして電話を切る。これも良くありがちな話しだと思います。

久し振りに実家に帰り、皆で色々な事を話しながら夕食を囲むと、孫の話しになるのは当たり前の事。しかし話しをしても返事をあまりしないのも今の子供達の特徴だと思います。最近、ある小学校のお母さんから聞いた中での話です。私が子供の頃は見知らぬ人達から声を掛けられたら「おはよう」とか「こんにちは」・「こんばんは」と返事をしていました。今頃の半分以上の子供達は返事をしませんとキツパリ言われました。何故なら、見知らぬ人にでも簡単に返事をしていたら何処かに連れて行かれてしまう危険な世の中ですから、私の子供には知らない人から声を掛けられても知らないふりをしなさい。と言いつけてます。とハッキリ言われました。

この様に普通の挨拶さえ出来なくなっている今のこの平和な日本、何処か歯車が狂っている様に思います。

今年の四月、私の兼務神社（高乃宮神社）の研修旅行で九州の鹿児島知覧へ行つて参りました。当然「知覧特攻平和会館」にも行き色々な「遺書」「遺詠」等を見て来たのでございます。時間等の関係で全てに目を向ける事は出来なかったのですが、色々と拝読していると自分の弱い気持ちを表現している書物は一つもありませんでした。「元氣に行つて来ます」「後をお願いします」と必ずと言って良い程、どの遺書に書いてあります。それはこの祖国日本を守り今からの日本の事を思い、全身全霊を込めて出撃して行つたからだと思ひます。

今の日本は「平和な国・豊かな国」です。しかし、心の貧しい国だと言っても間違いではないと思ひます。事実、世界各国を回られた「インドのマザーテレサ」の言葉の中に、世界には貧しい国が二つあります。一つは物資共に貧しい「インド」の国、もう一つは心の貧しい国「日本」とハッキリ指摘されました。その通りだと思ひます。

この日本の現状を戦死して行つた人達が知るとどう思う事でしょう。涙無しでは語れないと思ひます。

私は思ひました。小学校・中学校等の学生の修学旅行、海外へ行くのも良い事でしよう。しかし「知覧」へ足を運び先人達がこれからの日本を「思う心」を知る事が、今の日本を

変える一番の勉強の場の一つだと思います。今の平和な日本があるのは戦死して行った先人達を作ってくれたと言うことを忘れず、後世に託した思いを踏みねじる事無くすばらしい日本にして行きたいと思います。

(広島県 長束神社 禰宜)

愛の輪

畠田明彦

私は二十数年前、皇學館大学に在学中、合気道部で毎日汗と血と涙を流しておりました。四年間の学生生活を振り返りますと、神道を勉強していたと言うより、部活に励んでいたと言う方が、そのウエイトが大きいように思います。又一昨年にお若くしてお亡くなりになられたのですが、大学の十一年先輩であり、合気道の師範でありました岩垣先生の厳しく暖かいお言葉が、社会に出てからも辛い時、苦しい時の支えとなり、お陰で松尾大社での厳しい日々を何とか過ごさせて頂いております。

さて本日はこの合気道の開祖であります植芝盛平翁先生のお話をさせて頂きたいと思えます。

開祖は明治十六年、和歌山県田辺市の農家に生まれ、税務署勤務を経て文房具卸売り業を開業、その傍ら起倒流柔術・神陰流剣術・柳生心眼流柔術を学ばれ、日露戦争兵役後、北海道紋別郡白滝村の原野に開拓農民として移住。八年間の辛苦の末、開拓を軌道に乗せ

られました。又この間に武田惣角を招いて大東流合気柔術を学んでおられます。

大正十一年、各流の武術の修行を重ねた末、気・心・体がひとつとなった合気武術を誕生させ、昭和十七年に正式に「合気道」と命名、国内はもとより世界中にその名を広めました。開祖の道場を訪れた、かの有名な嘉納治五郎をして「これこそが私が理想とする武道である」と絶賛せしめたのであります。現在世界五十六ヶ国、約百五十万人が各道場で汗を流しております。

開祖は青年の頃、南方熊楠の「神社合祀反対運動」に共鳴し、晩年には茨城県笠間市に合気神社を建立されております。神道に大変熱心な方であり、それが合気道の根本理念となつて行く訳であります。

合気道とは相手を倒すのではなく相手を育てるもの。破壊するのではなく創造するもの。合気は愛気、天地の氣に和合し、愛と和の武術をもって人類を一家たらしめる。これが合気道の目指すところであります。

勝敗を争うのは真の武ではない。真の武はいかなる場合にも絶対不敗である。即ち絶対不敗とは絶対に何者とも争わぬことである。勝つとは己の心の中の「争う心」に打ち勝つ事である。己の邪気をはらい、宇宙森羅万象の活動と調和する。己を宇宙の動きと調和さ

せ、己を宇宙そのものと一致させる。それにはまず神の心を己の心とする。神の心とは偉大なる「愛」である。「愛は争わない」「愛には敵がない」開祖はこう説かれています。

神道をその根幹に置く合気道の極意とは、古事記の上巻にあると開祖は仰っています。それは「天の浮橋に立て」と言う事であります。伊耶那岐伊耶那美二柱の大神が、天の浮橋に立たれて沼矛をさし降ろし、搔き回されて漂う国土の修理固成をなされます。この神業こそが合気の極意であります。天の浮橋は天と地を結び、己と宇宙を結び、心と体を結ぶ。心は体を動かし、体は心によつて動かされる。その動きが螺旋であり、自己を動きの中心に置き、左右に旋回しながら氣を流す。二柱の大神の氣の交流が神を生み、国を生んだわけであります。この神業に習う合気の動きは円であり球であります。その型を習うのは癖を取り除き、自己の動きを神の動きに合わせると言う事であります。

黄泉の国で伊耶那美命の追っ手に伊耶那岐命が投げつけた邪氣を祓う「桃の実」が合気であり、伊耶那美命が「現し国の者どもを一日千人絞殺しましょう」と申されたのに対し、伊耶那岐命が「そのようなことをするならば私は一日に千五百もの産屋を建てよう」と仰せられた、この「産屋」が合気の道場であります。

人類の歴史は闘争の歴史でもあります。闘争は武力を生じさせます。現代の平和がその

武力の均衡によって保持されつつある中で、開祖は「武は愛なり」と説かれました。

愛の道、それが合気道であります。

最後に開祖のエピソードの一つを紹介させて頂きます。

ある時、開祖が剣道柔道の高段者の猛者たちと畑の中の道を歩いていました。するとそれを見たお百姓が手に肥ひしゃくを持って駆けつけて来て、「ひとの畑に勝手に入ってどうしてくれるんだ！」と文句を言つて嫌がらせをしました。「何！生意気な！」と相手をしてしようとした血氣盛んな猛者たちを開祖は制して、「我々が悪かった、どうか勘弁して下さい」と頭を下げられました。強欲者のお百姓は、何かあつたら肥ひしゃくの中身をかけてやろうと氣負っていました。拍子抜けをして帰って行きました。猛者たちが「先生、あんな生意気な百姓やつつけてしまえばいいのに」と言う、と、「馬鹿言いなさんな。頭からこやしをかけられたら臭くてたまらんよ。ハハハハ」と開祖はそう言つてそこを去つて行かれました。後でよくその事情を聞くとお百姓の方が悪かったそうです。そして「悪を惡として切らず、悪を祓い浄めて和合してゆくのが合気道じゃからのう」と諭されたそうです。愛を見失いつつある今の社会。合気の動きの如く円い心を以て愛の「輪」を広げ、それが大きな「和」となるべく、その一助を担つて行きたいと思つております。

皆さん、機会がありましたら是非合気道を習ってみて下さい。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

神の御恵みを信じて

河野 誠

私は幼い頃、こま伯母さんに何時も「お前は生まれた時は『おぎゃあ』と泣かないので、わしが足を持って振り回したら泣き始めたんで」と、よく私が生まれた時の様子を聞かされました。このこま伯母さんのお陰で今の自分があるのだなと思っています。このこま伯母さんをして、わが足を振り回させたのは、神様の御恵みに他ならないと思っています。

毎月旧の二十八日だったと思いますが、母に背負われて、山坂を越えて約一時間ほどの所にある大浜灯台の岩場に祀られている大立場の観音様に、こま伯母さん等と四人程で朝四時頃お詣りしていました。それと同時に毎朝我が家の裏にある氏神様にお参りしていました。私の母方の祖父は小指を切りとって、熊本の清正公にお供えしたと聞かされていました。このようにして、私は信心深い母親に育てられました。

私が初老を迎えた時、女性の三十三歳の時のクラス会で貧しくて会費も払えなかった悔しさを晴らしたいと思い、二十有余年絶えていた伝統の神楽を復活奉納することに決めま

した。偶々、九十八才の現職宮司の処遇について、このままではいけないので、このお宮の本家に当たる中庄の八幡様にお返しし、祭事をお願いしようと総代会で話題になっていることを、境内で奉納神樂をしているのを見ながら、総代の一人から聞くとともにしに耳にしました。考えてみると元旦を除いた祭典は日時を変えれば済むけれど、元旦だけは兼務社となれば宮司不在のお宮となります。これでは態々故郷に帰って来られた出郷者の方々はどんなにか嘆かれるだろうと思いました。偶々、伝統神樂復活に尽力している私を見られ、自分の後継者にしようと思をかされた九十八歳の井川米丸宮司は、後継者にと私に白羽の矢を立てられました。私は神職のこと等全然知らぬまま、故郷を思うただ愛郷心のみで、一言で氏神様の神主に成る事をお受けすることにしました。

氏神様の森の風を子守歌として育った私の、いい意味での宿命だったように思います。総代会も全員一致で私の宮司就任に賛成との事を告げられ、神職の資格取得の勉強を始めました。三年後の昭和四十四年に正式に宮司となりました。就任当時の総代長は、大祭の終了後報告に行くと、今までにない祭の盛大さを目の当たりにし、どれだけ自腹を切ったかと心配して下さっていました。

町外に住んでいて祭典のときだけお宮を開けての奉仕を長く続けました。一方、井川支

部長の後をうけて、支部長になり、又神道界の指導者である石井壽夫先生、佐古幸嬰先生との出会いに恵まれましたのも、氏神様の御守護の賜物と有難く何時も感謝致しております。

思えばこの大会への参加も昭和五十八年の太宰府天満宮で行われた第四回全国大会を初回とし、爾来今年で二十二回目となります。その間、心臓のバイパス手術の術後のため、京都をやむを得ず欠席した以外は毎年続けて参加させて頂いています。これは偏に氏神様のお恵みによるものです。お陰で今年もこうして皆様にお会いできたのです。

私達は神様のお恵みを頂いてこの世に生を受けたことは勿論ですが、日々の暮らしにも常に神様のお恵みを頂いております。毎日頂くお食事を始め、人々との出会い、その中でも生涯生活をともしする人との出会い、即ち結婚は「神様よりご縁を頂き」と申しますように神様より頂くなかでも、最たるものの一つです。私はお陰さまでこの世の中で、一番よい人とご縁を結ばせて頂きました。その妻は既に亡くなりましたが、この妻在っての私でした。私の本業は二十代には山々を歩き廻り鉾石を探す鉾山業、三十代に入り子供を教える学習塾を始め、教職の経験があり、子供を教えることの好きな妻の内助の功により、子供や父兄の好評を受け、塾は繁栄しました。十有余年の苦難時代を乗り越え、人並みの

暮らしを始めたのは、実に三十七歳を過ぎた頃からでした。然し考えてみれば、その労苦があつたからこそ、人の苦勞も理解できるし、社会の機微も分かる様になれたと思います。人間の経験すること、一つとして無駄なものはないのです。苦勞を苦勞とせず、総てを神様から頂く試練と、有難く頂くことこそ大切だと思います。病氣をして初めて、健康の有難さを感じます。病弱な人の見舞の仕方は、病氣を知らない健康な人のお見舞の仕方とは違つて、言葉に温もりを持つているようです。病氣を経験して初めて病人の苦しみ悲しみが理解できるのでしょう。苦樂は総て神様の御恵みであることを信じて、謙虚に明るく過しましょう。そこには必ず幸福な笑いが待っています。

ご静聴有り難う御座居ました。

(広島県 齋島神社 宮司)

倭心に歸ろう

井手 潔人

総代の皆様お祭りご苦労様でした、今日はちょっと変わった観点でお話をしてみようと思います。

日本民族が、何時、どこから来て日本列島に住むようになったかは定かではありませんが、日本国家が大和朝廷を中心に成立したのは約二千年位前と思われます。これより以前は古代と言われ原始的ではありませんでしたが単純素朴で神々の世界が人々の身近にありました。文化も手法は単純素朴で清純でおおらかな精神を宿して、社会生活は狩猟や漁労だけに頼る縄文式時代から農耕と金属器の使用を伴う弥生式時代に発展してまいりました。この時の稲作が重要な生活手段で、神社でのお供え物の一番はお米であるのはここから来ています。

農業と自然との深いかわりから人々は太陽をはじめ自然の力を神と仰ぎ、豊作を祈る祭祀が盛んになって来たのであります。

大陸からの精神文化の伝来に伴い、日本人固有の民族信仰も次第に豊富になり、神道として独自の発展を遂げるようになって来たのであります。

日本人の古代の信仰は、自然・人事全てに心靈の力を認め、一切は神の恩恵によつて育成せしめられると考えられてきました。

したがって日・月・風・雨はもとより山も川も草木までも全て神とされ、人も死ぬと神の座に帰ると信ぜられました。農耕において春は祈年の祭り、秋には収穫の感謝を込めて新嘗の祭りを行うようになりました。

又祖先の神或いは地域の神を祭つてこれを氏神・産土神として幸福を祈念致しました。

そして最も高貴な自然神である日神は、同時に皇室の祖先神と信ぜられ、皇祖神として天照大神が祭られました。

又天皇は日本国家の統治者であらせられたため、伊勢の神宮は次第に全国民に崇敬され、その祭神の天照大神は日本の中心の神と仰がれるようになってきました。それが現在各家庭に祀られている「天照皇大神宮」の御神札でございます。その後いろんなことがあったわけですが、当社の本社である阿蘇神社が豪族としてこの地に移り住んだのは八百年前の鎌倉時代の事であります。

元の阿蘇へ帰るまで三百八十年間矢部地方肥後の地を治める等隆盛をはかってきました。その間小一領神社は守護神として君臨してまいりました。この山の中で時代を大きく左右する等神が宿っていたのです。矢部地方が栄えたのはこの阿蘇家が在城していたに他ならないのです。

明治維新は王政復古とともに祭政一致を理想としてきました。それまでは神仏習合の時代で、奈良時代にみられた仏教信仰が国民の間に深く根を下ろしたのは神仏習合の思想によって日本の伝統に結びついた事によります。

明治元年政府は神仏分離令を出し神社及び神職を古来の姿に返そうとしましたが、仏教側も国の施策に協力する事になり神職・僧侶を教導職に任じて国民の教化にあたらせました。

しかしながら、大東亜戦争において敗戦という憂き目にあい神社界は日本の真髓の思想を持つていると恐れられて、GHQより神道指令が発せられ弱体・弱小化されました。

教育も道德教育という名の下、日本の文化伝統が壊されて今、世の中は子が親を殺し、親が子を殺し、信じられない事件が毎日報道されております。戦後六十年経とうとしておりますが、この教育・道德破壊を元の形にするまでには百年では無理ではないでしょうか。

今国会で教育基本法改正は愛国心という語句でもめて成立しませんでした。日本国民の中それも中枢である国会議員でさえなかなかまとまりません。

一刻も余裕はありません。昔の倭心に帰り、住みやすい日本ひいては故郷山都町にしたいものです。その為には微力ながら私もお役に立てるよう努力する所存です。草の根運動のように粘り強く昔の倭の心を持てるように努力しなくてはなりません。

その為にはこの町も合併して山都町になったわけですから、この機会に心機一転、神宮大麻を各家庭に特に若い世代に頒布して、二千年余歴史と伝統に培われた道義国家を建設しましょう、山都町もまだ捨てたものではありません。私もまだ新米神主ですが皆さんの力を借りて新しい町づくりに頑張ります。

(熊本県 小一領神社 宮司)

伝えられる命

今村早紀子

私は、長崎の大浦の鎮守諏訪神社の禰宜で、今村早紀子と申します。北海道は私の故郷です。歌でも有名なえりもで、今は兄が亡き父の後を継ぎ、住吉神社をはじめ近隣の神社の宮司をしております。

弟は、夕張神社を預かり、妹も二人が秋田と群馬に嫁ぎ、神社とのご縁は深いものがございます。

さて、私がこの度講演研修大会に参加を決意いたしましたのには、二つの理由がございます。

一つは、故郷の地であること。もう一つは、石井・佐古両先生の合同慰霊祭が行われる。この二つです。

実は、亡き父が敬愛するお二方と誼み深く、よく「講演講習会」に参加し、暖かいご指導を賜り、学びの道を深くした事を聞かされておりました。父が生きていれば、万難を排

して必ず参列するものと思い、亡き父に代り出席させていただきたいと思いました。

父が身罷って後に、私たち子供八人が力を合せ「温かき手のぬくもり」という、手作りの慰霊鎮魂のための小冊子を作りました。その過程で父が三十代の頃の講演講習会で話した講話の記録を見つけました。「ある婦人の生涯」という題の一文を読み、心清く、常に氏子を温かく思い、誠心誠意神前に奉仕する父の真摯な姿が目に見え、胸の熱くなるのを覚えました。

そのことを思いつつ今、ここに立っていることに不思議な縁を感じます。

私は、幼少の頃より病弱で、病院にもずいぶんお世話になりました。母は、「この子は成人するまで生きられるだろうか」といつも案じ、特別の心配りをしていたそうです。その母もすでに冥界の人となりました。この歳になって、つくづく子を思う親の心を思い知るのです。

十代になって、父は私の体のことを神に委ねるつもりであったと思いますが、正月に氏子の家々を訪れ、神棚に祈願する春祈祷に私を奉仕させました。えりもは歌にも詩われたように、波荒く寒風吹荒ぶ厳しい冬があります。振り仮名をつけてもらった祝詞をもって、私は親孝行と思い精一杯励みましたが、父は、心を鬼にして他の子供よりも神のご加護が

必要ゆえの厳しい修業を課したものだと思っています。そのことがやがて、私の神主への道を歩ませたものと思います。今日あるのは、まさにこの親のお陰ふたおやです。

前置きが長くなりましたが、昨今の世相を思うにつけ、心が深く痛むことがございます。それは、最も強い絆で結ばれているはずの親子が、傷つけあったり、かけがえのない命を奪ってしまう事件が多いことです。

私はこの悲しいニュースを聞く度に、平田篤胤の歌を思います。

玉櫛かけて祈らな世世の祖　おやのみおやの神のちはひを

櫛を肩にかけるように、心に掛けて、朝夕ご先祖様、その大本である神々を斎き祭って恩頼を賜わらんことを祈ろうではありませんかと。そして篤胤は、おやのみおやの神と言っているその心は、人間誰しも神の末裔であることに、誇りと自覚を持って、祖神様から受け継いだ神性（霊しひ）を汚すことなく、常に心明るく誠を持って暮して行くことを教え、気づかせてくれます。

現代に生きる人間が忘れている一番大事なことが、この歌に詠まれていると思います。物の豊かさのみをいたずらに追い求め、目に見えない大切な心の部分を置き去りにしてきたつけが、今の乱れた日本の国を象徴していると思います。

私は、齡五十の坂を越えて、ようやく辿り着いたことがございます。それは神の御心は、有り難い心と、心底思えるようになりました。

私の今日までの足跡を省みれば、苦しみ、悲しみ、辛いこと数限りなくございました。でも「苦しみは神の愛の証なり。神と深き縁結び、即ち己を生み出すことなり」という教えをいつも心に深く刻み、神様が私の魂を磨くために与えてくださった試練と思い、常に心明るく誠を以て努めあげたならば、神様は助けてくださる、誉めてくださると、幼子が無償の愛を注ぐ親を慕うように、かつて我が親が病弱の我が身を神に委ねたように、私も心身をご神慮に委ねつつ、前向きに生きてまいりました。それゆえに、苦しみを乗り越える度に、本当に神の御心の有り難さを身に滲みて感じるのです。

感謝の心を、そしてほんの小さな嬉しいこと、楽しいことも大事なものとして受けとめることのできる研ぎ澄まされた精神・誠心をもつことが、神の御心に添うことと信じております。

目に見える幸せには限りがあり、目に見えぬ幸いは永遠です。現実の生活には、不幸がつきものです。そのことをあげつらい嘆くより、私たちの命の繋がりは神に達するもの。それゆえに、神の御心のまにまに生きることによって、目に見えぬ真の幸福がもたらされ

ると信じていきたいものと思います。

最後に、私の拙い歌ではございますが吟じさせていただきます。

生かされて生きる我命 魂をこの世で磨き神の御許へ

この尊い時間を戴き、まことに有り難うございました。

(長崎県 大浦諏訪神社 欄宜)

大いなる河

生 鳶 經 和

早朝に京都を発ち、関西空港から空路旭川に着きました。旭川からは車で案内していただき、この土別の町へまいりました。途中の広大な北海道の景観は、普段京都という箱庭のような町に生活する者にとりましては、蒸し暑い梅雨の日々を忘れて、平素味わうことのできない爽快な気分を満喫することができました。

車窓から移り変わる風景を見ておりますと、所々で私共には余り馴染みのない、実に様々な地名を目にいたしました。この北海道の地名や駅名は、①アイヌ語を由来としたものの、②内地からの開拓・入植に際してつけられたものの、③周辺の自然状況・風土などから取られたものに分けられるようであります。二番目の例で云えば、本州と同じような地名が数多く残され、屯田兵の困難に満ちた開拓の時代が偲べれます。しかし、それ以外は殆どがアイヌ語に由来するものが多いそうであります。札幌も古くは川の名前で、「サツ・ポロ・ペツ」が語源で、「乾いた大きな川」を意味していると聞きました。

この「土別」という地名も、元々はアイヌ語の「シペツ」からきているそうでもあります。「シ」は「大きい」、「本流の」という意味があり、「ペツ」は「川」の意で、「大いなる川」を表わしているということです。因みに、一般的に大きい川が「ペツ」、小さい川は「ナイ」（稚内など）といわれたようであります。このように「川」に因んだ地名が多く見受けられるのは、アイヌの人たちが狩猟民族であったため、川筋で生活することが多かったことによるそうであります。

現在、全国で「平成の大合併」の掛け声のもと、市町村の合併が推進され、各地で歴史的な由緒を持つ古い地名などが失われつつあることは、実に残念なことでもあります。同様に北海道のアイヌ文化に由来する貴重な地名なども大事に残していただきたいものだと思います。

さて、アイヌの人々の信仰は、狩猟採集を生業としてきたことを基とし、祖先崇拜や、豊漁の祈願・魔除けの儀礼などの神への祈りが日常的に行われて来たようであります。弥生時代以降、農耕を中心として発展してきた神道の信仰とは、異なる面も多く見受けられるようです。しかし、狩猟と農耕との違いはあっても、自然への信仰という点では共通したところがあるようです。山や川、太陽や雨、動物や植物など、自然の要素が一体となり協

力しあう、多くの神々を信仰の対象とし、神と自然と人々が共にあるという意識は相通じるものがあると思われます。

先に、アイヌの人々と川との関わりについて申しましたが、川といえば、すなわち水の恵であります。例えば、この水への信仰について考えてみたいと思います。言うまでもなく、水は私たちが生きていく上で欠くことのできない大切なものです。人間の身体の七〇％は水分ですし、地球の四分の三は碧く広がる海であり、地球上に生息している生物の命の源は「水」であるということができます。

長細い日本列島の中央に背骨のように山脈が存在し、そこから太平洋と日本海の両岸に向って、無数の川が流れ出ています。山の本々は水を蓄え豊かな森をつくります。その水は山から流れ出て小さな川となり、その川の水は田に入り、稲を育て豊かな稔りをもたらします。更には生活用水として使われ、日々私たちの暮らしを支えています。また流れ出た水は次第に集まって大きな河川となり、海に至り大海となります。その海の水は蒸発し大気となり雲になり、再び雨となつて降り、山川草木を潤し、人々の生命を養っています。また、人間が大自然への感謝の気持ちを忘れたとき、川は時に氾濫、人々の驕りを懲らしめるといったこともあります。

これが自然の循環であり、神の恵みとして信仰されてまいりました。そこに、私たちの先祖は、その恵みに感謝し、そして崇め、水に特別で不思議な神々の力を感じて来たといえます。

先程、九十九山上の御本殿に正式参拝をさせていただきました。その途中、参道の石段横で立派な歌碑を拝見いたしました。そこには、

「直ちには海へ下らず北を指す 天塩川は北国の意思」

と刻されていました。広大な北国の厳しい自然の様と、そこに生活する人々の心の強さを思い、感動深いものがありました。

天塩川は二千五百六十一km、日本で四番目の長さを誇っています。この川もまた、アイヌの人々の信仰と生活を支えてきたことでしょう。そして、伊勢に五十鈴川・宮川があるように、全国各地に神々と深い信仰で結びついた河川が多く見受けられます。それらは同時に、豊かな歴史を湛えて悠久の流れとして存在しているのではないかと思います。

付け焼き刃の知識で、取り留めのない話になりましたが、北海道の雄大な自然に触れ、古いアイヌの歴史、近代の苦難に満ちた開拓の歴史などと、アイヌ語の「大いなる川」に由来するという「土別」の地名から思いを馳せ、祖先から受け継がれ、また未来へと引き

継がれてゆく、私どもの信仰への思いの一端を述べさせていただきました。

(京都府 松尾大社 権宮司)

正式参拝の後で

山崎 努

本日はようこそ御参拝下さいました。

当社は、明治二十五年に屯田兵が入植し、翌二十六年に社殿を建立し、御創祀以来今年で百十四年になります。

神社というと「古いもの」とお考えの方は、「百年ちよつとしかたっていないだ」と思われるかもしれませんが、そこには決して一言では申し上げる事の出来ない歴史がございます。

まず、屯田兵というものですが、これは明治七年制定の屯田兵例則に基づき北海道の防備・開拓にあたった制度のことです。翌明治八年より札幌に、そして旭川近郊には明治二十二年以降に入植を開始しました。当初この屯田兵になるのは士族に限られていましたが、明治二十三年以降には一般からも募集されるようになり、明治二十五年にこの地に屯田兵が入植したのです。

当時の北海道と言えば、真冬は零下三十度を超える日もあり、まさに極寒の地というべき自然環境の厳しい土地です。また、住宅など生活様式も今とは比較にならないほど質素なものでした。そんな厳しい環境の中で人々は屯田兵として訓練を受けつつ、家族がひとつになり山林を切り開き田を耕し、心を合わせ力を尽くし、未開の原野を切り開いていったのです。

そんな過酷な厳しい環境の中で人々が一番に求めたものは、それは祈りの場だったのです。

このことは当地、士別の屯田兵も共通した思いだったのです。社務所の二階に『士別神社創祀八十周年を讃える』と書いた額が掲げてありますが、その一節をご紹介します。「前略」日々の重作業の汗の中で屯田兵の人々は心の寄りどころを求めた「中略」清冽な祈りの明かりがともし継がれていてそれが大きな環にむすばれている」とあります。

当社においては、その気持ちが即座に実行に移され、入植翌年の明治二十六年、五月の雪解けを待ちかねて「神社を建てよう」「鎮守の宮をまつろう」との声が高まり、早速社殿の建設に取り組むことになったのです。そして、八月十五日の屯田兵移住完了記念日を神社の例祭日と定めたのです。この日は今も変わらず当社の例祭日で、百年前と変わらない

お祭りを齋行致しております。

現在のように、世の中の変化が激しい流動的な時代であっても、昔と変わらぬお祭りを続けていくことが出来るのは、本当に有り難い事だと感謝致しております。

この八月のお祭りになりますと、毎年改めて屯田兵が入植した当時に思いを馳せます。苦しかった。辛かった。

「当時の人にはほんとにすごい、よく頑張った」と思います。そんな彼らを支えていたもの、それは彼ら一人一人の勇気ではないでしょうか。そう考えると改めてこの「勇気」と言うものの大切さ、必要性を強く感じます。

では、その勇気というものは何なのでしょうか？

これは『論語』の一節ですが、『その鬼に非ずしてこれを祭るは、諂いなり。義を見て為ざるは、勇なきなり』と言う言葉があり、また、『孟子』の一節には『自ら省みて直からずんば褐寛博と雖も吾往かざらん。自ら省みて直ければ千万人と雖も吾往かん』とあります。このような、『論語』『孟子』に記された「勇気」の精神は日本の歴史に大きく作用し、力強く時代を動かして行くことになるのです。これは歴史を通じ一貫した精神であります。その顕著な例はなんとと言っても楠木正成（大楠公）です。千早赤坂の城をわずか五百の兵

で守り数万の足利勢を迎え撃ちます。この時の戦いで、楠木方が示した勇氣とは、困難・苦難そして逆境に立ち向かう強い心ではないでしょうか。

人は兎角、苦難・困難といったような逆境に弱いものです。しかし、そんな時だからこそ、その人の真価が問われているのではないのでしょうか？

また、幕末においてこのような「勇氣」を備えた人たちが現れます。吉田松陰・橋本景岳・高杉晋作・真木保臣・西郷隆盛・藤田東湖など、彼らもまた真の勇氣を兼ね備えた人たちでした。中でも藤田東湖の著した『正氣歌』、これはまさに勇氣を最もよく記したものではありませんでしょうか。

この書は弘化二年、東湖三十二歳の時に獄中の苦しみに耐えて著したものです。では、その一節をご紹介します。

『天地正大の氣、粹然として神州にあつまる、秀でては不二の嶽と為り、巍巍として千秋に聳ゆ、注いでは大瀛の水と為り、洋洋として八洲を環る、発しては万朶の桜と為り、衆芳与にたぐい難し、中略、死しては忠義の鬼となり、極天皇基を守らん』と記されています。勇氣とは先ほども申し上げましたが、困難に立ち向かう事であり、強い意志と自信を持って、自らを発憤興起させる事であります。この勇氣なくして今の日本はありえま

せん。

現代のように混沌とした世の中だからこそ、大いに発憤興起し、勇気・自信そして誇りを持つて皆様と共に生きていきたいです。

(北海道 旭川神社 権禰宜)

人の中のものさし

會田史男

今思えば、どうしてこの様な演題にしたのかとても後悔しております。この講演講習に参加が決まったのも急で、演題も講演の内容もあまり考えずに、せかされるまま決めてしまいました。話す対象も誰にするのかもわかりませんでしたので、皆さんの様な神職や理解ある氏子ではなく、神社にあまり関心のない方々を対象に話を進めさせていただきました。

この演題を通して言いたかったことは、今と昔、言いかえれば戦前と戦後の価値観と常識の違いを、もっと皆さんに意識してほしいと言うことです。私の奉職させていだいている岩見沢神社は、北海道の空知管内にあります。去年同じ管内にある砂川市の神職の常駐していない空知太神社が、市の土地に公民館と隣接しているとの事で、訳の分からぬ人権や権利を主張する市民団体に市が訴えをおこされ、違憲との判決ができました。この件はただいま控訴中です。同じように、本日研修会が行われていますこの土別神社がある、上川管内でも三つの神社が市の土地にあるという事で、市が訴えられています。ここで皆

さんに良く考えて欲しいことは、北海道という土地、特に道南地方をのぞく所は、明治に入ってから開拓された土地です。屯田兵や、この広大な北の地に夢を持って入植された人々が、信仰の場として御分霊をいただいて神社を創建し、お祈りして娯楽や憩い、情報伝達の間となっていました。また出身地方が違う為、生活習慣や言葉の違いにより色々苦労をし、故郷を懐かしむ為同郷の人々が集まり、故郷の神社より御分霊を頂いて創建された神社もあります。小さな集落が、村になり町になり市になっていく過程で法的・行政的にどうであれ、神社はその土地の歴史そのもので、開拓した人々の歴史そのものです。春には豊穰を祈願し、秋には収穫を感謝する、ただ純粹に信仰の場であったのです。訴えを起こす人たちは今どうであるか、今現在の「ものさし」でしか見ていないのです。何故ここに神社があるのか、一体いつからその場所にあるのかを考えれば、普通はそのような訴えは出てこないのではないでしょう。靖国神社の問題にしてもしかりです。国の為に戦い、もしそこに死があろうとも、死後靖国の祭神となり、国が国民が自分たちを守ってくれると思ったからこそ、死地へ赴く事ができたのではないのでしょうか。靖国に祀られている人たちは、「靖国で待っています」「来年は九段の桜を一緒に見に行きましょう」とか、「自分は靖国神社に居ます。いつでも会いに来て下さい」と言う旨の手紙を家族にあてて書

いています。それが当時の人たちの価値観ではないのでしょうか。今現在靖国神社に代わる慰霊施設を造ろうとする動きがありますが、そういうことをしようとする人々は、自分たちの小さな「ものさし」でしか見ていないのです。戦前と戦後では大きく価値観や常識が変わっているのです。それを判らずに今の価値観や常識を昔に当てはめようとするのは、ただの横暴でしかないのです。戦前の人々の「ものさし」を持ってみれば、どれだけ無理なことをしているか気付くと思います。

今、皆さんの価値基準を作る上で大きく影響を与えているものはマスメディアだと思いますが、裏側がわかればかなりいい加減だと思ふところがあります。私は今、北海道神道青年協議会に空知支部神職青年会より理事として出向しております。そこで広報・事業部に属してますが、去年北海道神道青年協議会の通信三十四号の編集をまかされ、その中の企画で第二次イラク復興支援隊を取材させていただきました。その中で日本での報道と違うな、日本ではそんな報道や紹介はされていなかったという事がありましたので、少し紹介させて頂きます。

★報道では果物など投げつけられたとあった件

會田 治安は東ティモールとサマールワ、どちらが悪かったですか。

増子二尉 治安は特にそれほど悪くありません。テレビなどで良くトマトなどぶつけられ

たと報道されていたらしいですけど。自分も一度市内の方に出たんですけど、どちらかというと手を振って、哨戒の為車の上に体を出している隊員に果物をあげるみたいに投げているのを取り損なって、車にベチャという感じでしたよ。(笑)

會田 日本のマスコミは悪い方に取り合いますよ。

増子二尉 そうですね。市内は速度を落としますし、歓迎の意味で果物とかを取る範圍で、上から投げるのではなく、下から軽く投げてよこす感じでしたよ。

★宿営地が砲撃された件

手塚 やはり何か撃ち込まれた時は、緊張が走るのでしょうか。

増子二尉 そうですね。丁度帰国前に三回ほど。報道されているので分かると思うんですけど。

會田 結構近かったんですか。

増子二尉 近い・・・、どの位のイメージで近いと言うのかも微妙ですね・・・。

會田 そうですね、我々と近いの感覚が違いますよね。

増子二尉 自分的には、それ程近いとは思わなかったんですね。丁度、我々が担当し

ている場所が在るんですけど、その上を「ビーイン」と飛んだらしいですけど。要は日本で言っている駐屯地内というのが、まだあそこは駐屯地外なんですよ。多分解釈の違いだと思うんですけど。基本的には外をオランダ軍が巡察してくれてレーダーでどこから撃ったか分かるので、すぐ対応が出来るんですよ。

★現オーストラリア軍・旧オランダ軍に警備されていた件

會田

失礼な質問かもしれないですが、当時オランダ軍、現在のオーストラリア軍に守られているじゃないですか。自衛隊だけでやってみたいと思いませんか。したか。

増子二尉

自分は特にそういう事は考えていなかったです。やっぱり施設隊なので、物を作ったりとか、どちらかと言うと、そっちの方ばかり気にしていました。これをいつまでに作らなければならぬとか考えていました。帰国前までに作らなければいけないので。

手塚

自分達で警備が出来れば作業の幅が広がったのという事はありましたか。

増子二尉 無いですね。基本的には作業に行く時は、日本隊だけで行っているの。

會田・手塚・枝廣 えっえ……。 (一同言葉を失う)

増子二尉 特にそこにオランダ軍が付いて来るとか、そういう事が無いんですよ。

手塚 その周りを警備するという事も

増子二尉 ただオランダがサマーワを担当しているだけで、全体を見ているだけです。

手塚 全体を見て、点では見て無いんですね。

増子二尉 そうです。自分達は自分達で行きながら、作業をするわけですよ。

枝廣 その時何かあったら、自衛隊は正当防衛の範囲内で守るだけなんですか。

増子二尉 まあ基本的には。我々が行っている時は、住民感情も治安も良かったので、

あまり気にせず普通どおりでしたね。日本で報道されているのと、向こうに居るのと、まあ日本の情報も入ってこないんですけど、新聞とかFAXしてもらったりして、嗚呼こんな風に報道されているんだ、うちの的には別にそんな切羽詰まってもいないし、普通どおりなんだけどなどというのはありますね。こっちだとちよつとの事が大きくなりますね。

以上、一部ですけどマスコミの報道と少し違うのが分かると思います。日本のメディア

は平和が一番、海外へ自衛隊が行くのはけしからんということが念頭にあるのです。実際、現地の人の感情を無視し、自衛隊が現地でどういう活動をし、必要とされているのかは全く関係ないのです。みなさんには、マスメディアを鵜呑みにするのではなく、報道のなかが正しいか、何が悪いかを見極める「ものさし」をもって頂きたいです。

最後に「自分のものさし」「人のものさし」「今のものさし」「昔のものさし」など色々な「ものさし」を持つていただきたいと思います。

(北海道 岩見沢神社 権禰宜)

秋の例祭を終えて

成田 浩二

本日の例祭にあたり、お忙しい中、多数のご参拝を賜りました事を、先ずもって御礼申し上げます。そして本年も無事に例大祭を滞りなく終えられました事を、深く感謝申し上げます。これも偏に皆様方の日々の良き行ないの賜物であると理解しているところでございます。

天地自然の恩恵の下、五穀豊穡の秋を迎え御神徳を奉戴し氏子の方々の奉仕の中で、この秋季例大祭を執行致す事が出来ました。秋のお祭りは日本人の主たる生活手段である農耕稲作の無事と安全を祈りつつ、収穫の喜びと感謝をする事に始まり、自然と人間との交わる祭り事として受け継がれてきた精神文化であると私は思います。日本は戦争や凶年の数々を乗り越えて、様々な課題を抱えつつも世界随一の長寿国となり、豊かな時代になりました。この恵みを与えて下さった神の御恩に感謝し、先人のご労苦を偲び、地域や国の一層の隆昌発展と共存共栄を祈る祭祀として、市来知神社では九月五日を例大祭とし、

百二十五年を越える歴史を積み重ねて参りました。人間は自然を離れては生きていく事は出来ませんが、この偉大な自然の恵みに感謝して、我々日本人本来の心を取り戻し、平和で安心出来る、そして活発な地域社会を創る事を、お祭りを通じて考える事が重要であると私自身考えております。

さて、今年で当市来知神社は百二十五周年を迎え、記念事業と致しまして奉賛会を組織し、新社務所、職舎の建設事業を進めて参りました。この九月五日の例祭を終えましてからの引越しの作業、竣工式、落成式を残すのみとなりました。新社務所の建築構想から二年、奉賛会組織を立ち上げる為に塚本総代長を始め、責任役員の皆様のご労苦があり、奉賛会が組織されてからは、会長である杉山春夫様を中心に副会長、理事、評議員他事務局等多くの皆様に支えられて今日まで参りました。幾度となく会議を重ね、良き社務所にしようとの事から、意見が分かれ衝突した事も多々ありましたが、今では更に一致団結の輪が強まり、本当に素晴らしい社務所、職舎、更には境内環境となりました。十一月に予定されている落成式には、各奉賛会の役員を始め篤志として多くのご浄財を賜りました氏子の皆様と祝杯を上げられます事を、心よりお祈りしている次第であります。

更には、この百二十五周年を機に、御神輿の渡御が始まる事となりました。四年前に三

笠市内の唐松地区に御鎮座しておりました新幌内神社と合祀を行いました。新幌内神社の御神輿の老朽化と、それに伴い神社予算内での修繕費捻出に苦慮をしてしまい、四年間に亘り御神輿渡御が出来ませんでした。役員、総代、そして唐松地区の氏子の方々の渡御に対する強い要望を受けながら、このしばらくの間辛抱していただいた事にお詫び致さなければなりませんでしたが、御神輿の修繕も無事に完了し、又、担手である三笠陸会の全面的な後押しもあり、この度の御神幸となりました。順路は唐松地区旧新幌内神社跡地をかわきりに、唐松地区から三笠市内に移り、練り歩く予定になっております。市来知神社におきましては子供神輿の渡御以外で初めての本神輿の渡御となります。各役員の皆様には慣れない事で心身共々ご労苦をおかけしますが、この渡御を心待ちにしていた氏子の方々の為に、御奉仕していただきます様お願い申し上げます。

最後になりましたが、現在全国各地の神社が本宗と仰ぐ伊勢神宮が、平成二十五年に行われる第六十二回式年遷宮の為、諸祭事を進めており、今年五月下旬にはお木曳行事が行われ、塚本総代長と松本総代が参加されました。この空知管内の中でも市来知神社は最も古く百二十五年の歴史がありますが、伊勢神宮は二千年以上の歴史を誇ります。式年遷宮は二十年に一度行われ、社殿の造営や御装束、神宝等一切を一新し、伝統的な継承を行っ

て新しいお宮へ大御神様にお遷りいただくお祭りが、絶える事なく代々続いて参りました。又、この遷宮により日本人の心の伝承というものも受け継がれてきました。近代化が著しい今の世の中で、伝統や文化を次の世代に伝承していく事は、とても大切な事であります。靖国神社の問題や歴史教育が一部のマスコミやジャーナリストによって真実が歪められ、メディアの普及により歯止めが効かない状態です。正しい歴史を今後、子や孫に伝承していく私達神職にとって永遠の課題ではありますが、本日お集まりいただいた皆様方には、どうかこの市来知神社の例祭を機に、歴史を振り返っていただき、これからの世代の子供達に真実と誇りを伝える為にご尽力いただきます様、お願いを申し上げます、例祭の御礼御挨拶とさせていただきます。

（北海道 市来知神社 権禰宜）

家庭婦人への教化活動について

佐々木裕徳

私が奉仕している志波彦神社鹽竈神社には「敬神婦人講」と言う、塩釜市内或いは近隣市町にお住まいのご婦人方による団体が組織されており、年間を通し活発な活動をしております。

どのような縁によるものか、私も平成十一年よりこの敬神婦人講を担当し、ご婦人方の活動のお手伝いをさせて頂いております。

常日頃その活動を目近にしております中で、ご婦人方の熱心さに頭が下がる思いがしておりますので、この題にてお話ししたいと思った訳ですが、まずは当社の敬神婦人講の具体的な活動例を紹介したいと思います。

毎月十日は月に一度の例会の日となっており、講員は昇殿の上、お祓いを受け、神拝詞を奏上し、齋主による御講話を拝聴します。講員の数は全体では約五百名弱おりますが、月毎の例会には平均六、七十名程参加しております。

この神拝行事が午後一時から約三十分、その後社務所に移動し例会を開催。こちらは宮司さん或いは権宮司さんのお話を聴き、その月の協議事項を話し合い、具体的な行事予定を詰めたり、周知連絡等を行っております。

ちなみに神拝行事の斎主は、昨年当社で開催された神道講演全国研修大会にて記念講演を致しました、野口祐宜が奉仕することが多く、講員には大変好評を博しております。

実は数年前から講員の全体数は減っているのに、月毎の例会への出席者数が増えているという現象が起きており、私も「これは何か秘密があるはずだ」と不思議に思い、各講員さんに聞きこみを行いましたところ、「神拝行事での野口先生のお話がとっても良いね」と言う声が多数聞かれました。

やはり「講話」というものは人の心に確実に訴えるもの、人を動かすものだ実感した次第です。

話を戻しますと、敬神婦人講の活動には他にも色々あります。

春と秋には境内の清掃をし、七五三の季節には子供たちに風船を配ったり、千歳飴等の授与頒布を行ったり、御神田のお祭りにも田植え、稲刈り等お手伝い頂いております。

つい一昨日の六月二十日は、鹽竈神社の現在の社殿御造営に着手された、伊達家四代綱

村公の御命日にあたる為、お墓参りを実施し、講員一二〇名バス三台にて行ってまいりました。これも毎年恒例の行事です。

具体例をつらつらと挙げておりますのは、これだけ熱心に活動して下さる講員さんのことを、私自身が不思議に思っているからなのかもしれません。

講員の方々の年齢は、主に五十代、六十代といった年代のご婦人方が中心です。九十でご熱心に行事に参加して下さる講員さんもおられますし、四十代の方もおります。

これは私の個人的な偏見ではあったのですが、「女性のほうが男性よりも現実的」という思いが以前はありました。しかしながら、金銭的な損得勘定からすると何か得する訳でもない、いわゆる「無償の奉仕活動」に、これだけ熱心になれるとは、ご婦人方のパワー、エネルギーには偉大なものがあると感心することが実に多いのです。

春と秋の年二回実施している境内清掃には、最近では七、八十名ほど参加頂いておりますが、職員だけではなかなか追いつかない御社殿周囲の除草作業も、大勢の力で二時間もとると見違えるほど綺麗になり、職員も驚くほどです。

また「国旗小旗を三千本作って下さい」との依頼があったので、来月の例会時に実施します。大勢ご参加下さい」と呼びかければ、百名以上も集まり、一時間もすれば完成します。

神社としても大変有り難いことです。

こういった活動に参加する講員の方々は、既に子育ても一段落した主婦の方が多いと思いますが、基本には神様を敬う気持ちの強い、いわゆる信心深い方が中心となっているように感じられます。神道だけではなく、仏教の方にも信心深い方も多いようですが、要は「日本人らしい」ということなのではないでしょうか。

このような信心深いご婦人のおられる家庭で年齢を重ねていくお子さんやお孫さん等の家族が、将来神社に親しみを抱き参拝してくれることも期待してしまいます。

私は家庭の中では男性よりも女性のほうが家族に対する影響力は大きいように感じているのですが、そういった意味では現在主婦として、或いは働きながら子育てに励んでおられるような二十代、三十代といった年代の女性に対しても影響を与えるべく、更なる工夫が必要かと思っています。

また、若い頃は神社や神道に興味がなくても、子育ての一段落した主婦の方々が、「そう言えば家のおばあちゃんが毎月熱心に神社に行っていたけど、どういったことをしていたのかしら?」と、ちょっとしたでも思ってもらえれば、ゆくゆくは神社への崇敬心も高まっていくのではないかとも思います。

私自身は、まだまだ講員さんを満足させるような御講話はできないと痛感しておりますので、今回の研修で他の先生方のお話から学んだことを活かし、講員の方々に「ああ、神社に行ったらとても良い話を聞いたよ」と言って頂けるような話のできる神職となるべく、不断の努力を重ねてまいりたいと思います。

(宮城県 志波彦神社鹽竈神社 権禰宜)

智仁勇

堀 康弘

今年の四月、北海道は江差町にお住まいの男性の方から、霧島神宮宛に一通のお手紙を頂きました。「江差追分で有名なこの町は、江戸時代から松前藩の台所として栄え、鯨鮫^{にしんかす}などの海産物の交易で北前船が行き交い、早くから本州との文化交流も行われ、北海道を代表する芸能文化が多く残っている町です。この江差町の産土の神である姥神^{うばがみ}大神宮の祭礼で、今から三六〇年も前から伝わる豊漁に感謝する山車^{だし}の渡御行列があつて、現在一三基の山車が祭りの当日に引き出されております。その中で私ども豊川町の山車は豊栄山^{ほうえいざん}と名付けられた立派な山車で、飾り人形は瓊瓊杵尊さまで、三種の神器を捧持されている姿であると言われております。そして胴体には、三種の神器を表す「智仁勇」から、「治以明智^{あきいか}」（明なるを以て治むるは智なり）、「教以寛仁^{ひろ}」（寛^{ひろ}かれるを以て教ふるは仁なり）、「行以剛勇」（剛きを以て行なふは勇なり）の文字を象った三枚の刺繍の水引（幕）が掛けてあります。昭和の初め頃に私の祖父が瓊瓊杵尊さまを御祭神とする霧島神宮に参詣して、時

の占部眞一宮司に認めていただいた三枚の書をもとに作成したものであると聞いております。世代も代って来て当時の詳しい資料もありませんので、三種の神器との関係や意味を教えて下さい」という内容の手紙でした。このことを調べてみますと、当時の霧島神宮宮司占部眞一は第八代の宮司で、昭和七年八月から十年八月迄の三年間在籍しておりますので、この書はこのころに書いたものであると思われる。出典はわかりませんが、直訳すると明らか（正直）な心で治めるのが智である。寛容な心で教える（導く）のが仁である（慈悲）。剛い心で行なうのが勇である（決断）。と解釈できると思います。古事記・日本書紀などの古典によりますと、天孫降臨のくだりで、天照大御神は、高御産巢日神のお告げを承けられまして、皇孫瓊杵尊に「豊葦原瑞穂国は汝の就いて治めるべき国である」と仰せられ、更に八百万神をお集めになってそのご意見を聞かれました。そしていよいよ瓊杵尊を豊葦原瑞穂国にお降しになりますときに、三種の神器をお授けになります。すなわち、八咫鏡と八坂瓊曲玉と草薙剣であります（やたのかがみ やさかにのまがたま くさなぎのつるぎ）が、それらに思兼神とご神勅を添えてご下賜になったのであります。皇位の御璽である三種の神器が「智仁勇」の三つの徳を象徴すると説いたのは、『神皇正統記』を著した事で有名な北畠親房です。親房は著書『東家秘傳』の中で三種の神器について、八咫鏡は白銅鏡の如く分明なるを以て山川海原を看行せ、鏡

の如くにして分明なるは、正直の心を表し給ふ也、心の本元也として「智」の徳と「正直」を、八坂瓊曲玉は八坂瓊の句ひろかされる如く曲妙たぐみなるわざ以て天下を治む、玉の如く曲妙なるは柔順の心を表し給う也仁也として「仁」の徳と「慈悲」を、草薙剣は是の靈劍れいけんを提げ天下を平らぐ劍の如く剛利ごうりなるは決断の心を表し給ふ也勇也として「勇」の徳と「決断」を象徴すると説いています。又、『神皇正統記』の中にも鏡は、善惡美醜ぜんあくびしゅうを明らかに写し出すものであつて、私の心をもつて曲げることのない明き心の現われであるから「正直」の本源である。玉は丸くて角の取れた円満なものであつて、和の精神をあらわすものであるから温順おんじゆん慈悲じひの本源である。劍は鍛錬され磨き上げられたもので不屈の強さを持ち、破邪顕正はじゃけんしょうの徳を持つてゐるから剛勇智恵ごうゆうちえの本源であると教えております。このように「三種の神器」はいわゆる「智仁勇」の徳を象徴した深い大きな意味があつて、天皇の御徳をあらわしたものであることがわかります。私はこの手紙を機会に昨今大きな問題となつてゐる、皇室典範の法案改正とも関連して、世界に比類なき万世一系の日本の皇室は、第一に皇統譜こうとうふにあるように、神武天皇以来二、六六六年一つのご家系がこの皇位を継承してこられたということ。第二に神武天皇以前即ち、神話、神々の系譜に繋がる家系、系譜であられるということ。第三は一二五代全て男系で継承してきたこと。天皇は神々の系譜に連なられる御存在

であることを再認識させられました。昭和天皇は、GHQからの神格否定の圧力があつたとき「天皇の系譜が神代に連なる万世一系の系譜であることを否定することは決してできない」とおっしゃいました。昭和天皇の御心がここに深く現われております。現在の皇室典範は、皇位継承の御印三種の神器について何の取り決めもしておりません。天皇とは何かということについてのより深い理解の上に立った、真の皇室典範の改正を切に望みたいと思います。

（鹿児島県 霧島神宮 権禰宜）

さわやかなあいさつを

佐々木美津子

「おはようございます。朝刊」真冬の寒い朝、まだ夜のあけぬ暗い朝、新聞少年A君の元気な声。春夏秋冬と一日も欠くことのないこのさわやかなあいさつ……。あれから二十数年、今年の一月二日、彼はりっぱに成長し四十二歳の厄年祓いの参拝に訪れたのです。年輪をきざんだ多少しわの見える顔、あのニコニコ笑顔が、私の目に映ったのです。

現在、社会の進歩にともない、便利な世の中になりました。自動販売機、パソコンそしてインターネット等々、すぐれた頭脳と器用な指先があれば、家の中に居ながらにして、すべて用事をこなせる社会、画面にとらめっこしていれば、大企業さえ動かすことの出来る社会。でも、何か失われてはいませんか？ まだ自動販売機がなかったころは、「こんにちわ、おばさん。あめちようだい」「ありがとう。ハイおつり、五十円ね」とあめ一個、ジュース一本買うにも、そこにはさわやかなあいさつがあり、会話がありました。店のおばさんが、幼子を守り育ててくれたではありませんか。

六十をすぎた私は、あの時のおばさんのやさしい言葉が今でも心に残っております。やんちゃだった男の子が四、五人並べられて、おこられていたのも忘れることが出来ません。地域の人々が自分の子供、孫と同じように、悪い時は厳しくしかり、善いことをした時はたくさんほめてくれた、あの時代のことの昔話として風化しないためにも・・・。

私は今、子供達の登校時間に合わせ、朝七時三十分から八時までの三十分間、家の前を通る国道三四三号線で、「あいさつおばさん」をやって三年目になります。「おはよう」「いってらっしゃい」とはじめた頃は、車で通る人から変な目で見られたこともあります。信号機の変るのも待たず、走る車もたびたびありました。子供達や通行人がいなければ、信号を無視した無謀な運転手もいます。手押し信号機のため、タイミングがあわず事故もあった場所なのです。死亡事故にならなかったのは、不幸中の幸いとも言いましょうか。雨の日も、風の日もそして雪の積もった朝には、雪かきしながら「おはよう」「いってらっしゃい」と手作りの黄色い旗をふりながら、小学生とあいさつをかわしています。車を止め渡らせてくれた運転者には、子供達と一緒に「ありがとう」のあいさつを励行しています。

「あのね、おばちゃん・・・」「あのね、おばちゃん・・・」と、先生にほめられたこと、

おばあちゃんとプールに行ったことなど話してくれます。又、ニコニコと手をふる運転手、クラクションを鳴らしてくれる運転手等、様々で毎日が楽しいです。三百六十五日、毎朝は出来ませんが、私の出来る日を確保しつつ、「あいさつおばさん」として頑張っています。やがてこの子供達が大人になった時、さわやかなあいさつが出来るようになってほしいと願いつつ……。あいさつから芽ばえる思いやりの気持ち、人のいたみのわかる人間になってほしいと思うのです。

あいさつから生まれる大神様の言霊を、せめてこの子供達に宿してほしいと願いながら、よき古き時代に、店のおばちゃんに教えて頂いたあいさつの光を、消すことなく伝えていきたいものです。

新聞少年A君がりっぱに成長した姿を誰よりもたのしく思えたのも、二十数年前、母を助け、マフラーを首にまき、貧しい生活に耐えられたのも、あのさわやかなあいさつが彼を支え、頑張った賜物と言っても過言ではないだろうと思います。

社会の進歩の中で、親が子を、子が親を平気で殺すという家庭崩壊の世の中。大人を信じていない子供。失いつつある言葉や会話。

今、私が女子神職として出来ること、それは決して背のびすることなく、地域の人々と

の会話を大切に、子供達の健全育成に力を注ぎ、やがて父として母として子の親になった時、悪いことは悪い、善いことは善いとはつきり言い、親と子の絆を密に、信頼出来る世の中を造りあげる大人に成長するための、ささやかな力になりたいと願っています。

祖母と孫が手をつなぎ、大神様に手を合わせる多くの姿が、天照御祖神社の境内に見られる日を期待しております。

「おはよう」

「こんにちわ」

「さようなら」・・・。

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

初心者神職

浦 隆一

私は昨年の夏に、京都府神社庁主催の検定講習会を終了して神職の直階を授かりました。まだ神職一年生でございます。京都へ行く前に北海道神社庁の参事さんから「京都府神社庁の講習会は厳しいですよ。特に正座が大変ですよ」と伺っておりました。

講習会開催前に京都府神社庁において説明会があり、その前に、まず松尾大社を参拝いたしました。この日は土砂降りの雨で、おまけに北海道とは違い暑いわけですが、参拝に本殿の前へ行くと、子供さんを三人連れたご家族がおられました。このご家族の参拝の様子を見て感心いたしました。土砂降りの雨にも拘らず、傘をたたみ地面においてから、まずお父さんが階段を上り、お賽銭を入れて再拝二拍手一拝の後階段を下りてきて、次がお母さん、次が長女、次女、長男の順にそれぞれお賽銭を入れて参拝です。ご家族が参拝を終わる頃には全員すぶ濡れでした。それもお子さんは皆小学生の様でしたが、きちんと拝礼していました感心いたしました。その後私も真似て傘をたたみ、お賽銭を入れて参拝い

たしましたが、買ったばかりの夏物のスーツがかなり濡れてしまいました。しかし、今でもこのご家族の参拝の姿は鮮明に焼きついております。

説明会に出席後二週間程たってから、いよいよ京都での講習会が始まりました。講習会場は京都国学院でして、開講式に続き白衣、袴に着替え、拝殿でまず正座です。これが北海道神社庁の参事さんから聞いておりました通り厳しい。百分間です。三十分も経たないうちに足は痛くなり、一時間後には頭に血が昇って来まして、その時の授業は先生が何を話されていたかも覚えていない有様でした。一日目は何が何だか分らないで終了し、宿舎の伏見稲荷大社参集殿へ行き、同じ講習会仲間とビールで乾杯。二日目からはいよいよ本格的に講習が始まりまして、三十五日間の講習を終了し、その後神社本庁より神職身分を授かり、今この場に居る事ができる訳です。

京都での講習期間中に休みの日も五日有りましたので、その日は下鴨神社、平安神宮など幾つかのお社を参拝させていただきました。どの神社も北海道と比べ、参拝者の多い事と、若い人の数の多さに感心いたしました。そして若い人達も参拝の時に皆さんではありませんが、再拝二拍手一拝をきちんとされていました。北海道ではどちらかと申しますと、再拝が無く二拍手の後に合掌される方が多いように見受けられます。わたくしのご奉

仕させていたいております芽生神社では、参拝の方には再拝二拍手一拝を心がけていただく様にいたしております。昨年、小泉総理が靖国神社参拝の時に合掌していたのをテレビで見ましたが、やはり神社参拝は合掌ではどうも形がよろしくないように思います。総理大臣が靖国神社を参拝する事は当然でありますので、再拝二拍手一拝をしていただきたいものだな、と思ってテレビを見ておりました。再拝二拍手一拝が基本中の基本ではないかと思ひますし、神様に対しての畏敬ではないかと思ひます。

講習期間中には二日間の神社実習がありまして、私は吉田神社へ行きました。吉田神社での朝拝、夕拝は拝殿前の境内で執り行います。外で行うわけです。初日の朝拝の始まる時には気が付きませんでした。朝拝を終えて後ろを振り向くと、ご近所の方々だと思いますが、多数の人が二十メートル位離れたところに立っておられ、ご一緒に朝拝をされていました。この時も、信仰心の厚い方が大勢おられるのだな、と感心いたしました。

期間中に神宮参拝もありまして、受講生全員が京都からバスで三時間かけて伊勢市に行き、お伊勢さまを参拝いたしました。まず外宮を参拝し、それから内宮を参拝しましたが、内宮参拝の前に神楽殿で祝詞奏上の後、神楽を拝見いたしました。神楽殿には私達受講生の他に、やはり京都から来た崇敬者の子供さん達約百名ほどが一緒におりました。祝詞奏

上が約十五分で皆さん正座にて平伏です。その後の神樂が三十分でしたから四十五分間でした。その間もずっと正座ですが、子供さん達が足を崩すことも無く拝礼し、神樂の間もおしゃべりなどせずに、きちんと正座しているのには驚きました。その後私達は内宮に正式参拝をいたしました。内宮の南御門前で参拝されている方々は、学校が夏休み期間中と言うこともあって、小学生位のお子さん連れのご家族が非常に多くおられました。お伊勢さまで参拝者が大勢おられる事は当然ですが、京都で三十五日間を伏見稲荷大社の参集殿に宿泊しておりまして、神社参拝に来られる方々の中でご家族連れの方が大変多いのに気がつきました。中には、お爺さん、お婆さん、その息子さん、娘さん、お孫さんと言う方も多く、何かそれが当然の様にさえ見受けられました。

さてここで、北海道はどうかと言う事になるわけですが、初詣は何処の神社でも参拝の方々は多く来られます。神社の例祭などの大祭には、ご家族連れが多少は多いかもしれませんが、そうではない日曜日や夏休み、あるいは平日の朝夕にご家族連れで参拝されると言う事は殆ど見受けられない様に思います。北海道の人々は神様に対する信仰心が薄いと言う表れではないかと思えます。北海道では正式に神前結婚を行う人は現在では殆どおりません。ホテルでの披露宴前の適当な神前結婚まがいは有りますが、俗に言うチャペルが

圧倒的に多い様です。正式な神前結婚ではありませんから、当然親族の方々も保証人であると言う意識も気持ちも、さほど持たないであろうと思います。北海道が離婚率全国一であるのはここに一つの原因があるのだろうと思います。

神社参拝の事とは話が変わりますが、先日高速バスに乗りうとした時のことです。バス停までわりと急な階段が三十段ほどある場所で、杖をついた足の不自由なご婦人か途中で上ってこられずに、階段にもたれ掛かって居たものですから、何とか上のほうまで手助けをしたのですが、私も腕力がそれほどある訳ではありませんので、休み休み上りました。階段を上りきるまであと四段というところで若い女性が来たので、「手伝ってもらえないですか」と言うと、イヤな顔して知らん振りですよ。しかたがないので、又持ち上げておきますと、そのご婦人と同年代の七十代の女性が二人きましたので、「すみませんが」と言う間もなく一緒に持ち上げてくれました。教育勅語に「博愛衆ニ及ホシ」はくあいしゅう およがございますが、その時の若い女性はこう言う気持ちも心も全く無いのだな、と感じました。この女性がと言うより、その親も心が無いのだろうな、と感じました。教育勅語と申しましたが、実は私も昨年までは教育勅語の意味の深さ、広さまでは知りませんでした。子供の頃から両親、祖父母に教えられた事が難しい言葉で書かれているのが解りました。現代の日本にと

って教育勅語は絶対にと言っても過言ではないくらいに必要ではないかと思ひます。

私は神職としてはまだまだ未熟です。正座は何とか一時間以上はできるようになり、日々祭祀にいそしみ境内清掃が毎日の日課ですが、今後一遍には行きませんが、明るい希望を持って少しづつではありますが、神道への信仰心、教育勅語の精神を氏子崇敬者の方々のみならず、友人、知人にも広めていく事ができるように努めていこうと思ひます。

(北海道 芽生神社 欄直)

真心を捧げて祈る時

牟禮照子

唯今、御神前に於きまして、厳肅に滞りなく月次祭が斎行出来ました事を、心より厚く御礼申し上げます。本日は御婦人が多くお集まりでございますので、少々お話をさせていただきます。

六月十八日、十九日の両日、伊勢神宮の神恩感謝祭に参列する為、御崇敬の皆様と共に伊勢に参りました。十八日の夜十時、豊受大神様別宮土宮の月次祭由貴の夕大御饌祭に奉拝をさせて頂きました。篝火の中で斎行される神事に、広大無辺の大いなるもの、息吹を感じ、一時を過させて頂きました。翌十九日朝四時に、二見ヶ浦で日の出の禊をさせて頂きました。今！正に昇って来る瑞々しい太陽の光が、海上を一直線の光の帯となって、海中で大祓を上げている私共のお腹に迄有難い光となつて射し込み、沁み通つて来る、神々しい一瞬を体験させて頂きました。皆の顔が神々しく輝いて、唯、有難うございますと手を合わせるばかりでございました。こうして浜参宮を致し、外宮、内宮と御垣内の正式参拝

を致しまして、神恩感謝祭は終了致しました。こんな有難い体験を求めて私は、崇敬の皆さんと共に、あちこちと参拝に出掛けます。昨年しんざいの旧暦十月十日（新暦では十一月二十日）出雲大社の神在祭じんざいさいに崇敬者の人達と共に車で向いました。旧暦の十月十日、出雲の稲佐の浜に迎えられた全国の八百万の神々は、出雲大社に一週間滞在になられ、日本の国の五穀豊穡と縁結びを神議なさるそうです。ですから十月は、全国では神無月かんなづきとなり、出雲では神在月かみありづきとなります。一週間後、出雲の佐太神社、万九千神社まんくせんに滞在なさるそうです。私は、この神社の名前は初めて聞きましたけれど、出雲大社が表で、この万九千神社まんくせんは裏になるので、「是非、出雲に行ったら参拝してごらん下さい」と聞かされておりましたので、是非言って見たいと思ひまして、十一月二十七日（旧暦十月十七日）出雲大社で朝九時に最後の日の神在祭じんざいさいに参列し、午後四時の神去祭からさでさいに間に合うように出雲の有名な神社廻りを急いで済ませて、神立かんだちと云う地域に在ると云う「万九千神社まんくせん」を探しましたが、どうしても見当たりません。畠仕事をしていた地元の人に聞いても解らなくて、神去祭からさでさいの時間がありますので、途中で断念して出雲大社に戻り、神去祭からさでさいに参列し、神々をお送り申し上げてから、どうしても探そう思ひまして、又出掛けました。もう傍あたりは薄暗くなっておりますが、今度はすぐに見つかりました。あんなに探しても見つからなかったのに不思議でしたが、田

畑の続く中に、目立たない存在で万九千神社まんくせんはありました。式内神代神社でした。この社で全国の神々にお会い出来た感激、小さな神社でございましたが、出雲大社をお出ましになられた八百万神々が、お着きになられた所為でしょうか……。この社で神々は、静かに直会をなされるそうで、神社ではご滞在中の一週間は、歌舞音曲を一さい止めて、静かにお休み頂くのが風習ふうしゆだそうで、神前は燈も暗く、ひっそり静まり返っております。私共は誰云うともなく、皆で玉串料を捧げましようと言う気持ちになって、自発的に出し合ひ、金一封を包み、神前に御供させて頂き、大祓を上げさせて頂きましょうと言う事で、静かに参列した五、六人の者等が、大祓を唱えましたところ、皆涙が流れたのでございます。その時、私の脳裡に静かに一つの波動の様に流れてまいりましたのは、

親神のみもといでいて立ちよれば

まことの人にあうはうれしも

これは神々様が、私共に賜わった「みことば」でしょうか？探しくてやつと神社を探し当てた嬉しさ！皆何故か泣きました。私共の真心を神々はお受け下さった！あゝ来てよかった。皆が心から感激したのでございます。神様はその存在あかしの証を觀せてくださいます。その時撮った写真に写ったのでございます。

私が師と仰ぐ、今は亡き佐古幸嬰先生は、その講演のビデオ「おもかげ 倂」の中で「捧げて拝む心」を私共に残して下さいました。先生は「真心を捧げて祈りなさい！お賽銭を出し惜しみしないで、感謝の心で捧げなさい！そうすれば悩みも消えます」と述べておられます。神様に真心を捧げて祈る時、神様は人々の真心に答えられ、その存在をお示しになり、その証を見せて下さいます。私共は「ツキ」を呼ぶ為にも、神々と受霊うけいが何よりも大事な事でございます。

「真心を捧げて祈る時、神はその存在をお示しになられます」一切の物欲を捨て、真心を捧げましょう。その時、神様は人々の願いに答えられます。

（長野県 富士浅間神社 禰宜）

太鼓と『おまつり』

菅野 剛

鳥居を潜り神殿の中に入りますと、皆様方がお参りされる拝殿や神職が祭事に奉仕する幣殿に太鼓が置かれているのが見える事と思います。

ご存知の方も多い事と思いますが、本日はその太鼓と神社の関わりについて「太鼓と『おまつり』」という表題で少しばかりお話をさせていただきたく思います。

社殿にある太鼓は主に金具が二つないし三つついており木の胴に牛の皮を両側に張った形をしているかと思えます。太鼓といいましても、中にはいくつか形の違ったものがあります。一般に太鼓と呼ばれるもので代表的なのは「宮太鼓」と呼ばれているものです。神社で主に用いられているのでこの名前がついているようですが、一口に宮太鼓といっても大きさもさまざまで、直径が一尺、約三十センチのものから四尺、五尺と中には八尺といった大きなものもあります。大きな宮太鼓は大胴太鼓とも呼ばれていますが、お宮で用いられている大きなものは三尺から四尺くらいの直径のものでしょう。

神社でこの太鼓を用いるのは、神殿で祭事の開始と終了を知らせるときが主です。

私の奉務している鳥取神社では大祭の始めと収めに七回、五回、三回の打数で「号鼓」という「知らせの太鼓」を打ちます。七回、あるいは五回、三回と大きく打った後に段々早く、小さくしていく打ち方で一括りを「一鼓」として数えます。

以前は毎朝六時頃に宮司が神殿の雨戸を開ける際に一日の始まりとして号鼓を打っていたのですが、昨今は「早朝から打たれては煩くて困る」なる苦情があったとの話もあって早朝に鳴らすことはなくなりました。

地域の古い氏子さんの中には、先々代の宮司は詩吟を嗜んでいた事もあり、号鼓の後に必ず朗々とした声を響かせていて、その声はたいそう素晴らしかった、とお話される方も多く見受けられます。

そういうお話を聞くと最近では神社の太鼓も騒音と同じように見られてしまうのか、と少し寂しい気持ちになります。

ですが、現在でも日拝という朝九時の祭事の際、また初宮参りや厄祓といった神殿での祭事の際に一鼓（この場合は三回の括り）を打つ号鼓を必ず打っています。これは「祭事は号鼓に始まり号鼓に終わる」という教えに沿ったもので、神様に対しこれよりご奉仕さ

せていただきます、と、あるいは無事祭事を収めました、とお知らせすること、また神事に奉仕する神職や参列する氏子の皆さんに開始や終了を知らせ、威儀を正していただく、といった意味が含まれています。

この様に、神社と太鼓というのはなかなか縁の深いものですが、もう一つ、奉納芸能というものの繋がりがあります。

神社で大祭とかお祭りと呼ばれる神事の際には、神輿渡御と呼ばれる神様を御神輿にお遷しして地域を練り歩く行事が行われます。この際に行列のお囃子や御休憩処で奉納される芸能の中にも、太鼓を用いたものが数多く見受けられます。地域によってはお囃子のみといったものの場合もありますが、地域の太鼓の芸能団体などが参加している場合には概ね渡御のどこかで演奏等を見ることができます。

実は私どものお宮では、十年ほど前には太鼓の奉納芸能はありませんでした。渡御に随行する芸能団体は鳥取開拓に端を発する「村謡・北の開拓者」や「釧路鳥取傘踊り」といった踊りや日本舞踊が中心で、演奏や道中のお囃子としての太鼓が僅かについているといった状況でした。

この頃は行列がいつこの地域に来るのか、実は氏子さんにはあまりわからないという

状況でございました。というのは、舞踊の音楽や神輿の担ぎ手の声というものは實際音としてそれほど遠くまで響くものではないからです。勿論、私どものお祭りでは往復で二日間も御神輿が渡御するので、その間の順路図なども配布させていただいております。

ですが、行列の順路も多くの地域を回るために比較的狭い裏通りを通ることが多く、その結果何処に御神輿が来ているかわからなくなることが少なくなかったのです。

丁度その頃に奉納芸能として参加していたある舞踊団体が、諸事情からお祭りへの参加を辞退するという事態が起りました。

そこで何か別の団体をお願いして行列を盛り上げよう、という話になりました、当時私ともう一人の職員が友人の關係から入会した釧路太平洋太鼓保存会という太鼓団体に参加をお願いし、行列についていただくことになりました。

太平洋太鼓保存会はもともと太平洋炭鉱の有志が中心になって結成されたものですが、春採神社大祭やくしろ港まつりといった地域のお祭りには積極的に参加をしていましたので、それなら、と快く引き受けてくださいました。各休憩処で芸能を披露してもらい、渡御中は行列を盛り上げて頂きました。

その年のお祭りが無事終了しましてから、或る氏子さんの所にお参りに行きましたとこ

ろ、「先日お祭りでしたよね?」と聞かれました。御返事申し上げましたところ、「いやあ、随分賑やかな行列でしたね」との言葉。それで、嗚呼行列を見て戴いたのだな、と思い御礼申し上げましたところ「いや、行列は見ていないんですよ。ただ、太鼓の音色が随分と遠くから響いていたので、嗚呼、今日はお祭りなんだ、とすぐ分かりました」とのお話です。

此処で私、はっ、といたしました。これは正に「知らせの太鼓」ではないかと。幾つも並んだ宮太鼓の威勢の良い音が、行列の存在を皆さんに遠くから知らせていたのです。神様が地域にお越しになる旨を音で知らせていたのです。

翻って考えてみれば、御神輿がお泊りになる御旅所、ご休憩所、神輿がお戻りになる還御にも例年より多くの人が集まっておりました。ひよっとすると太鼓の音色に惹かれて出てこられたのかもしれない。

それは鉦路の人が太鼓好きだからだよ、と言われればそれ迄なのですが、「やはりお祭りには太鼓がつきものだよね」という、役員の方のお話にも思わず頷けるものがありました。芸能でお祭りをより賑やかにしたいという意図は確かにありましたが、渡御に随行した太鼓の音の効果は私たちの予想を大きく上回るものだったと言えます。

その事もあつて、今では奉納芸能としての太鼓もなくてはならないになります。号鼓は祭事に奉仕する人々の心を荘厳な響きで清冽にし、奉納芸能としての太鼓は人々の心に楽しく、暖かい響きを残します。

前者は祭祀の作法の基点として、後者はお祭りの一部として神社にはなくてはならないものではないかと私は考えております。

皆さんも御参りに来られた際、お宮から響く号鼓の響きに耳を傾けてみては如何でしょうか。

きっと、心の何処かが澄んでくる様な気がしてくる筈です。

その音はひよっとすると、神様の御声の様なものなのかもしれません。

(北海道 鳥取神社 権禰宜)

地神祭の後で

鎌田耕作

本日は春の地神祭、誠におめでとうございます。お天気も快晴に恵まれ、本当に良いお祭りとなりました。早朝より御準備下さいました地区の皆様には、深く感謝申し上げます。私も當麻神社の禰宜を拝命いたしましたより、早いもので一年がたちました。皆様にも顔を覚えていただき、私の方もお顔とお名前が漸く一致するようになって参りましたし、町内の道路なり住宅も大分なるようになりました。この間色々と親切にしてください、本当にありがとうございます。中には、私が急激に太ったことを心配して下さる氏子さんもいらつしやいまして、大変恐縮をいたしております。二年前の結婚以来たった一年弱で二十キロも太りまして、神主にとって生命線ともいえる正座が大変辛い状況となりました。大神様にも申し訳なく思っております。札幌の実母にも、「いくら幸せ太りだからと言っても限度があるんだからね」と、こっぴどく叱られました。今後は皆様方に無用な御心配を掛けぬようにしていきたいと思っておりますので、引き続きお力添えを賜りますようお願い

い申し上げます。

さて、私の醜い話はこの辺にしておきまして、若干お時間を頂戴したいと思います。

当麻町も本年開基一一四年を迎えました。この間社会環境も非常に変化し、昔から住んでおられる方はお分かりでしょうが、今日は若い年代の方も多数お見えのようですので、改めて地神碑についてお話ししたいと思います。実は私自身もお恥ずかしいことですが、当麻町に来るまで「地神さん」のことを何も知りませんでした。前に在職しておりました神社の区域では、こういう建立物があつたかどうかは定かではありませんし、少なくともお祭りは無かつたのです。

最初私は、家を建てる時に行う地鎮祭と勘違いをしておりまして、特定の日には沢山の依頼があるものですから、当麻という町は、何と家を建てる人が多いんだろう、凄い町だなと感心していたのですが、どうも会話が噛み合わないのです。そしてとうとう失敗に気付いた訳です。ニュータウンの影響だなんて、勝手に思いこんでいたのです。

話がそれましたが、地神碑は「地神様」や「地神さん」と呼ばれ、明治開拓の昔から農家に親しまれ、毎年春秋の二回、社日に春は五穀の豊穰を祈り、秋には収穫を感謝する「地神祭」が途絶えることなく行われてきました。

祭典当日は、こちらの地神祭のように神事の後、盛大に直会を行って楽しんでゐるところが殆どです。明治・大正は勿論のこと、昭和初期頃までは余興として、子供相撲や大人相撲が催され、時には露店などが建ち並び、子供達の大きな楽しみでした。

当麻町の地神碑は現在地区ごと又は班ごとに建立の所も多く、その数四十箇所を超えますが、その多くは地区の会館のすぐ側にお祀りされています。私どもが御奉仕申し上げているのは、その内三十二箇所です。後の十五箇所は教派神道に依頼をされたり、御自分達だけでお参りをして終了するという形を取っておられるようです。中には地区全員では無いのですが、神主に払う御礼があるんだったら、もう一升いい酒を買ってきて飲んだ方がいいという方もいらっしやいます。そういう地区には、今後懇切丁寧に粘り強く、神道の考えというものを説いていかなければならないと思っております。その他、春だけお祭りに来てほしいという地区もあります。

地神碑の形は、明治・大正に建立されましたものは、殆どが五角柱で各面に神様の御名が刻まれています。又、新しい地神碑になりますと、色々な形をした山石を使用して、単に「地神」とのみ刻んだものが多くなっています。五角柱に刻まれた神様は、正面に天照大神を、他の面には、稻耨魂神、埴安姫神、少彦名神、大己貴神の五柱の神様です。地区

によつては神様の面の順番が違ふところもあります。何れの神様も農業に携わる人々にとつてはとても大切な、農耕や食物、土を司る神様です。

地神碑の起こりとは申しますと、これは私なりに調べてみたことですが、瀬戸内海地方に点在しており、先ほどご説明申し上げました五角柱の地神碑は、四国の徳島県が多いようでございます。また広島県にもございますが、五角柱の地区とそうではない平たい石の地区とで分かれているようです。何れに致しましても、地神碑とは全国的なものではなく、かなり区域が限定された建立物であるということです。因みに札幌市でもやはり徳島県入植者が多い北区にだけ地神碑があります。それではなぜ五角柱となつたのか、陰陽五行説の影響があるのかどうか、それは残念ながら私の勉強不足でまだ分りませんが、秋の地神祭には調べてご報告出来ればと思つております。当麻町で一番古い地神碑は、明治三十二年建立の中央一区、元の西兵村のもの。次に古いのは、中央六区、元の東兵村のもので、明治三十四年の建立です。台座に建立年月日が刻まれたものと、そうではないもののがあり、そのため把握出来ていないものもあります。

当麻町はご存じの通り屯田兵村ですが、徳島県から五十六戸が、広島県からも五十五戸が入植しております。入植した先人達は、未開拓の大地の大変厳しい環境の中、故郷でお

祀りしていた地神碑を作り、精神的支えとしたのです。その後徳島・広島両県以外の入植者もそれに倣って地神碑を次々と建立していきました。

最近では、市街地区の全部と中央地区の一部で農家が一軒も無くなり、会社勤めの人が増え、農業守護という意味合いでの地神祭は減ってきています。しかし乍ら、そういう地区でもまさに「土地の神」としての「地神さん」をお祀りし、春秋の祭典を通じて、地域共同体の絆を強めることはとても大事なことです。地神さんに対する人々の思いはすべて「感謝」というものに繋がるはずで、地区の皆様には日々地神碑の護持に思いを致されており、することに深く感謝申し上げますと共に、先人達の築きましたこの灯火を永遠に消すことなくお守り下さいますようお願い申し上げます。若干お時間を頂きました。ありがとうございました。

（北海道 當麻神社 櫛宜）

米と日本人

西尾酒子 みき

皆さん、こんにちは。未熟なわたしですが、皆さんとお会いできることを心待ちにしておりました。

ちよつとこの写真をごらんください。この風景は日本全土にわたり、紀元前六世紀以前より綿々と受け継がれています。秋になると何がとれますか。「お米」。そうですね。今日はこの古代より受け継がれてきた日本のお米、毎日わたしたちの命を育んでくれるお米について思いおこしていきたいと思います。

地球上の生物のすべては、食物無くしては生きていけません。わたしたち日本人は、主としてごはんであるお米を食べて生き続けている。

皆さん、今朝ごはんをいただきましたか。パンとコーヒーだけの人はいませんか。朝食・昼食・夕食すべてパンか麺類の生活をしている人いますか。現在の若者や子供の中には、ご飯を主食としない人が多くなりつつあることはとても悲しいことです。

お米のパワー、稲作の力の教育が家庭の中で、学校の中で継承されず理解がなされていないからです。

お米のパワーってなあに……お米には（栄養の話）

稲作の力ってすごいよ。

お米を作るには……（作るプロセスを話す・写真）

そして秋の稲刈りまで毎日田に水を引き入れ、消毒、肥料などの手入れ、台風・地震・津波などの心配をしながらも、心こめて一生懸命汗をかきながら約七ヶ月かかってこんなお米ができるんです。収穫できたときの喜びはたとうもありません。（お米を見せる）
米作りの詩を紹介したいと思います。

米作り 田んぼの土を耕し みんな 汗をかく

米作り 田んぼの土を練り練り みんな 汗をかく

米作り 田んぼのあぜを 鍬で撫で撫で みんな 汗をかく

池から水引 汗をかく

田んぼの田底の床馴らし 汗をかく

早苗をみんなで植えて みんな 汗をかく

太陽の恵みに感謝して

雨の恵みに感謝して

ひとりできない米作り

家族・隣人 手と手をあわせ 汗をかく

みんな 手と手を合わせ神様にお祈りして 実り待つ

神様のご加護のもと みんなの和みの心と汗が合わさって

おいしい おいしいお米が いっぱい いっぱい 生まれるよ

神様 神様ありがとう！先ず 神様おめしあがりください！

みんな にこにこ和み 喜び合って

おいしい おいしいごはんを食べようね

米作りによって人と人の和、人の輪がうまれますね。人の輪の力、ひとつの目的に向って成し遂げた喜び、何ものにも代えられません。

稲穂が実り、その実の中の米はごはんになり、お酒を造り、お餅を作る。いろいろな工夫する日本人。もみがらは畑の土の中で活躍。わらは注連縄・縄（漁業・林業・生活必需品など）・蓑・牛のえさ・果物の木の下敷きや被せ・わらぐつ・わらぞうり、いろいろ工夫し

てひとつも無駄にしない日本人の知恵。わらは腐れば肥料にする。リサイクルの知恵。

お米は保存がきく。

米は日本人の命を支えてきた。

このすばらしい米作り誰が伝えたの？

わたしたちに誰が教えてくれたのですか？

それはこの方の祖先です。（今上天皇さまの写真をみせる）

日本の国作りは今から二千六百六十六年前、神武天皇様によってなされたことが『日本書紀』に記されています。

天照大御神様は勅として天皇様に、この米を育て、みんなと助け合い、絶やすこと無く作り、国を平らけく安らけく治めなさい、とおっしゃられました。だから今も天皇様はお米を作り、田植え・稲刈りをなさり、感謝して神嘗祭・新嘗祭を怠らず執り行っておられます。その事に習って全国津々浦々に至るまで、秋祭り、新嘗祭を執り行って大神様に感謝し続けています。

私たち日本人の命をこれまで支えてくださったのは、とりもなおさず天照大御神様のお蔭、天皇様のお蔭、また私たちの祖先のお蔭ともいえます。

天皇様は

「皇室のあるべき姿は、国民と苦楽を共にすること。これが皇室の伝統です」とお話になりました。

感謝の心。米づくりに培った生きる知恵の遺伝子を持つ日本人。創意工夫の力のある遺伝子を持つ日本人。

雨にも負けず、風にも負けず、いかなる苦悩も乗り越えて、天地万物の生き物と共存共栄しながら生き抜く力。寒さにも暑さにも耐えて育つ米作りの、品種改良のため創意工夫し研究する力。

自分の失敗を決して人の所為にするのではなく、自らを反省し、工夫し、考えて立ち直る力（だるまさん）。そして、共に助け合い、共に喜びを分かち合う日本人の生き方は、神ながらの道のつづく米作りから生まれ育ったと言えます。

戦後六十年を迎え、日本人の遺伝子が危うくなりつつあります。

これからは一人でも多くの人に、こどもたちに、日本の伝統あるお米づくりのすばらしさ、お米のおいしさ、お米の価値を伝えていこうではありませんか。日本人とお米づくりは切っても切り離せない関係にあり、お米作りが日本から姿消したとき、日本人が滅亡し

たときと言えるでしょう。そのような事にならないためにも、力を合わせ日本人の米を絶やさないように伝承していきましょう。

お米作りから生まれた日本人としての誇りを持って、このすばらしい地球の世界平和に尽くすことこそ、これからの日本人の使命と言えるのではないのでしょうか。

終りに皆様方の益々のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

ご静聴ありがとうございます。

(和歌山県 宇治神社 宮司)

乃木將軍と辻占売り少年

松吉宣和

4 神社馬建立、昨年は社殿格天井が玄海地震で破損、台湾檜で修復、崇敬者各位の心暖まる浄財により竣工。

「辻占みくじ」を売って一家をささえ、乃木將軍と出会った事で、生活概念が変わった今越清三郎。

乃木將軍家庭訓の中に「幸せの基は朝晩、先祖に向かひて、手をば合わせよ」と、いろは歌四十八家庭訓の中に読まれており、多くの崇敬者の心の癒しとなっています。

乃木將軍と辻占少年の出会い、明治二十四年三月十八日。当時名古屋第五旅団長乃木陸軍少佐は軍の用事で金沢の大野屋旅館に滞在することが多かった。

乃木少佐は、寒そうに立っている辻占少年をみつけ、「君の年は」と尋ねると、「八歳です」と答え、「両親は」と訊くと、「昨年、父は病死し、母は今年の正月から家を出て、いません」と答えました。「それは大変だ。君が家計をささえているの」と尋ねると、「家は僕と

祖母と妹の四人暮らしで、僕が毎晩友達に見つかからないこの場で、辻占みくじを売っています」。乃木さんが、少年の頭をなでながら「学校はどうしているのか」と尋ねると、「休んでいます。行っていないせん」。「勉強は大切だ。おじさんがこれをあげるから、明日から学校に行き、しっかり勉強し、世のためになるりっぱな人間になりなさい」と言いながら、懷から紙つつみを少年に渡した。

「おじさん、有り難う御座います。立派な人間になります」と頭を下げた少年は、乃木さんの姿が見えなくなるまで見送り、家に帰り紙包みを祖母に渡すと、中には大枚なる一円札が二枚入っていた。

祖母は感激のあまり声が出なかった。翌日の金沢新聞に、「乃木旅団長と辻占みくじ売り少年」の美談の記事が、車夫の新聞投稿で掲載されて、祖母はその時初めて乃木さんであったことを知り、驚きと感動で目頭を熱くした。

昭和三十九年北海道函館市に、熱心な乃木將軍崇敬者、柳生一郎氏が同市の彫刻師、鈴木達氏に「乃木將軍と辻占少年像」を作製依頼し完成。

函館駐屯の第二十八普通科連隊営内に寄贈され、新聞に建立記事が掲載されて、その少年が、「私です」と名乗り出て銅像と対面した。八十年前の思い出話に涙を流し、周りの人

達も乃木將軍の恩情を偲び、「八歳の少年が一家を背負って立つ健気な姿」に涙を流した。

乃木さんの言葉を忘れることなく、金箔業に従事した今越清三郎、昭和四十一年、八十六歳で滋賀県甲賀郡に住み、金箔業が社会に認められ、滋賀県の無形文化財の指定を受けた。辻占少年今越清三郎氏は、昭和四十九年三月、静かに波乱に富んだ貴い生涯を、九十一歳で天寿を全うされた。

八歳の少年に、「世のためになる、立派な人間になりなさい」と声をかけられた、乃木將軍の一言が、無形文化財に指定され成功した人間像を作り上げた。

国民は乃木將軍を、「日露戦争の英雄」「凱旋將軍」として迎えてくれたのですが、乃木將軍は多くの死傷者を出してしまった事で、申し訳ない気持ちでひとり黙々と全国の遺族と傷病兵への見舞いに行き、遺族に迷惑がからないように「戦友です。ちょっと仏様を拝まして下さい」といって仏壇に礼拝し、そと香典を置いていき、遺族が墓も建てられないでこまっている人には、自分の家計をやりくりして助け、一番心を痛めた事は、傷ついて手を無くした人に「なんとか手を作ってあげたい」と、日夜工夫して義手を完成し、「乃木式義手」と呼んで感謝された。無私無欲な乃木將軍は、傷病者病院の創立には私財を投じて力を尽くし、日露戦争の戦勝によって、国からの恩賞金を受納し、そのすべてを部

下にと考え、三十八人の将校には労をねぎらうため、金時計に「頒恩賜（おんしをわかつ）第三軍記念」と記し、手渡して歩き、当時は「乃木さんの金時計配達」といつてもてはやされた。兵卒には現金を分配、残ったお金は我が子二人（勝典と保典）の追悼祭典に使用し、静子夫人と共に旅順の戦地を訪問し、冥福を祈り、激戦の思いを「山川草木」「富嶽」「凱旋」「爾靈山」の漢詩をつくり、自分自身が体得し、軍事精神の基盤となった。

今後は「教育精神」として役立てようと思い、乃木將軍家庭訓「いろは歌四十八」を詠まれた。

崇敬会の短歌会が、勉強会と親睦をかねて社務所で会が開催され、「辻占みくじ」を授与品として取り扱う事を協議、相談。全員が協力する事に賛成してくれました。

「乃木せんべい辻占みくじ」は、長府みそ煎餅を二つ折りにして、その間にみくじをはさみ、ビニール袋に入れて授与した。おみくじの内容は、乃木將軍が明治天皇に日露戦争終結後挨拶にいかれ、多くの負傷者、戦死者を出したことで、責任をとりたいと申し入れをしましたが、「二人の子供を亡くし寂しいだろう」と言われ、多くの子供を授けようと、学習院院長を命じられ、昭和天皇、秩父宮、高松宮の三人と多くの子供の幼児教育に携わられた。

今は学問の神様、御夫妻が共に殉死され、偕老同穴の契りをまっとうされたので、学問に関する事や御夫妻の人生観についての短歌を作ることになり、二ヶ月後五十五名の方から百八十首の投稿があり、上段に吉凶の代わりに十二直と説明文を記入、その下に短歌一首と左下に投稿者の氏名を記載、「乃木せんべい辻占みくじ」好評の記事が新聞掲載され、各地からの参拝者が受けられ、賑わいと笑いで乃木將軍御夫妻の遺徳が偲ばれています。

(山口県 乃木神社 宮司)

お宮参り

西村純子

本日はお嬢様がお生まれになり、お目出とうございます。

「少子高齢化の時代に子供の誕生は誠に目出度く、ご家族と共に社会の大きな喜びでもございます」と言つて、ご祈願の後で次のようにお話をいたします。

当生名八幡神社では「人生儀礼」の第一歩でもある安産祈願において、「岩田帯」いわゆる「腹帯」(妊娠五ヶ月の戌の日に巻く帯で、木綿のさらしに朱で「祈」「安産」と筆で書き、その左端に当社の印を押したもの)をお出ししています。

昔から子供は小さく生んで、大きく育てましようとはよく聞きました。

お腹が冷えないように難産防止や腹部の保護保温のため、また胎児が育ち過ぎないために、例えばお風呂へ入った時等、特にタオルでお腹を巻いて入るだけでも良いでしょう。何でも「過ぎたるはおよばざるが如し」でございます。

当社は八幡神社ですので、数多くのご祭神がおりますが、主祭神として仲哀天皇、そ

の皇后様であられる神功皇后（おきながたらしひめのこと）（氣長足姫命）、そのお子様の応神天皇をお祀りしています。

「古事記」に、今から千八百年ぐらい前になりますが、神功皇后が朝鮮半島に出征した時、応神天皇を身ごもっておられまして、「石」を帯の中に巻きつけてお出かけになり、帰ってこられて安産なされたということが「岩田帯」「腹帯」の起源とも言われています。

その「腹帯」は平安時代に貴族社会で宗教的儀式の一つとして定着し、江戸時代のはじめに庶民に広がって今日に至っているそうです。

そして「腹帯」に産土神の分霊を戴いてこの世に生まれられ「お宮参り」に、男児は生後三十二日目、女児は三十三日目に産土神社に詣で、氏子になられるわけです。氏子になれば、どちらへ行かれても氏神様は守って下さいます。有難いですね。

先ずお嬢様がお生れになり、「二姫二太郎」と言って理想的ですよ。今度は坊ちゃんを生みいただきましょう。と言うことは、最初女の子であるとの下の弟の面倒等をよくみて、母親は大変助かりますし、後々までもよい影響を及ぼします。楽しみにお待ち申し上げます。

さて母親は責任重大なのですよ。「賢い母親」「立派な母親」となつてほしいですね。

小さい時の教育が勝負で、子供は母親のいうとおりになります。白紙の状態ですからど

のようにでもなりましょう。「三つ子の魂百までも」とも言われていますし、又可愛いくば「三つ叱って五つ褒め七つ教えて良きひとにせよ」とも言われているように、悪いことをしたら大いに叱って、良いことをしたらよく褒めてやり、何もわからないのですから過保護にならない程度に、一つずつ教え躾ることが大切でしょう。

昔の「大家族」はおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に、お父さん、お母さんが忙しくて居なくても、誰かが居て色々教えてくれて、良かったですね。今の「核家族」は悪い影響が多く困ったものです。

「学校教育」また「社会教育」も大事ですが、先ず「家庭教育」が一番重要なのです。

健康で立派な大人に、世の為人の為に尽くす思いやりのある人間性豊かな大人に、すくすく成長してほしい旨ご祈念申し上げます。

さて宮内庁から、二月二十四日にご懷妊が正式発表された秋篠宮妃殿下のご経過は順調のご様子、誠にお目出度いことでございます。

(愛媛県 生名八幡神社 宮司)

春祭のあとで

武智輝子

新緑の境内の中、氏子の方々多数御参拝いただき、心配しておりました雨も降らず、御神輿も無事に宮入することが出来ました。総代さんには、早朝より御奉仕いただきまして、厚く御礼申し上げます。

私は総代さんに頼まれて、平成十年迄親戚の神社を十九年間兼務致しました。まずは、拝殿の雨漏りがひどく、そして御本殿、玉垣、石垣を修理し、それに小さいながらも社務所も新築しました。四年に一度の割で修理等をしなければならなかったのです。この間、長い総代さんで十五年、短い方で三年、本当によく協力してくれました。

ちょうどその時、平成五年の第六十一回神宮式年遷宮に当り、三年間寄附金などに取り組んで来ました。主人も私も、社頭講話をし、そして各町内の会も開いて、神宮式年遷宮について、氏子の人、総代さんと共に意見交換も度々行い、よく理解していただいたと思っております。総代さんと共に、神宮の研修旅行にも参加し、御垣内参拝に感激された様

子でした。そして神社庁に寄附金を納める期日二ヶ月前をめぐに、納入期日を決めておりました。でも一部の町内の総代さんだけは、期日を過ぎても何の連絡もありません。私が伺いますと、「私は氏神様の総代ではありますが・・・」と言って言葉を濁されました。しばらく私も考えましたが、このまま放って穴をあけておく訳にもいかず、町内会長さんに糸口を持って行きました。そして話し合いの場を作っていただきました。

「百五十戸の専業農家と兼業農家の町内です。高齢者が農業を守り支えているのです。氏子の人達は、氏神様の修理もまともに出来ないのに、又この上、二十年に一回新しい物にすべてを取り替えると言うことは・・・」など意見も出され、私も考えさせられました。私も嫁ぎ来て、六反のみかん山を作っていましたので、一層身にしました。でも再三話し合い、寄附金は納めてくれました。

神宮さまが栄える為には、全国津々浦々の氏神様が支え、氏神様が栄える為には、神宮様の栄えなくしてはありえない。神宮さまと神社は一体なのであります。

第六十二回、平成二十五年の式年遷宮に向って、現在松山支部でも神宮大麻を三年間で三%増の二年目に入り、着々と準備を進めております。

総代さんは、神社と氏子さんとの円滑なるパイプ役として、町内の会合の時是非お話し

下さいますよう、よろしくお願い致します。

今年の第一次お木曳行事には参加できませんでしたが、来年の第二次お木曳行事には参加しようではありませんか。

士別神社の正式参拝を終えて

「仰ぎゐる士別神社の朴の花」

(愛媛県 勝岡八幡神社 宮司)

結婚式の後で

鎌田告人

ただ今をもちまして、新郎山田一郎様、新婦花子様、ご両人の神前結婚式、更に本日よりご両家のご親族としてご縁を結ばれる親族盃に至りますまで、目出度くご奉仕申し上げます。

私も見習ひの時代を含めまして、神主としてのご奉仕を始めましてより三十年が過ぎました。かつては結婚式と申しますと、私と同世代の新郎新婦でありましたのに、今では私の娘も二十二歳、息子が二十一歳、新郎新婦のご両親が同世代といふ年齢になりました。さうした意味からも新郎新婦の感激はもとより、ご両家のご両親様、本日をお迎へになられましたそのお慶びは、いかばかりかと拝察するものであります。本当におめでたうございました。

さて私、結婚式ではいつも同じお話、ご挨拶をさせていただきます。少しくお時間を拝借いたします。

初代の天皇様、神武天皇様が今の奈良県でイスキヨリ媛様といふお后をお迎へになられました折に、お詠みになられましたお歌が古事記といふ書物に残つてをります。それは

葦原の しけしき小屋に すがだたみ

いやさや敷きて 我ふたり寝し

といふお歌です。お歌の意味は、葦の生ひ茂る野の中に、しけしき、粗末な小屋を建て、すがだたみ、まゴザと申しますやうな敷物を敷き、我々の新婚生活は始まつたな、と、そのやうなご様子をお詠みになられた訳です。

日本の建国、二千数百年前は神武天皇様でさへがそのやうな結婚生活をお迎へになられた、お始めになつたのだといふ事が偲ばれます。

さて、私達のふる里でありますこの比布の町は、今から百十年ほど前に開拓が始まりました。それこそ開拓当初の比布は、葦やヨシが生ひ茂る、あるいは直径が一メートルを超える大木が林立する、原始の森の広がる、まさに比布原野でした。

私達の祖先はこの原野に入植しまして、雑木を切り、その幹や枝で骨組みをし、そして壁も屋根も熊笹で囲ひ、覆ひましたさうです。さうした粗末な小屋で開拓生活が始まりました。

私は神武天皇様のお歌を思ひ出します度に、祖国日本の建国当時と、この比布開拓当時
が重なつてと申しますか、なにかそこに大変に共通するものを覚える、そんな心持ちにな
るのです。今日の繁栄する祖国日本、そして開拓当時の比布原野、今では一枚の田圃が一
町歩を超えるものもあるほどに整備され、美しい田園風景が広がつてゐます。これらはす
べて私達の祖先、先人の努力の賜であり、日本人として、そして比布町に住む者として、
祖先への、そして開拓の先人への感謝は決して忘れてはならないと思ふのです。

ご新郎ご新婦はそれぞれの両親の愛情に育まれて成長されまして、本日をお迎えになつ
た訳です。ご両親に感謝していただきたい、そしてご両親から更に広がつてゐる、多くの
ご先祖の尊さにも思ひをいたしていただきたいと存じます。

先ほどの祝詞の中に「相生」といふ言葉がありました。お耳にとまった方があるかと存
じます。

ご存じの方もあるかと存じますが、山陽新幹線に乗りますと、兵庫県内に相生といふ駅
がございます。姫路から岡山に向かふ途中でございます。また、岐阜県や香川県にも同じ
地名があるやうですが、兵庫県の相生といふ地名の由来、おそらく岐阜、香川も同様と思
ふのですが、次のやうなことです。

実生、即ち種から芽を出しました赤松と黒松の苗、初めのうちは離れてゐましたが、段々に成長するごとに、幹が太りますごとに近づいていきます。そしてそのうちに幹と幹が触れるやうになります。そして更に成長が進みますと、二本の木はやがて完全についてしまひまして、一本の木に同化しました。さうしたことを相生、字は相談の相に、生命、生きるといふ字で書き表します。まさに別々に産まれたものが、やがて一体となつて共に生きていく姿そのものです。

東旭川に鎮座の旭川神社に、かつて昔、アイヌの人々がお祭りを行つた場所と伝はるハルニレの太木が残つてゐます。これは三本のニレが成長してくつき、一本の木になつた相生の木です。アイヌの人も、倭人と呼ばれる私達も、やはり自然の神秘に同じやうな感懷を抱いたのだなと思ふのです。是非興味のある方は一度ご覧いただくと良いかと存じます。

新郎新婦は別々のお家に生まれ、そして成長して本日晴れて結ばれ、夫婦となりました。どうかこれからは太く丈夫な相生の木となつていただきたい。そのやうにお祈り申し上げます。そしてこの少子化の時代、沢山の实生、お子様を授かつていただきたいと、これはお祈りといふよりもお願ひを申し上げておきます。

結びに本日のご縁を機に、お二方はもとより、ご両家の皆々様が益々お幸せでご繁栄なさいますこと、氏神様、比布神社のご神前に重ねて祈念申し上げます、なにかまとまらぬ事を縷々申し上げましたが、一言お祝ひのご挨拶とさせていただきます。

本日は洵におめでたうございました。

(北海道 比布神社 宮司)

とこわか
常若の祈り、
なかいま
中今のつとめ

―民族派青年有志「神宮参拝硯研修の集い」開会にあたりて―

大野 康 孝

孝明天皇御製 戈とりて守れ宮人九重の みはしの風そよぐなり

いざごども馬に鞍おけ九重の みはしの桜ちらぬそのまに 宮部鼎蔵

本年の干支は丙戌^{ひのえいぬ}。この年を占うべく大漢和辞典を繙けば、丙の歳は運氣強く、余りて内乱の氣生じ外敵侵略の災禍あるやの年とか。次いで戌の字は、「人が戈を持ち立つところの防人の姿の象形文字」で、十二支の動物になぞらえるならば嗅覚耳眼優れたる忠実勇猛なる犬を意味し、「誠」とも「美しい」とも読むとの事です。

まさに、神国日本の命運と我らが使命如何に重大なる年であり、この事を示唆し警鐘する年廻りであるかと、各位にはすでに確固^{おつこ}と思ひあたれている事と存じます。

冒頭に孝明天皇の御製と、この切なる大御心^{おおみこころ}に答え奉るとの尊攘の志士、肥後敬神党の宮部鼎蔵先生の返歌を掲げました本意をこゝにお察し戴き、この神都伊勢にて一両日開催

の『神宮参拝硯研修の集い』趣旨をしつかりと肝に銘じて戴きたいと思ひます。

ところで現在、世界百九十六ヶ国中に君主国が二十九ヶ国在り、その内の二十六ヶ国は人口五千万以下の国家であるそうです。それでは、その人口五千万を越す三大国家とは。

一つはヨーロッパの女王陛下の国イギリスです。国教はキリスト教。十世紀から続く王朝は、実は現在までに九回も変遷しており、その人口は現在六千万人を切ります。

もう一方の君主国は、つい先日、天皇陛下が国王のご在位六十年奉祝式典に出席の為に訪われたアジアの友好国タイであり、熱心な仏教国です。その王朝は十三世紀からの七百年余の歴史中にやはり四回変わっており、人口はわずかに六千万人を上回るそうです。

その二カ国の人口を合わせても、一億二千万余を擁する我が国には及びません。

初代神武天皇ご即位以来、皇紀二千六百六十六年。日本は世界最大最長の、しかも神代の昔より万世一系の天皇を仰ぎ来る「最も古い歴史と伝統を誇る世界に冠たる君主国」であり、皇室は世界中で最も安定した統合力と求心力に富む高貴なる家柄なのです。

しかし私たちは、世界に類無きこの君民一体の国柄の有り難さを特別な事と尊びながらも断々固と守り伝えゆくべく、祖国日本の誇りと道義の恢復の為に言挙げすべき努力を事欠いて来たことを、この際、深く反省しなければなりません。

秋篠宮妃殿下の御懷妊という天佑神助により、まさに間一髪の時を得て、今回の拙速にして意図的に皇統を絶やさんとするが如きの、皇位継承に関する保革野合の亡国の論議は一応は排除されたのですが、実に由々しき深刻なる危機でした。

一刻も早き憲法と皇室典範の本来あるべき姿への改正をと、熱望して止まぬ次第です。

さて、本年もまた全国より民族派の青年有志がこの伊勢の聖地に参集して、皇民吾れと弘暁の清流五十鈴川に身魂を禊祓つて清らなる真性を回復し、特別に許されて皇大神宮の御垣内深く正式参拝を奉修。次いで内宮神樂殿に太々神樂を捧げまつり、更には神宮域内の別宮諸管社を巡拝して、維新回天への祈りを共に一心に捧げ奉る運びとなりました。

明治天皇御製 国民もつねにこころをあらはなむ くにたみ みもすそ川の清きながれに

朝夕に神の御前にみそぎしてすめらが御代に仕えまつらむ あまてらすおみかみ おおみまえ 川面凡児 みよすそがわ つか

謹みて天照皇大神の大御前を拝し、勤皇まことむすびの責務邁進を祈り誓うのです。

では、かくなる我々のこの禊祓いの祈行の本源は何処に典拠するのか、この志業に際して是非とも、『古事記上巻』を精読の上でのご参加をと、同志諸兄にご案内申しあげましたが、今一度、深く神話に学びその意を確固と胸に刻んで頂きたく、切に念じての事でした。

この後に、古事記上巻を講読しつゝ、禊の神業と和歌の修礼をいたしますが、我々の禊の

眼目はと申しますと、たゞ自己一身の罪穢れの祓除のみならず、神ながらなる皇民吾れの確固たる青年維新者として自我を確立し、かくして如何なるものにも穢されぬ揺るぎなき断々固たる神武の劍魂を奉戴して、維新の大道に生死する事にあるのです。

伊邪那岐神が黄泉国より往還され、橘小戸阿波岐原にて禊祓給いしその時にも、決してお放しにならなかつた十拳劍の靈理をしかと仰ぎ鑑なければなりません。

禊祓いこそ劍魂の発揚であるのです。ここに伊邪那岐伊邪那美妹背二柱大神の御神業、国生み神産みの修理固成の神勅が極まり完結され、皇祖天照大神以下の三貴神がみ生れ給い、かくして高天原の御事が始まつた事は記紀に語られしその通りです。

この様に示し申せば、劍魂の発揚である禊は修理固成の神勅達成に至る、必然にして究極の道筋であり、その大眼目は皇室国家日本の源基大本にあることが理解できます。

各位には、天津祝詞すなわち祓詞を奉唱する事によつて此処に至る古事記の概略大意をつぶさに我が信念信仰として、明朝弘暁の五十鈴川での禊行に臨んで戴きたく存じます。そうして我々の禊は、国の汚濁を禊ぎ祓う破邪顕正の青年の大禊なのだと猛省自覚し、伊勢神宮の大御前に八紘一字世界平和の大理想に根ざす誓願を捧げたく存じます。

本日この開会に先立つて半数近くの方々と外宮ならびに各別宮を先拝し、只今の殿舎と

各々隣接する御敷地とを目前に拝観して、来る平成二十五年度齋行の第六十二回神宮式年遷宮の御義の一端を伺うにあたり『常若と中今の思想』を学びました。

式年遷宮はただ単に神殿新築と引越しの祭りではありません。二十年を一区切りに一巡して神々もまた新たな生命を甦らせ給う、修理固成の岩戸開きの大御祭なのです。

その目的は、天照大神の大御命を常に若々しく保って戴き、この神国日本もまた神々の稜威の更新により、物心共に甦って健全ならしめる深い祈りに淵源するのです。

大いなる神々の悠久の生命の連続「常若の祈り」に徹する、過去現在未来の真只中の今に生きる我が民族の叡智であり、この「中今のつとめ」は禊祓いの心に始まるのです。

剣魂の発揚である禊祓いは、天祖二柱の大神が天の沼矛を持って行ぜられし修理固成の大神業に連なる究極の祈行であり、その眼目は決して汚されることなき神国日本の大本を樹ち立てる必然の道理であつたのだと確信して、志道恢復の為に邁進せねばなりません。

孝明天皇の「戈とりて…」の御製の大意をあらためて深く拝承、先覚烈士の必死懸命の祈行と勇武の業績とを仰ぎつゝ、今こそ禊の心はこれ新なる永遠の日本の生命の甦りとぞ大いなる剣魂を奮い起こし『常若の祈り、中今のつとめ』に徹しようではありませんか。

未来につなぐ命の緑

野口拓志

ヒマラヤなどの高い山では、標高七、三〇〇メートルから上は、酸素が非常に少なくバーティカルリミットといって、人間の行動限界になります。山頂を目指す登山家にとって、ここで絶対必要となる物が酸素ボンベであり命綱となります。その酸素ボンベは一本数万円もするそうですが、数時間しか持たない高価な物です。普段の生活ではタダで吸っている生きてゆくために必要不可欠なこの酸素は全て森林や緑から生まれているのです。

私たち日本人は、命の源である広大な緑の森に囲まれ恵まれた環境の中で、自然と共生して自然に感謝しながら、そして畏敬の念を持って暮らして来ました。

例えば、神社の境内には樹齢何百年という御神木があり神聖な木として大切にされていますが、同じ様にそれぞれの地域において大切に保護されている木が沢山あります。それらの木は、区画整備や何らかの理由によって、その場所に道路を通したり建物を建てたりする場合であってもその木を神格化して伐採をせずにそこを避けて造ったり、どうしても

伐らなくてはならない場合であっても丁重にお祓いをして祈りを捧げます。古来より、日本人がつくり上げてきた宗教観や自然観であります。

ところが最近では、これらの自然を崇拜する心が薄れてしまい、乱開発による森林破壊が数多く見られます。又、聞くところによりますと国土の七割を占める森林の内、四割もの森が昭和三十年から四十年を中心に人の手により植林された人工林であり、植林により出来た森というのは本来、間伐等の手入れをしてこそ健康で元氣のある森になるそうです。その人工林が建築材料や家庭燃料の変化により木材の流通が減った為に人が山に入らなくなり元氣を無くしているとの事でした。

伐られすぎることによる森林破壊の問題と伐られなさすぎて山に入ると真っ暗で土が剥き出しになつていような森林荒廃の問題。これらの問題により、緑が至る所で悲鳴を上げています。文明がハイテク化して行くに従つて、どうしても自然から離れた暮らしになつてしまい、人と自然のつながりがどんどん失われて来ています。このままでは、後世に豊かな森の緑を残すことが出来なくなつてしまします。それでは、どの様にすれば良いのでしょうか。

巷では最近「エコロジー」や「エコ」という言葉をよくに耳にします。これらを聞くと

先ず思い浮かぶのが「自然に優しい」ですが、本来の意味は、生物と環境の相互関係つまり、生態系を研究する生態学という学問のことなのです。ところが、地球温暖化であるとか様々な環境問題に対する取り組みが盛んに行われるようになり、環境保護運動といった自然や生態系全体の保護を象徴する意味で使われるようになったようです。このように、自然環境に対する関心が高まっているのは確かです。又、各地では、森林ボランティアの皆さんによる森づくり活動や緑化運動が盛んに行われていますが、まだまだ充分ではありません。

特にこれからの時代は、子供たちが未来の森の緑を担って行くのです。私が、子供の頃はテレビゲームも殆ど普及していませんでしたし、お受験といった言葉もありません。毎日のように日の暮れるのを忘れて外で遊んだものです。そうして日常生活の中で自然を学び親しんで来ました。しかし、今の子供たちも大人同様自然とのふれあいが減っています。幸いなことに、神社には緑豊かな鎮守の杜がある上に青少年育成を目的としたボーイスカウトや緑の少年団が組織されている神社が多くあります。私は、現在その緑の少年団の団長を務めておりますので、団員の子供たちと一緒に様々な活動を行っています。活動に参加している子供たちは、自然とふれあい目を輝かせて実に生き生きとしています。ですか

ら、もつともつと緑の中で遊べる機会と時間が必要であると思います。そうすればきっと自然の尊さ、素晴らしさが実感出来るはずです。

命の緑を未来につなぐためには、大人も子供も一人でも多くの人たちが自然によって生かされているということを実感して、それに対してお返しするという気持ちと自然崇拜の気持ちを持つことが今後ますます大切になってくるのではないでしょうか。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

新しいものと古いもの

池田元教

日本人は日頃から宗教に関して疎い方が多いと思われれます。しかし世界の大半の人は、何らかの宗教を信じているのですから、宗教を知ることが世界に在る大半の人の基礎に存在するものを認識することでもあるでしょう。これに関しても、最近話題になる「分祀」という言葉もそのひとつでしょう。これは神道の考え方を知らない実に滑稽な意見であります。神道の考え方では、魂というのは一度合祀すれば、そこから元の魂を取り出すのは不可能だと主張します。つまり、分祀せよという意見は、砂糖とミルクを混ぜたコーヒーから、砂糖とミルクとコーヒーを完全に分けると言っているようなものなのです。これも、神道について少しの知識があれば分かるようなことです。もう少し突っ込んでみますと、驚くべきことに、戦前から平成六年にかけての神道事典には「分祀」という独立した項目は無く、神道事典に項目が立てられるのは、やっと平成十六年になってからです。また、一般的な辞書「大辞林」や「広辞苑」においても「本社と同じ祭神を他所の新しい

神社にまつること。またその新しい神社」と記されており、ほぼ「分霊」の類として扱われていたりします。つまり、「分霊」とは違って「分祀」とは神道になじみの薄い言葉であることがわかんと思いますし、そもそも現代のマスコミ等で言われているような考えとしての分祀は、私の知っている範囲では内政干渉が始まる以前には存在しなかったと思います。これを考えると「現代版の分祀」という考えは古来の日本には無かった、全くの新しい考えだということがお分かりになるかと思います。

ここで新しいものについて考えていきますと、人というのは新しいものに飛びつきたがるものです。しかし、新しいものも古いものの上に成り立つものなのですから、結局のところ、古いものから学ばなければ新しいものも完全には理解できないし作れないと思います。過去を否定したり、あるいは全く過去との繋がりを断絶した新しいものなど、この世には存在しないでしょうし、たとえあったとしてもそれは長く続かないのではないでしょう。我々日本人が長い歴史の中で築き上げてきた生活様式は、そう簡単に崩れるものではなく、意識するせざるに関わらず、民族の「血」として脈々と流れ続けるわけで、発展も革新も、継承された伝統文化の土台の上に築かれるはずです。私たちが暮らしていくなかで、常に新しい技術や文化、価値観が生まれて、生活のなかに取り入れられてい

ます。それは現代だけのことでなく、大昔から行われてきたことです。何世代にもわたって、私たちの先祖の生活は変化を続けてきました。こうした変化の積み重ねが歴史だといえます。しかし、そうした生活の変化は、古いものを捨てて新しいものを取り入れるのではなく、古いものに新しいものを加えて、生活に必要なかたちに変えていくということでした。ところが、現代は変化があまりにも大きく、そして早いため、古い生活のスタイルは未来に何も残さずに消え去り、全くの新しいものを作ろうとしている傾向があります。それは分祀という考えから見受けられるでしょう。

未来に活かせる昔の知恵や技術、あるいは、私たちの郷土を理解するために必要な昔から続いてきた伝統などは、私たちの次の世代にも伝えていくために、大切にしておくことが必要です。外つ国の文化を輸入して近代化を推進するのも結構ですが、その際、自分たちの文化を破壊・変質しすぎないように、我々が古いものについても少し理解してそれを守る必要があるのではないのでしょうか。

神道と動物

中谷英明

皆さん、神道という言葉を知っているでしょうか？カミサマのミチと書いて神道と読みます。仏教、キリスト教、イスラム教などと同じ宗教の一つで、日本古来より伝わっているものであります。日本文化と深く関わりがあり、お盆のお墓参り、正月の神社へのお参り、結婚式、七五三、成人式、還暦など普段の生活の中の行事として行われているものも数多くあり、生活習慣の中にとけこんでいます

家の宗教が仏教やキリスト教だからといってこれらの行事をしてはいけないと言う決まりはなく、誰でも参加して良いのです。

神道と言っても普通の家庭での生活上で神棚をお参りしたり、亡くなった御先祖様達のお墓参りをしたり、熱心な方だと近くにある神社に参拝、お祭りなどの行事に参加、御奉仕される方もおりますが、基本的な教えは、自分を産んでくれた両親、その両親を産んでくれた御先祖様達に感謝すること、自然や物、国を大切にするというものです。

宗教には教典というものがありますが、神道では教典とは少し違いますが、日本の国が造られる様子を書いた古事記や日本書紀がそれに近いものとされています。

この古事記には数多くの動物等が登場します。有名なところでは因幡の素兎の兎、サメ（ワニ）、八俣の大蛇やまた おろちの蛇、他にウマ、カラス、ニワトリ等、古くからこれら多くの動物との関わりがありました。

神話の中に出てくる動物の中には神の化身として現れるものや、神の使いとして登場するものもあります。神社に参拝したときに見る狛犬やおキツネさんなどは神の使いとされています。よく勘違いされている方がいるのですが、稲荷神社にはおキツネさんを神社にお祀りしている神様だと間違われている方が多いようでして、元々稲荷神社の使いとしておキツネさんが置かれる様になったのは、『稲荷流記』という書物に

「昔、平安京の北、船岡山の辺りに年老いた夫婦の狐がいた。夫は銀の針を並べたかのような白くて美しい毛並みを持ち、尾は密教で用いる五銚杵ごしよをはさんだような形をしていた。妻は鹿の首に狐の体を持っていた。夫婦には五匹の子供があり、子供達もまた各々が不思議な姿をしていた。

弘仁年中（八一〇～八二四）の事、夫婦狐は子供たちを連れて稲荷山に行き、神前

にひざまづいてこう言った。「私達は獣の身ではありますが、生まれながらに靈智を備えています。世の中を守護し、人の役に立ちたいと願うのですが、この姿では思うようになりません。願わくばお社の眷属となり、御神威をお借りして、この誓願を果たしたいのです」これを聞き、いたく感動した稲荷明神は喜んで願いを聞き届け、夫の狐は上の宮、妻の狐は下の宮へ仕えることとなりました。

こうして各々十種の誓約を立て、あらゆる願を叶える力を得た夫婦狐は、稲荷神社を信仰する人々の前に直接、あるいは夢の中にその姿を現してこれを導くようになり、やがて「告狐」と呼ばれるようになった。

という話が元になっていると言われています。

また、キツネは農耕を妨げる野ネズミや野ウサギを退治したり、田畑の近くによく出没することから、農業の神様（稲荷）のお使いになったとも言われています。

また、最近ではサッカーのワールドカップをTVでやっていますが、日本の選手達が着ているユニホームにも神の使いとされている八咫鳥のマークが付いています。この八咫鳥は日本書紀の「神武天皇」の条に、東征の途上の皇軍が、熊野の山中で進路を見失ったとき、一行の前に一羽の鳥が現れ、皇軍の道案内をしたと記されています。この鳥が八咫鳥

で、天照大神が遣わされました。日本の選手達もこれにあやかり、八咫烏に勝利を導いてもらおうと胸に八咫烏のマークをつけたと聞いています。

このように、神道にはいろいろと動物にまつわる話や、他にもあまり知られていない面白い話がたくさんありますので、もし興味をお持ちになられたなら、近くの神社に足を運ばれて、神主さんにお話しをうかがわれてみてはいかがでしょう。

(北海道 上川神社 権瀬宜)

国歌と愛国心

上村章義

今、日本中は、ドイツで開催されているワールドカップで大変盛り上がっていますが、神職として最近とても気になるのは、日本の選手の中で日本の国歌である「君が代」を歌う選手と歌わない選手がいることです。サッカーに限らずこの前見事に日本が優勝したワールドベースボールクラシックやオリンピックでも同じような光景が見られました。日本人は少し国家を思う気持ちである愛国心が欠けているのではないかと感じています。

それに加えて私があります日本国民として恥ずかしいのは、九十四年アメリカワールドカップの最終予選、世に言うドーハの悲劇のラモス瑠偉、九十八年フランスワールドカップ日本代表の呂比須ワグナー、そして現日本代表でもある三都主アレサンドロなど、もともとブラジル人であり日本で長い間プロとして活躍し、その生活の中で日本という国に魅せられ自分の生まれ育った国籍を離れ、新たに日本の国籍を取得し、ブラジル代表になる夢ではなく日本の代表として日の丸を背負い、日本のために戦っていた彼らに、今の日

本人が忘れてゐる国に対する強い誇りと愛国心を感じています。日本代表の国歌斉唱を見ていてもわかる通り、胸の日の丸に手をあて大きな声で歌っているのは三都主選手唯一人です。国旗を掲げ国歌を歌い自分が代表に選ばれユニフォームの日の丸に誇りを感じ、今このピッチに立っている事に喜びを覚え、気分を高め試合に臨むこと。日本の選手及び一億三千万の日本国民が場面は違えどもそれを実践できた時、初めて国家という共同体になるのだと思います。国家を愛する気持ちである愛国心を表すのに老若男女が最も実践しやすい事、それこそが国旗を掲げ国歌を歌うことではないでしょうか？

それでは国旗、国歌とは何でありましょうか？「大百科事典」（平凡社刊）を見てみますと、「国旗とは国家を表徴する尊厳な標識。．．．国旗は国の識別標識であるのみならず、国の主権を象徴する神聖な性質を賦与されている」と説明されています。このように国旗とは、その国を表すシンボルであり、ありとあらゆる国に翻っています。どの国旗もデザインや色彩にそれぞれ意味が込められており、それぞれの国旗からその国の歴史や風土を垣間見ることができます。

日本の国旗である日章旗について簡略に説明しますと、安政元年（一八五四年）「日の丸」が日本の総船印と決められ、明治三年（一八七〇年）太政官布告により御国旗と確定され

たのが正式だとされていますが、皆さんご承知のとおりそれ以前から壇ノ浦の合戦や秀吉の朝鮮出兵及び朱印船などで登場しています。白地は清純な心、赤の丸は太陽の光明と円満な真心を表しています。私も所属しております上川神道青年会では、一昨年に「祝祭日には国旗を掲げましょう」という看板を上川管内の神社の各御社頭に設置させて頂き、昨年は旭川、士別、名寄、富良野などの比較的人口の多い場所で「国旗の意義」について書いてあるティッシュを配り、街宣してまわりました。全国的に見れば小さな事かもしれませんが、同じような気持ちをもった人で各都道府県ごとで行えば、このような小さな活動もいずれ大きなうねりになり、いつかは実を結ぶのではないかと考えております。

国旗が国の象徴であるなら国歌は何であろうか？ 多くの国家では十九世紀以降の近代国家の成立に伴い、国際的行事における使用の要請から作られたものがほとんどであり、他国に対し自国の独立性を示し、国の内部結束を強化することであります。世界の国歌についていろいろ調べた結果、大まかにではあります但四つの傾向にわけらる事ができます。まず一つ目は、神や君主を讃える国歌であります。ここにいう神とは、キリスト教やイスラム教における唯一絶対神だけではなく、自然や祖先などの神々なども含め、特にイランやインドなどの国家が代表的であります。君主を讃える国家の代表例としては、対スペイ

ン独立戦争に奮闘したオレンジ公ウイルヘルムの武勇を讃えているオランダ国家があります。二つ目は歴史や風土を讃えた国歌がありますが、ほとんどの国の国歌が少なからずこれに属しているといっても過言ではありません。

三つ目は祖国の独立を讃える国歌です。国家というものは、単に土地があり住民がいるだけでは成り立ちません。その国が侵略されないように安全・安心が得られる独立性を保たなければなりません。多くの国が大国に侵略され、植民地支配をうけ、その支配下におかれた例が多くあります。それだけに支配を克服するまでの苦しみや、独立を勝ち取った時の喜びを国歌に表したものが数多くあるのです。代表例としてはアメリカ合衆国、ブラジルがあげられます。

四つ目は社会の革命を讃える国歌であります。三つ目の祖国の独立を讃える国歌が、外からの支配をはねのけた誇りや喜びを讃えた国歌であるのに対し、国の内にいる支配勢力を打ち倒して主導権を確保することにより生まれた国も多くあります。代表例はフランス革命により生まれたフランス国歌やイタリア国歌であります。では日本の国歌である「君が代」はどのように成り立ったのでしょうか？　そもそも「君が代」が最初に文献にあらわれたのは古今和歌集だといわれ、祝賀の部のはじめに、題しらず、読人しらずと称し書

かっていたのが最初とされており、鎌倉・室町時代に入ると和歌という域を超え、神社仏閣の祭礼行事及び酒宴の舞納め歌に使われ、江戸時代に入ると庶民達が愛好した仮名草子・浮世草子や読本などにもちいられ、一千年の長きにわたり愛好された和歌こそが今の日本の国歌である「君が代」の原型なのであります。明治以来百年以上にわたり日本の国歌として定着し、平成十一年には国旗・国歌法も施行され、名実ともに「日の丸」「君が代」が法的にも認められたのであります。日の丸を掲げ君が代を歌う。これこそが日本人が日本人たる心を示すはじめの一歩だと私は思います。

(北海道 上川神社 権禰宜)

神道人として

吉田隆宏

我が国のここ最近の少子化対策として、やたらと出産や育児に対して手厚い給付金や援助が増えております。なぜかと申しますと、気の毒にも病氣や体質などの理由で、子供を授けられない方も多くいる一方で、自らの意志で子供を授かろうとしない夫婦が増えており、その理由を問うアンケートなどでは必ずと言っていい程その一位を占めるのが、経済的に苦しいなどの金銭面での理由だからだそうです。

たしかに、子育てにはお金もかかります。しかし、昔はもっと苦しい生活をしていても五人や六人は子供がいるのが当たり前でした。ですから、本当に今日明日生きるので精一杯という方は除いてほとんどの場合、金銭的なものは子供を授かろうとしない理由にはならないでしょう。けれども、煩わしいから子供を授かりたくない、はつきり言ってしまふのはいささか体裁がわるいものですから、金銭面を理由にしているのでしょう。

したがって、「産みたいけど、産めない」ではなく、「産めるけど、生活水準を下げたり、

自分の時間を犠牲にしてまで産みたいとは思わないから、産まない」が実際のところのようです。

私事で恐縮ですが、昨年私も結婚をし、この春、長男にも恵まれました。実際、国や行政からの補助の多さには驚かされました。

昨年の秋に妊娠がわかり、すぐに両親に報告しますと、父は、「あら、うれしい」と非常に喜んでくれました。しかし、それから二ヶ月ぐらいいして、初孫の顔も見ることなく父は他界しました。なんの親孝行もできませんでしたから、なんとしても孫を抱かせてやりたかったのですが、それが叶わず非常に残念でなりません。「親孝行したいときに親はなし」とは本当によく言ったものです。しかし、生まれてくる初孫の存在を知らせることができただけでも、せめてもの親孝行になったのかなと、今では思います。

父が危篤状態となった時、父の入院する病院からの私と家内とでの帰り道、初めてお腹の子が動きました。今、自分の子供をあやしながら抱っこしていると、我が子を抱いているのに、なぜか私が父に抱かれているような気がして、涙が出そうになります。父の生まれ変わりなのでしょうか。

さて今、日本の人口は一億二千万人を突破しておりますが、百五十年前の人は今、誰一

人として生きては存在しておりません。つまりたったの百五十年で、日本の全ての人が入れ替わったということになります。

もしそれが、秋に樹木が葉っぱを一旦全て落とし、翌年の春にまた新たに芽吹いて葉が茂るような、あるいは川を遡って卵を産み、やがて稚魚が生まれる前に死んでしまう鮭のように、前の世代が完全に絶えてから新たな世代が生まれるような世代の変わり方ならば、遺伝子的な繋がりはあっても文化的な継承は一切無いでしょう。

しかし、我々人類は幸いなことにそうではなく、両親や祖父母とかなりの間同じ時を過ごし、たくさんのかたちを教わり、受け継ぐことができます。そうして、命と文化のバトンが数千年にわたり連綿とリレーされてきたのです。

たくさんさんの困難を乗り越えてようやく祖先から今日まで受け継がれてきたものを、いとも簡単に途絶えさせてしまうような最近の人々。御先祖様にどう申し開きができませんか。それとも、産むも産まぬも自分の勝手でしょうか。自分の命も子供の命も、自分一人のものではありません。繋いできた御先祖様のものなのです。

二宮尊徳翁の道歌に、

父母もその父母も我が身なり

我を敬せよ我を愛せよ

とあります。

そんなことを思うとき、私は御先祖様に感謝せずにはられません。父もそう、おじいちゃんおばあちゃんもそう、そのまたおじいちゃんもおばあちゃんもそう、そのまたおじいちゃんおばあちゃんも、そのまたそのまた……。そうして遡り極めれば、私たちは大おや神様に繋がる尊い生命をいただいているのです。それは、私たちが日本列島をお創りになった神様のひ孫のひ孫のひ孫の……。つまり末裔の一人だからです。

したがって私たちは、この極みなく尊い生命を未来永劫に伝えて行くべき使命と責任を担っているのです。なぜならば、我々は随神なる日本に生まれた日本人であり、つまりは神道人だからです。

そしてそれを伝えることこそが、正に国のすべきことであり、無駄なお金を使う必要はないのではないのでしょうか。もっとも、子供を授かる喜びは、お金になんか換えられませんが。

浦安の国 日本

佐藤恵美

皆さん、こんにちは。

初めまして、私は士別の上士別町にございます上士別神社の禰宜をさせていただいております佐藤恵美と申します。この度こちらの護国神社様よりご依頼がございまして、今年の慰霊大祭で舞う「浦安の舞」を、今年から陸上自衛隊の女性隊員の皆さんに舞っていただく事に決まりましたので、その舞の指導をお願いしたいという事でした。そこで、お引き受けは致しましたが、皆さんはまったくの初めて。見た事も聞いた事もないという方々ばかりでございますので、どこまでこの舞を理解し覚えていただけるのか、又私がどこまで皆さんにお伝え出来るのかという不安がよりました。がしかし、ご自分の尊い命と引き換えにこの国を守って下さいました御英霊の御前で、日本の危機を救うべく毎日厳しい過酷な訓練をされている皆様が舞うという事に、とても意義深い思いが致しましてお引き受けした次第でございます。これから慰霊大祭までの三ヶ月間、皆さんのお仕事の合間を

調整しながらお稽古を進めていきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願い致します。

ここで先ずこの「浦安の舞」について少しご説明させていただきますと思ひます。今年
は平成十八年、西暦二〇〇六年ではございますが、日本には「皇紀」という数え方もござ
いまして、神武天皇様がご即位されましてから数えて今年は皇紀二六六六年になります。
そして今から六十六年前、昭和十五年にさかのぼりますが、その当時「皇紀二六〇〇年」
を全国で国を挙げてお祝いしようという事になりました、その数年前より準備が始め
られました。全国の神社でも奉祝祭を斎行される事になり、当時宮内省楽部の楽長をされ
ておりました多忠朝先生という方が奉祝祭で舞う神樂舞まの作曲と作舞いをされました。この
先生は宮中に仕えた方で、神樂歌・神樂舞などの創作、復活、普及に多大な尽力をされま
した方でございます。そしてこの舞の歌でございますが、毎年年が明けますと宮中では歌
会始めがございます。昭和八年の歌会始めに昭和天皇様がお詠みになられました、

天地の神にぞ祈る 朝風の

海のごとくに 波立たぬ世を

天地の神にぞ祈る 朝風の

海のごとくに 波立たぬ世を

という御製を賜りました。それから宮内省楽部の楽師の方々二十名が連日多忠朝先生の指導のもと、夜遅くまで舞と楽のお稽古に励まれ、全国に、又遠くは台湾まで派遣され指導にあたられたそうでございます。当時はビデオやカセット、CDもない時代でしたし、楽も生演奏という事ですので、それだけでも大変な事であったと想像がつくのではないのでしょうか。全国十五の会場、延べ一、七〇〇名の神社関係者の方々が十日間受講された後、それぞれが地元のお宮に帰りまして、女学生や女子児童を集めて指導されました。この北海道でも八十名近くが当時の札幌神社、今の北海道神宮様に集まり受講されました。そして皇紀二六〇〇年、昭和十五年十一月十日午前十時、全国一斉に奉祝祭が執り行われ、「浦安の舞」が奉奏されました。それから六十六年が過ぎた今でも変る事なく舞い継がれております。

又、執り物ですがこの扇を持つて舞う扇舞とこのお鈴を持つて舞う鈴舞からなっております。特にこのお鈴の型ですが、三種の神器になっておりまして、こちらが御鏡（伊勢神宮）、こちらが剣（熱田神宮）、こちらが勾玉（宮中）となっております。当初はこちらの剣の型のお鈴でしたが、この剣先に気を付けて舞いませんと、角度を間違えますと神様に向けてしまうことになりかねませんので、今ではこちらの型が多く用いられております。

そしてこの「浦安の舞」の浦安という意味ですが、「心やすらか」という意味で、その昔日本は風土が美しく平和な国であった事から「浦安の国」と呼ばれておりました。この事は日本書紀の中にも書かれてございます。そう考えますとこの舞は皇紀二六〇〇年を祝うにふさわしい平和を祈る心の舞であるとうかがう事が出来るのではないのでしょうか。本日ここにお集まりの自衛隊の皆様が感謝と平和の祈りをこめて舞う姿に、六三、一四一柱のご英霊、そしてそのご遺族の方々も大変喜ばれる事と存じます。私自身も皆様のお陰でこうして関わらせていただき、身の引き締まる思いと同時に感謝申し上げる次第でございます。つたない説明ではございますが、気が付きましたらその都度又お話をさせていただきますがら進めていきたいと思ひます。

それでは少し休憩をはさみまして、こちらの巫女さんに「浦安の舞」を一度舞っていただき、そのあと皆様のお稽古を始めたいと思ひますのでご準備下さい。

ありがとうございました。

言霊と科学

中木屋 豊

十年ぶりに車を買いました。最新のナビゲーションなのか、声で反応したり、安全装備も充実しています。しかしアナログ人間の私は、すべての機能を理解し使いこなすには、骨の折れることになりそうです。

車だけではありません。電話に印刷機械、パソコンテレビや録画の装置、ありとあらゆるものが、便利でたくさんさんの機能を付けられています。でも皆さんを含めて私も、もったいない使い方が出来ていないのではないのでしょうか。みなさんは、団塊の世代の走りで、今日めでたく合同厄払い「還暦」を迎えられました。高度成長を支え、企業戦士といわれていました。仕事人間で、家庭や子どもの教育は、妻任せで省みなければならぬ人も多いのではないのでしょうか。

さて「還暦」とは、暦が生まれた歳に返る事です。つまりおぎやと泣いた赤ちゃん、赤いちゃんちゃんこも其処に由来します。清い心で第二の人生のスタートを始めていただき

たいと思います。

そこで心の持ち方について、私なりにお話したいと思います。ダーウインをご存知でしょうか。そうです、進化論を唱えた生物学者です。自然淘汰と突然変異で、生物が次第に異種の物へ変化し、さらにもとの物と差異を増大し、異属異目などを生ずることをいいます。つまり生物の種は、神によつて個々に作られたのではなく、きわめて簡単な原始生物から進化したものだとの説です。キリスト教会は愕然としました。全てのものが、神によつて完璧に創られたという事が否定されたのですから。この話のときによく出されるのがキリンです。キリンの首が長いのは、高い木々の葉を食べるためです。六ないし七メートルの首に、血液を押し上げるために、強力な心臓を持っています。首の静脈には、逆流防止弁がいくつもあります。しかしキリンも水を飲まなくてはなりません。水を飲むとき首を下げると、脳溢血を起こしそうですが、動脈が脳に入る部分に、血圧を下げる「ワンダーネット」という器官があつて、水が飲めるのです。その器官は突然変異でできたのでしょうか。否そうではありません。実はキリンの先祖といわれる首の短い「オカピ」にも「ワンダーネット」が存在するのです。突然変異や自然淘汰だけで、説明つかないものがたくさんあるのです。

もう一つ物理学といえばアインシュタイン、アインシュタインといえば相対性理論とま
でいわれます。物理学の発展に尽くした功績は多大なものがあります。しかし、時間や空
間速度など、どれ一つも絶対というのではなく、相対的存在だとの理論は、全てのもの
を神が作った、これまでの完璧な存在を打ち消すのですから大変です。

第一次世界大戦のあと、一九一九年五月の皆既日食に際し、重力場による光の屈折が観
測されました。しかし、ヨハネの福音書第二章第一節には、「初めに言葉ありき——中略——こ
の言葉は、神と共にあった。全てのものはこれによって出来たものの内、一つとしてこれ
によらないものはなかった。この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった。光
は闇の中に輝いていて、そして闇はこれに勝たなかった」と書いてあります。今光は、闇
に支配されているのは、物理学の常識です。

この宇宙の始まりは、ビッグバンからだといわれます。以来光の速さで膨張が続いて
いるのだそうです。逆にこの膨張速度がゼロになると、収縮が始まり、加速され、もとの
一点につぶれ、それをビッグクランチ（巨大なる粉碎）といいます。

今最新の宇宙論は、ヒモ理論と呼ばれています。小数点以下、ゼロが三十五個付く捕ら
えどころもない小さなヒモが、振動してその形や角度の違いが、たくさん違った粒子を

生み出し、この宇宙を作り出したということです。現在この地球上に存在する命は、①DNAを遺伝情報の雄型雌型として使用する。②ほぼすべてのDNAにおいて同じ塩基の配列が、同じアミノ酸に対応している。③数多くあるアミノ酸のうち二十種類だけ用いる。たった一つのDNAからであるといわれます。六根清浄の大祓には、「我が身はすなわち六根清浄なり。六根清浄なるが故に五臓の神君安寧なり。五臓の神君安寧なるが故に天地の神と同根なり。天地の神と同根なるがゆえに、万物の霊と同体なり」と喝破し、言霊祝詞として伝えているのです。

昨年四月二十日、広島大学・東京大学・米ブルックヘブン国立研究所が、ビッグバンのシミュレーション実験を行いました。その結果は、さらさらの液体だったと伝えていきます。語り継ぐ言霊を表わした古事記・日本書紀には、国稚く浮きし脂の如くしてとか、液体だったと書いているのです。天の瓊鉾の先より滴り落ちる塩が、固まって島になったと伝えているのです。清く淨い心を持って臨めば、神が啓示を示されるのだと、はつきり記されているのです。

宇宙は光速の速さで拡がり続けています。つまり、成長・発展・進歩を続けているのです。もうこれでよいと、前向きな生き方を失った瞬間、宇宙の大法則に反する生き方とな

り、生きにくい人生となってしまう。車や機械の発達した科学技術の恩恵を受けるためにも、常に目標や目的を持った人生を送っていただきたいとお伝えして、今日の還暦の合同厄払いを終了いたします。

（鹿児島県 稻荷神社 宮司）

前の宮司が教えた一途の心

寺本正徳

はじめて稲荷神社の境内に立った朝、「ハイ、今日からこれで掃除して下さい」と一本の熊手が渡された。熊手を手によく見ると、白砂の上には山型の幾何学模様が浮き出している。その瞬間から熊手との格闘が始まる。考えても駄目、兎に角も落葉掻きから始めた。だが山型の幾何学模様が気に掛かる。頭はパニック状態になる。

前の宮司は説明一つしない。そのまま三日が過ぎた朝のこと。前触れもなく一台の軽トラが境内に入ってきた。なんでも社務所の屋根の修理にきたとか。仕事の方も小半日で終了。聴^{やが}て熊手を取り出した大工は、巧みな手捌きで轍と足跡を消して行く。動作は至極単純そうに見えるが、実に軽やかでリズムカルな繰返し。思わず熊手を杖に見とれていた。そこに顔を出した前の宮司。開口一番「ドヤ、単純動作の繰返しやろ。慣れたら誰でも出来る。一途の心が美しい山型を作る。大工のすることをよう見て早よ覚えて」と言つて立ち去る。大工の作業も一通り終了。美しく整然とした幾何学模様の熊手の跡が残る。

その山型をなん十回、否なん百回も準^{なぞ}った。ふとした弾みで山型が出来た。熊手の使い方が分った気もするが、連続的に頭と身体がついて行かない。工夫と挑戦を重ねること数十日もしたある日のこと、「父ちゃん、父ちゃん、この掃除のしかた美しいわ。この幾何学模様どうして付けはったんやろ」という会話を耳にした。たとえ自己流といえども、一途の心で熊手を使えば時には見て貰える日もあるということに勇気付けられた。まだまだ大工の腕前には程遠い出来だが、一途の心を忘れまいと誓った。むかし先輩がよく注意してくれた言葉、「お前、簡単そうに見えること程、実は奥が深く、難しいんやで」を思い出した。

それにしても前の宮司は、熊手の使い方を教えるでもなく、大工に見本を示させ、一途の心で使えば誰でも出来ると教えた意図、その裏には何があるのだ。乏しい知識の中で考えた。もしかすると、阿含経の中にあるお釈迦様と弟子との有名な説話を無言で教えたかったのか。有名な説話とはこうである。

お釈迦様には多数の弟子が居られます。中でも一番に物覚えの悪い弟子周利槃特^{しゆりはんどく}（チューダ・パンタカ）が「私はどうしてこんなに愚かなのでしょうか」と嘆くと、お釈迦様は「あなたは愚か者ではない」と優しく諭し乍ら一本の箒と、「塵を払い、垢を

除かん」という言葉を与えます。周利槃特は、この言葉を唱えながら何十年もの間、掃除を続けました。ある日周利槃特はお釈迦様に言います。「お師匠様、心に積もったゴミを掃除しないかぎり、いくら努力しても人の心は晴れない。心の塵を払ってはじめて人は本当の生き方ができるのだということに気付かさせて頂きました」と。

お釈迦様はこう言われます。「悟るということは、沢山覚えることではない。たとえ僅かでも徹底しさえすればそれでよい。凡事徹底。一途の心で励めばよい」お釈迦様は集まってきた多勢の弟子と群衆にむかつて「周利槃特は掃除をすることに徹して、ついに悟りを開いたではないか」と褒められました。（増一阿含経第十一他）

永平寺開祖の道元禪師様も同様に説かれている。これ等諸々の事を重ね合せ乍ら、前の宮司が残してくれた教えに尻を叩かれ精進努力する日々である。

また近頃、妙に思い出す歌に国民小学校黒川学級で唱和した歌がある。

鏡には 映らぬ人の 真心も

さやかに見ゆる 水拭きのあと

この歌は、掃除の前に必ず全員で唱和し、力を合わせ掃除した教室で、サヨウナラと挨拶した後の清々しかったこと。数十年経ったいまでもはつきり覚えている。

いま教育基本法が熱く議論される中で、教育の根本が置き去りにされ、表の論理だけが一人歩きする現実に、生きた教育とは、教えることだけではない。教わる心を身につけさせる。これが教育改革の基本だと思ふのだが。

幸福なことによき師に巡り合い、考えること、工夫すること、一途の心に努める事を教わった。感謝の毎日である。

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

日本の神様

三橋昌功

豊平神社の三橋と申します。宜しくお願いします。

今日は日本の神様についてお話をさせて頂きたいとおもいます。

まず初めに、日本の神様とはどのような存在なのか？遠い昔、我々の先祖達がどのように神を捉えていたのか、日本の神話から窺い知ることが出来ると思います。神話とは、けっして大昔の人々の単なる夢物語や虚構ではありません。神話は我々の祖先が、自分たちの住んでいる世界の重要な事柄、たとえば、宇宙の始まり、人類の生と死の由来、国家の発生、自然界・人間界の様々な事柄の由来や存在の意味について、あれこれ思索した記録であります。日本の神話を改めて振り返るとき、遠い昔我々の先祖達がこの世界をどのように考えていたのか？という思いに至ります。

この宇宙、この大自然に対してこの自分とは何者なのか？我々はどこから来てどこに向かっているのか？この宇宙、大自然はどのように出来たのか？このような根源的な疑

問を私たちの祖先は抱いていたのだと思います。そしてなんとかその回答を探り出し、不安な自分を納得させようとしたのだと思います。そうして、目に見える自然界をはるかに超えたものの存在を感じざるを得なかったのだと思います。この自然をはるかに超えた存在こそが神であり、それに対する先人の探求の表現が神話であると思います。

私自身も先人達と同じように疑問を頂き、その答えを探し求めました。「神とは何か?」「私は何者なのだろうか?」「私は何の為に生きているのか?」私がこのような疑問について考えるようになったのは、神職の仕事をするようになってからでありましたが、しかし、いくら一人で考えても一向にわかりません。どうしても答えが知りたい私は考えました。どうすればこの根源的な問いに対する答えが得られるのだろうか? 私は偉大な功績を残してきた先人達にその答えを求めました。ジャンルを問わず色々な本を読みました。私の問いに対する答えが載っている本がいくつかありました。「そうか、わかったぞ。人生とはこういうことか。神様とはこういう存在なんだ」と、その時はわかったつもりになっていました。しかし、わかったと思ったのもつかの間、また新しい考え方、人生に対する答えに出会います。私は迷いました。いったい何が本物だろうか、何を信じればよいのだろうか、このような状態がしばらく続き、悶々とした日々を送りました。私の場合は結局、自分が

何の為に生きているのか、自分の存在が何者なのか、答えは見つかりませんでした。根源的な問いに対して答えを求めるのではなく問い続けること、やはり自分自身の体験を通してひとつひとつ理解して行くしかないと思いました。その中で改めて我々の祖先の偉大さを認識することが大切だと思いました。

神道の起源はとても古く、日本の風土や日本人の生活習慣に基づき、自然に発生した神観念であると伝えられております。海にはワダツミの神、山にはオオヤマツミの神と、森羅万象ことごとく神の現れであると考えてきました。日本人は八百万の神々と共に生活をしてきた民族であります。その神話の一つを紹介いたします。「天の岩戸開き」、天照大神が天の岩戸にひきこもってしまったお話です。

太陽神である天照大神が岩戸に隠れると、世の中は真つ暗闇になってしまいました。天地が暗闇になり、様々な災害が発生しました。普通であれば、ここで恐怖が支配するものです。しかし、その時困った神々はなんと宴会を始めました。アメノウズメノミコトにいたっては、胸をあらわにしてセクシーに踊り出しました。その踊りのあまりのおかしさに、周りで見ていた神々はどっと大爆笑します。その笑い声を聞いた天照大神は「私が隠れて困っているかと思ったら、ウズメノミコトは踊ってるし、神々

は大笑いしている。これはどうしたことか？」と少し岩戸を開けて外の様子を伺いました。そこで、控えていたアメノタジカラオノカミが岩戸を開くのです。岩屋の中に隠れていた天照大神も、外のあまりのにぎやかさに、つい誘いだされてしまいます。そして再び世の中も明るく輝くようになりました。

日々の生活をして行く中で笑い声が絶えない環境というのは、とても楽しく心地の良いものです。争いばかりで笑顔がなくなれば、心は曇ってしまいます。これは、厳しい困難な状況にあってもそれを受け入れて、明るい心で生きていくことの大切さを、教えてくれているように思います。

このように日本人は、すばらしい伝統・文化を今日まで受け継いできた民族であると思います。改めて宇宙や人間の意味について問い直し、先人達がどのような考えを持って生きてきたか、皆様と共に考え、理解を深めていければと思います。

(北海道 豊平神社 権禰宜)

日々感謝

佐々木景子

本日はご参拝戴き、誠に有り難うございます。少しお時間を頂きまして、「日々の感謝」についてお話をさせて戴きたいと思ひます。

この感謝は、よく「ありがとう」という言葉で表現されます。皆さんよく使う言葉であります。人間関係円満の秘訣の言葉だと思ひます。

最近「個人尊重」や「プライバシー保護」と言われ、色々と難しい世の中になってしまいました。これから先の事を考えると、そうも言っていられないと多くの方が思っています。隣の国ではないでしょうか。「隣は何をする人ぞ」ではなく、より良い、住み良い国にするために、人との関わり合いは欠かせません。お互いがお互いを思いやり、尊重し、良い関わり合いのある世の中になっていきますことを強く願ひます。そのためには、何かの不都合を社会や他の人のせいにする事なく、「足るを知る」を満足の心で、一人一人が目に見えないものにも有り難うという心を持ち、日々感謝の心を大切にしていかなくては

けないと思います。

『感謝』という語について辞書を引いてみました。『ありがたいと思う心』とあり、続きまして『ありがたい』という語を引いてみました。めったに受けることのない恩恵、好意、配慮に接して、身の幸せをしみじみと感じる様子とありました。やはり「ありがたい」とは人を幸せな気持ちにするとても良い言葉です。

私たちは、ご先祖様から命を頂き、この世に生を受け、そこから家族・友人をはじめ様々な方々に、色々な形で知らず知らずの内に支えられ、愛情を受けながら生きています。ですが、このことに気付き改めて感謝することは、「ない」と言っても過言ではないのではないのでしょうか。日々の生活に追われている日常では、なかなか出来ない事だと思います。そして、最近ではそのことには気付くことも無く、自分だけで生きているような顔をしている人たちが増えているような気がします。一般に言われている「若者」に私もはいるわけですが、現物主義と言いますか、目に見えない神様、ご先祖様、周りの人の情に感謝し、周りを思いやるという、今までごくごく自然に行われてきた事が、薄れつつあるのが私たち世代の現状なのかもしれません。

もちろん、若い世代でも、とても思いやりもあり、信仰もある方もいらっしやいます。

お正月明けに回ります神棚参りの春祈祷でも、若いご夫婦や小さなお子様が「毎日お参りしています」とにこやかにおっしゃり、きちつと一緒にお参りをして下さいます。やはり、育った環境の影響も大きいようです。神様・仏様に朝「おはようございます」夕方には「今日も一日有り難うございました」とお参りを習慣とされている方も沢山いらっしゃいます。神様やご先祖様をはじめ、目に見えない様々なものに、いつもお見守り頂いていることに感謝する大切さを、次の世代にも伝えて行かなくてはいけないと思います。

少し前の話になりますが、テレビで「戴きます」という言葉が話題になっておりました。学校の給食において「戴きます」を言わせないでほしいという親御さんがいらっしゃるそうで、その理由は給食費を払っているので、言わせる必要がないという事でした。大変驚きましたが、更に「戴きます」と手を合わせることは宗教行為になるという親御さんもあるそうです。まさしく開いた口がふさがりませんでした。それと同時に、危機感も覚ええました。友人で母親になっている人も多くいるので、何人かに聞きましたところ、私の周りでは幸い「戴きます」の意味を知っている人ばかりで少し安心しました。ですが、そのような考えの方がいらっしゃることが変わるわけではなく、とても嘆かわしい事ですし、この先の不安も感じます。

私たちは食物から生を受けています。その生に感謝するということは当たり前のことであり、生きていく力を戴く食物に、「戴きます」「ごちそうさま」という感謝の心を表わす言葉を大切にしていききたいものです。

神道では、食前感謝、食後感謝をします。一拝一拍手のあとに、食前には「たなつもの百の本草もあまてらす 日の大神のめぐみえてこそ」と皆で奉唱し、「戴きます」と言つて食事をします。食後には「朝よいに物くうごとに豊受の神のめぐみを思え世の人」と皆で奉唱し、「ご馳走様」と言います。とは申しましたが、実は普段はしていません。神主が集まる研修の時にします。ですが、この心が大切なのだと思います。和歌までは奉唱しませんが、一拝一拍手はしています。昔はほとんどの方がしていたと思いますが、今はなくなりました。

食物の命も目に見える物ではありませんが、『想い』や『恩』というものも目に見えるものではありません。あるおじいさんが「毎朝、必ずお天道様にありがとうと言うんだ。お天道様は裏切らないから」とおっしゃっていました。ご承知の通り伊勢神宮の神様はお日様を表した神様でございます。万物の源であります太陽に感謝申し上げるということは、やはり根本のことで、自然に抱く想いなのだと改めて思いました。

「ありがとう」から始まり、そこから自然と信仰心が生まれ、それが神道であり、だからこそ神道は自然なんだと、先代宮司であります祖父が申しておりました。

お日様の恵みも、目に見えるものではありません。そのような目に見えないものでも、もちろん目に見えるものでも、そのものへの自然な思いやり、感謝の心が有れば、世の中も変って行くのではないでしょうか。

最後になりましたが、大神様のご加護の下、ご健勝にお暮らしになられますことを心よりご祈念申し上げます。

(北海道 東川神社 権禰宜)

日本のお寺さん

村田佳子

街を歩いている時など、お坊さんの姿をよく見かけます。僧衣を身に着けておられるので一目でお坊さんだと判るわけです。

「どこかのお宅で法要があった帰りかな。お葬式があったのかな。」などと思われる方が多いのではないのでしょうか。

現に、お葬式があった時など、皆さんの多くは、お寺さんとは切っても切れない関係がお有りでしょう。お寺さんといえば仏教ということになります。仏教はインドで仏陀（お釈迦様）によって説かれた宗教ですね。だけど不思議、お釈迦様自身はお葬式もされなかったそうです。どうやら、お葬式と先祖供養を専門職のように行う日本のお寺さんは、とても特殊なものようです。

皆さんの家庭にある仏壇にはご本尊の他に、ご先祖の名前を書いた位牌がありますね。実はお釈迦様には位牌も無かったのだそうです。これは、仏教が中国を経由して日本に入

つて来たからで、位牌は中国の先祖崇拜が仏教に取り込まれて出来たものとされています。最近では、本来の仏教の教えに従って、位牌を無くそうという考え方もあるようです。それをお宮さんとしては、「待った」と言いたいのです。

思い起こしてほしいのです。小さい頃通信簿をもらった時、仏壇に通信簿をあげて見てもらいなさいとは言われなかったでしょうか。いったい誰に通信簿を見てもらいたかったのでしょうか。位牌の奥にいらっしゃる仏様だとはどうしても思えないのです。

ご先祖様にみていただきたい。これが、本当の心ではないでしょうか。

仏教では亡くなった人に成仏してもらう為に先祖供養を行います。この世に未練を残して亡くなった人に「うらめしやー」と出てこられては困るのです。往生したら、仏に近づくことが仏教においては大切なのです。

そうです、この世に未練を持ってもらっては困るのです。とても不思議です。残った私達はご先祖様、ご先祖様、こちらへ来てどうぞ見て下さいと言っている。片やお坊さんは、法要にやって来る度にそれ成仏、成仏とお経をあげます。しかもあれは日本語ではないのですよ。

これについて柳田國男は、著書『先祖の話』の中で、「日本人の志としては、たとへ肉体

は朽ちて跡なくなってしまうはうとも、なほ此国土との縁は断たず、毎年日を定めて子孫の家と行き通い、幼い者の段々に世に出て働く様子を見たいと思つて居たらうのに、最後は成仏であり、出て来るのは心得ちがひでもあるかの如く、頻りに遠い処へ送り付けようとする態度を僧たちが示したのは、余りにも一つの民族の感情に反した話」としています。そこで考えてみたいのが、仏教行事だとされているお盆です。日本人はお盆になると、お墓参りをします。そして迎え火を焚いてご先祖様をお迎えして、お盆の間、家で一緒に過ごし、お盆が終わったら送り火を焚いて精霊送りをします。おかしいですね。成仏の邪魔をしています。お盆の風習は日本の仏教にしかありません。

ご先祖様をお迎えして、終わったらまたもとの所へ送るといふのは、お宮さんで行うお祭りに共通するものがあります。神道では、祭りの場が祓い清められた後、降神の儀と言つて、神様を招きます。そして、おもてなしをして、祭りが終わったら、昇神の儀と言つて神様にもとのところにお帰りいただくのです。どのような祭りであっても、神様を迎え、そして儀式が終わったら送るといふのが組になっています。そこから考えると、家庭でのお盆の行事というのは、極めて神道的なものの考え方から来ていると言えます。神道的と言つてしまうと、難しいかもしれませんが、日本人が、仏教が日本に入ってくるより

前から持っていた、ご先祖を大切にする心や、自分より優れた偉大なものや自然を神として敬ったというあり方そのものが神道だと理解されればよいと思います。

日本人にとって、お寺さんもお宮さんもとても身近で、両方とも無くてはならない存在でした。仏教は日本に入ってから来た時から、ご先祖祀りの一端を担ってきました。そしてその先祖を身近に感じ、大切に祀るという精神は、日本人が本来持っていた心です。仏教は日本に入ってから来て、神道的な日本民族の心を受け入れました。

神道によって仏教は日本仏教に変化したのです。

将来、仏教は日本に入ってから来る以前の考え方に戻ろうとするかもしれませんが、しかし、日本の仏教から先祖崇拜や、それにつながる位牌を無くした時、私たち日本人はそれを受け入れることが出来るのでしょうか。

おそらく無理でしょう。

わが国は神のすゑなり神まつる

昔のてぶり忘るなよめ

(広島県 長束神社 権禰宜)

おいしいワインは、ストレスの強いぶどうから

木下久榮

グラスの中で透きとおるような美しい白ワイン、鮮やかですてきな色の赤ワイン、このようなワインを口に含めば、芳醇な香りに包まれ、なんとなくおしゃれで華やいだ気分になります。このワインは、一体どんなぶどうからできるのでしょうか。

きつと栄養分をたっぷりとり、まるまると実ったえりすぐりの大粒のぶどうから生まれるにちがいないと思っておりましたところ、そうではないということでした。

ある新聞のフランス特派員の方が、ボルドー大学醸造学教室で聞いた話をのせた記事を読む機会がありました。それによりますと、南フランスのボルドー地方は、ワインづくりが有名で、いいワインができるどころとしても知られているそうです。

その地方でのワイン用のものは、粗野でただけしい野生のぶどうのようなものいいとされているそうです。過保護に育ち栄養分をたっぷりとしたぶどうは、そのエキスを発酵させてもキリツとしたワインにならないのです。ワインにするぶどうは北限ぎ

りぎりのこれ以上は無理というような、きびしい自然条件や過酷な環境のところ育てて、逆境の中で自ら一生懸命に生きようとする力を引き出さなければならぬそうです。

ワインになるぶどうを育てる適地とは、砂利混じりで水はけのいいところだそうです。ボルドー地方の山の斜面は石がごろごろして気温が低く、ワイン用のぶどう作りに適していて、そこで育ったぶどうは、形が不ぞろいでひと房に数えるほどもしか実がついていないというのです。

「ワインのためのぶどうは、ストレスが必要。ぎりぎりの状態の中で育ったものが上等のワインになる」というのが、ボルドー大学の醸造学教室の長い体験と研究に基づく見解だそうです。なぜ、そのようなぶどうが上質のワインの材料になるかと申しますと、きびしい自然条件の中でぶどうの木は生きていくために、一生懸命に自分で栄養分をとろうとして、地中深くまっすぐに根を下ろして、その中からいろんなミネラルを吸収し、そのミネラルが自然に実にたまるので、中身が上質のぶどうに生まれ変わるというわけです。

ワインを作る技術は進歩し、また、ぶどうの品種改良も進められておりますが、きびしい自然条件や環境の中で必死に生きようとする意欲、努力、たくましさとそのやる気がすばらしいエキスとして上等のワインの材料を生みだす大もととなり、やる気をもったぶど

うこそが、ワインの価値を決めるといいうのです。

一生懸命に生きようとする植物の知恵と営みに心をうたれ、なんとも不思議な自然と植物とのかかわりあいに深い感銘を受けました。

一方、私達の生活に目を向けますと、ストレスなど感じないとおっしゃる幸せな方もいらっしゃるかも知れませんが、現実は大半の方が大なり小なりのストレスを感じて意欲を失ったり、ストレスから脱却できないで悩み苦しみつづけている人も少なくないストレス社会です。

では、ストレスとは一体いかなるものと申しますと、精神的、感情的な緊張や刺激、その刺激に対する防衛反応、精神的抑圧感など人間関係の中で生じる心の摩擦なのです。

ストレスは、性格によって感じ方に違いがあり、また環境も大きな要因の一つだと思います。

私達は、ストレスを悪者とはばかり考えていても何の解決にもなりません。

たくましい心でストレスに立ち向かい、うまくストレスを発散し、上手にストレスとつきあい、逆転の発想でストレスを効果的に活用する器用さや知恵を発揮し、プラスに変えていく努力をすることが必要ではないでしょうか。

ちやうど、荒地に育ったぶどうが、地中に深く根を下ろすという知恵を出して必死に生きようとやる気を起した結果、いろんなミネラルをいっぱい吸収して、芳醇な香りを漂わせ、キリッとした味のおいしいワインに生まれ変わるように、人もまた苦しみに耐え、ストレスをはねのけ、ばねにして自分なりの生き方を探す意欲を見せ、いろいろな方策を考え努力していくならば、活力ある人間に生まれ変わり、心豊かな魅力ある人物に成長するのではないのでしょうか。

やる気をもって努力するならば、神様のお助けとお導きがあり、きつといい方策があるということ、このワインの話から知ることができますし、また「やる気を見せたワインこそが、ワインの価値を決める」というすばらしい結果につながることも教えられました。

「梅花寒苦を経て清香を放つ」という言葉もあり、冬の厳しさに耐えて咲くからこそ梅の花は凜として美しく、清らかな香りを漂わせるという意味ですが、このようなことはいずれも逆境の中で、たくましく生きていこうという意欲をもって、一生懸命に逆境を乗り越えたことへの神様からの御褒美であり、お恵みであるということを感じたいです。

同時に、すばらしい神の摂理であり、お取りはからいであって、あらためて自然の神秘御神慮の深さに頭が下がる思いがいたしますと共に、小さなぶどうの生き方に教えられ、

ワイングラスの中で、苦勞のかけらも感じさせないすてきなワインに、いとおしさを感じるようにしました。

しかし今、私がお話しましたことは一般的なことです。ひどいストレスに悩み苦しんでいらっしゃる方は、ぜひ医学的な治療や専門家の方の指導を受けて、いばらの道からぬけだされますよう願っております。

ただ、人は大なり小なりストレスを感じながら生活していると思いますので、そんな時、ワインの話を思い出していただいたらありがたいことだと思います。

(熊本県 大江八幡宮 禰宜)

人は神の子

川崎太久美

昔、村里に鬼が現れては、小さな子どもをさらって行って喰っていたといひます。子どもを持った親は、鬼がいつ自分の子どもを狙って襲ってくるかも知れないという不安と恐怖に怯えながら毎日を暮らしておりました。とくに子どもの帰りが遅いときなどは、もしかしたら鬼の餌食になったのではなからうかと心配で心配でたまりません。居ても立ってもおられず、食事も喉を通りません。そのような恐ろしさの中で、不安と心配にさいなまれ、身震いしながら夜となく昼となく暮らしておりました。そういう暮らしに身も心もずたずたに疲れ果てた村人たちは、どうにかして鬼から子どもたちを守る方法はないかと全員で相談しました。その結果ようやく思いついたのは、「いっそのこと、思い切って鬼の子をさらって来て、どこかに隠そうではないか」ということに話がまとまったのです。そこで村人は数人で、鬼の親のいない留守を狙って、鬼の子をさらって来て判らないように隠してしまったのです。するとどうでしょう。自分の子が急にいなくなつたことを知つた鬼

の母親は、まるで氣狂同然、血まなこになって探し回りました。しかしどこを探しても見つかりません。ついに食うものも喉を通らず、痩せこけ、やつれ果てて、しまいには病氣になって寝込んでしまいました。

この時がくるのをじっと待つていた村人たちは、この時ばかりと鬼に向つて言つたのです。「お前は平気で人の子をさらつては喰つていた。ところがどうだ。自分の子がいなくなると氣狂同然になって探しまわり、ついには生きる氣力さえ失い、病の床に臥して死人同然になつたではないか。お前のせいで、子を持つ親は今までお前以上の苦しみを味わつて來たのだ。子を持つ親の氣持が解つたか」と。すると鬼は、己の犯した罪の深さに氣付き、涙を流しながら、手をついて平謝りに謝りました。そして二度と人の子に手をかけるようなことはいたしませんと約束をして、これから先は罪滅ぼしに常に徹頭徹尾人の子を護り通しますという堅い誓いをしたのです。それを聞いた村人たちは鬼の子を返してやりました。鬼は感激の涙にむせび、それ以来今日まで、ずっと子どもたちの守護神として子育てをしております。これが鬼子母神なのです。

ところで、最近のテレビや新聞のニュースを見ますと、何の抵抗もできない、何の罪もない小さな子どもを連れ去つて、己の感情や欲望の赴くままに、その子どもの生命を奪つ

てしまう。それもまったく突然に、猟奇的に子どもに襲いかかってくる。小さな子どもを持つ親は、いつ自分の子どもが犠牲になるかも知れないという恐怖と不安と心配のために気が気ではない毎日なのです。

日本全国どの道や通りに行っても、「子ども一〇番の家」と書かれたステッカーが貼ってあり、同じ文言の旗が立っております。また、「この地区の子どもたちには防犯ベルを持たせています」と書いた掲示板が方々で目につきます。最近では小学校の登下校時に親やボランティアの人たちが付き添ったり、校区内の巡視をしております。そうしなければ子どもたちは安心して学校にも行けない状態なのです。これはまさに邪悪な鬼の心を持った人間が増えた証拠なのです。何と悲しい日本の現在の姿ではありませんか。人間の心を失った鬼のなんと多いことでしょう。

人は皆、神様の思召しによつてこの世に生を受けたのです。子どもが欲しくても子宝に恵まれない人も沢山います。そういう点では、人は皆神の子といってもいいでしょう。それなのにどうして邪悪な鬼の心になり下がってしまったのでしょうか。それは「人が踏み行ふべき道」を歩いていないからなのです。踏み行ふべき道を歩くとは、人が生涯のうちの節目ごとに神社に参拝して感謝と祈りの誠を捧げる「人生儀礼」のことを言うのです。

神の思召しによって生まれてきた者が神様に応える道が人生儀礼の道を歩くことなのです。子どもが生まれますと神社に初宮参りをして、無事に生まれたことへの感謝と心身ともに健やかな今後の成長を祈願いたします。子どもの成長につれて、七五三詣り、入学式、卒業式、成人式、結婚などの祝事にはお参りをして、神様にご報告をするとともに感謝の誠を捧げて、今後の無事と安泰を祈ります。厄除けや厄晴れ・還暦・古稀・喜寿・米寿なども同じように神社への感謝と安泰・平穩無事を祈願するのです。

このように、当然人が踏み行わなければならない人生儀礼の道を歩いておりますと、人は自然に徳を身につけることができます。その徳とは、その人の人格なり、気品なり、人間性の高まりが自然に身につくことをいうのです。これが道を踏むことによって得た徳、つまり道徳なのです。道徳心とは、人生儀礼の道を歩くことによって自然と身についた立派な心のことなのです。人生儀礼としての人の道を歩かなかった者には道徳心は身につけません。この道徳心の欠落した者が、神になる前の鬼子母神と同じように小さな子どもに手をかけ、平気で子どもの生命を奪うのです。どうか皆様、人生儀礼がなぜ必要かということをおわかりいただきたいと存じます。

人は神の思召しによってこの世に生を受けたのです。神様はどんな鬼でも救って下さつ

て、鬼子母神のように神の世界へ導いて下さいます。もし皆様方の周りに暗い世界に住んでいる人がおられれば、神社にお参りされて心を祓い清め、明るく清々しい気持をとり戻して欲しいと存じます。

(佐賀県 福富神社 宮司)

思いは叶う

渡邊知宣

一、戦後の復興

プロジェクトXという番組がありました。NHKのテレビで毎週火曜日に夜九時十五分から四十五分間、六年間近く放映されていきましたので皆様方もご覧になった方が多かろうと思います。

今回、この番組を制作されたチーフプロデューサーの今井 彰という方の講演を拝聴する機会があり、また再び感動の涙が流れました。

日本の戦後はゼロからの出発です。敗戦により全てのものが根絶やしになる程の壊滅的な打撃を受けたのはわずか六十年前の事です。

日本のそれからの戦後復興は様々の分野において様々の人々がプロジェクトのリーダーとなって、人一倍の血と汗と涙を流しながら、懸命に困難に立ち向かって頑張ってこられたお陰であることを改めて強く感じさせられました。

今日は、この「プロジェクトX・挑戦者たち」

という番組をみて、また今井氏の講演をお聞きして感動したことの幾つかをお話してみたいと存じます。

二、挑戦者たちの物語 ①

ビクターという会社の赤字部門のビデオ事業部長に就任を命じられたのは高野鎮雄氏四十七歳。

この人が生み出したホームビデオの世界規格が、現在のVHSというビデオテープの録音再生方式です。本社にも内緒で三人の技術者と高野さんで開発を進め始められたこのプロジェクトは苦難の連続で、四年間の苦闘の末ソニーのベータ方式を抑えVHS方式の成功を達成されました。この間、本社からも度々の叱責を受け窮地に立たされたり、返品された製品を自ら売り歩く事も有ったそうです。短期利益を重視する会社の壁と戦い続け、部下二七〇人を誰一人リストラせず守り抜き、最盛期にはビデオ事業部を日本ビクターの総売上の七割を占める一大拠点に育て上げられました。また完成されたVHSの技術は、国内外のメーカーに惜しげも無く公開されました。この人の退職のときの言葉です。

「VHSの開発の時は夢中でしたね。皆さんも何でもいいから夢中になって下さい。夢中っていうのは大変素晴らしい事です。なぜあの時、そんなに夢中になったかっていうとね。ここに集まっておられるような大変素晴らしい仲間をねえ、神様がねえ、私の周りに、こんなに素晴らしい人達をね、神様が、よりによって私の周りに置いて下さったからです。」いい言葉だと思います。

そして、退職二年後亡くられますが、お寺に向かう途中最後の別れを告げるために横浜工場へ立ち寄られた棺を乗せた車を、全社員が直立不動で涙ながらに見送られた光景は何度見ても感動でいっぱいになります。

三、挑戦者たちの物語 ②

本州と四国を結ぶ瀬戸の大橋の建設を成し遂げられた杉田秀夫氏、当時四十一歳という方がおられます。

本州と四国に総工費一兆一千三百億円、工期十年の難工事の現場責任者です。一切の飾り気が無く、海中の地形調査には自ら海流渦巻く暗黒の海へ飛び込み、五百回を越える地元住民との交渉には誠実で、漁民に怒号を浴びせられたり、胸ぐらをつかまれても相手の

話に耳を傾け続けられる姿に、すぐに部下たちにも漁民たちからも心からの信頼を寄せられたそうです。

運転手つきの所長専用車には乗らず、自転車で通勤。仕事には厳しいが、限りなくやさしい眼差しを持ったこのリーダーは、「男が惚れる男」と言われました。しかし、十三歳年下の妻が末期のガンに冒され、幼い三人の娘を抱え壮絶な戦いを続けられます。妻の病名は最後まで会社にも家族にも伏せ、毎晩仕事を終えると妻の病室で泊り込みの世話をし、床のマットに休み、朝は妻の洗濯物を持ち帰り、子供たちに食事をさせ、新しい着替えを病院に届けてから自転車で出勤されるその姿に涙しました。世紀の大工事と末期の病床の妻、そして幼い子供たち、これらの難問を抱えて一切の弱みを見せず果敢に、しかも誠実に戦い続けられた姿には心から感動しました。通常三年で交代する現場所長に十年間とどまり、数々の障害を乗り越え夢の架橋を見事に完成させられました。平成五年、最愛の娘たちに囲まれ六十二歳でなくなりました。

「あのような男には二度と巡り会えない」これは付き合いのあった殆どの人々の言葉です。

四、自分自身のこと

私は大学卒業後十三年間勤務していた大阪の松下電器を退職して神職になりました。二十六年前の事です。

やはり同じように会社の技術者としてプロジェクトの一員として研究開発に携わった経験があります。特許も取りましたし、海外工場の技術指導にも出かけた事がありましたので、特にこの「プロジェクトX・挑戦者たち」の物語は興味深いものがありました。

血を吐いて倒れた父である先代宮司の跡をついで神明奉仕を開始したものの収入は少なく、当初は塾でも開いて先生でもしようかとまで覚悟していたものの、思いは叶うものです。夜中までコツコツと努力したお陰で生活も安定してきましたし、境内地も「きれいになりましたね」と言ってもらえるまでになりました。大鳥居の建設、御社殿の修復、社務所の建て替え、台風大被害の復興など多くの方々の御協力をいただきながら進める事が出来ました。

プロジェクトXを見ての感動は、自分自身のこれからの更なる努力に対する励みにもなりました。今回は二つの物語の紹介だけしか出来ませんが、こういう物語が二百回近く放映されました。

中島みゆきさんの「地上の星」「ヘッドライト・テールライト」のテーマソングは大流行となりました。若い人々がたくさん見られたという事もうれしい限りです。

五、思いは叶う

この番組は、今井さんを含めて七名のスタッフで開始されたそうです。少人数しか与えられず、一本の番組を作り上げるための仕事量は膨大で朝帰りどころか帰れない日が続き、今井さん自身も十五キロほど痩せてしまい、プロジェクトXではなくダイエットXのチームだとまで言われたそうです。

企画決定後、全員で明治神宮に五万円の玉串料を包んで成功祈願のお参りしましたとの言葉に、何とも言えない爽やかな気持ちを持ちました。

「挑戦者たち」を製作された方々は、自らも挑戦者でありました。そして思いが叶えられた背景には神様の御加護がありました。

ご清聴ありがとうございました。

スタート&エンド

村田和之

昨年引き続き今年も二月十二日より一週間ハワイ州ホノルル市の真珠湾を訪ねた。昨年の観光コースでは実現できなかった真珠湾の中央に、昭和十六年十二月七日、日米開戦の火ぶたを切った日本の爆撃機によるアメリカの最主力戦艦「アリゾナ号」が今も海面に頭を出すマストと共に今だ一、二〇二名の遺体を艦中に残し永遠の墓場としてアリゾナ記念館を設立、今だ重油が艦中より流れ出る光景を見て「戦士の涙が今に出ている」と説明する姿、遺体の上に立ち「真珠湾を忘れるな、アメリカよ油断するな」と日本や他国に対する姿勢、死者に対するメモリアル的な考え方、日本人の死者に対する死生観、祖霊として祀る思想の違いを目の当りに見学することができた。三度目のチャレンジ実現を得て、民族の違いをまざまざと見せつけられました。

昨年は終戦六十年ということで色々な行事が設けられ当時を再現させ戦艦大和の実物大の模型、撮影ロケ地を尾道市向島に設置、建造した呉市に大和ミュージアムを開設多くの

見学者を得た。

私は一連の施設を見学、次で一路鹿兒島の知覧迄足を伸ばし隠された先人達の思いを心に刻んだ。老人手帳を持つ立場となり、大東亜戦争のスタートと終戦を幼なき頃であつても体験し広島原爆も受けた貴重な体験の中に、国を思い、父母や子供を思い永遠の平和を願つて笑つて飛びたつて行つた特攻隊の勇士たち。世界最大の戦艦大和の建造にまつわる秘話。三、三三〇人の乗船員に二七〇名の当時の生存者。大和の中での生活に、風呂に関する問い合せが多いとか。聞けば週二〜三度の入浴、しかしその内容は、タオルに石鹸箱を包み頭に巻き付け当番から十円玉位の銅板三枚受け取り一枚で洗面器一杯の湯、洗いと仕上り全てを済ますので湯舟にゆっくり体を温めるなど夢の中の夢、スコール（夕立ち）があれば「用意」の号令に上甲板に出てスコールをあび、洗濯物も済ませる生活。ミッドウェー出撃前には遺書や身の廻りの整理、故郷を恋し上甲板で日本の方角に手を合せたとの手記や記録映画に胸を痛めた。

それにしても人間の死生観の違い祖霊と崇め神と高まるみたまとして敬う日本人に対し死者の墓はメモリアルで記念碑にすぎず、教会の地下に置く遺骨の上を歩き遺徳を偲ぶ姿とはあまりにも違いがある。広島に住む私にとっても原爆慰霊碑の中に過去帳を納めてい

るがその上に上るどころか手を合す日本人、霊に対する祖先崇拜、真珠湾にくらべ大きな違いを目の当りに見た。

又、今年も終戦記念日が近づいてきた。第四十振武隊少尉、岡山県の中上敬一氏は十九歳にして「咲くもよし散りてなほよしわかざくら」と遺書を残し特攻機に乗り笑って特撃した。又、特攻隊の教官を務めた、第四五振武隊少佐、二十九歳の藤井一（茨城県）の悲話は涙なくしては読めない宛名の無い遺言である。教え子達が続々と出撃する中、自分も志願すれど叶わず三度目に自分の血書を持って嘆願、許可を得て妻に連絡、妻はだまって主人が悲願を達成でき後の事が気にかからないようにと幼き二人の女の子と共に十九年の十二月荒川に入水命を絶たれた。

一足先に旅立った三人に対し残した遺言

冷え十二月の風の吹き荒ぶ日

荒川の河原の露と消し命。母と共に殉国の血に燃ゆる父の意思に添って一足先に父と殉じた哀れにも悲しい、然も笑っている如く喜んで母と共に消え去った幼い命がいとおいしい。父も近く御前達の後を追って行けることだろう。厭がらずに今度は父の膝に懷でだっこして寝んねしようね。それまで泣かずに待っていて下さい。千恵子ちゃんが泣いた

らよく御守りなさい。では暫く左様なら。

父ちゃんは戦地で立派な手柄をたて御土産にして参ります。では、一子ちゃんも、千恵子ちゃんもそれまで待つて頂戴。

藤井少佐は明る二十年五月二十八日特攻を許可され戦死をとげられた。真珠湾は海軍基地、広島原爆投下は無差別な大衆が目標、虫ケラの如く投下した原爆。皆さん方はどのように感じられるでしょうか。

こうした尊い若い人達の国を思い親や子を思い出撃した犠牲の上に今日の日本の平和があることを私達は一時たりとも忘れてはならない。

毎年夏が近づくと原爆、沖縄、知覧と六十年前を思い起し、今年から心新たに、真珠湾の思い出と日本の立て直しを心に誓うものであります。

(広島県 長束神社 宮司)

戌歳にちなんで

佐古一洌

今年は^{いぬ}戌歳です。皆さんの中に戌歳の方はおられますか？ あつおいですね。ものの、本にイヌ歳の「一代運勢」がありました。

正直で義理堅く、謙虚にして寛容。目上の人に従えば、中年になって抜群の出世をする。

なか／＼良い運勢です。しかし安心してはなりません。その本の片隅に小さく、「但し例外もある」と書かれていました。

さて犬は、家畜の中で一番古く、五万年も前から人と共生しております。走力に優れ、嗅覚はなんと人間の数千倍。そして何よりも主人（飼主）に従順の上、敵に対しては果敢に吠えたり、攻撃をしかけたりします。

吾家には、小さな雌犬が一匹おり、飼主は古女房です。私はたゞの宿六です。犬の名前は、楽器の名をとってチューバと言います。その名前がいけません。妻の老婆、娘のお転

婆に間違われます。そこで戌歳にあたり改名をと思い、トリノ・女子フィギア優勝者荒川静香さんの「シズカ」を貰おうとしましたが駄目、決して静かではありません。いつもワシ／＼吠えたて、ばかり。

とまれ、忠実従順・勇猛果敢な犬にまつわる、名犬・忠犬物語は事欠かない程多くあります。そのうち、忠犬ハチ公の逸話はあまりにも有名ですが、本日はハチ公と同じように主人に尽した、「タチ」の話をご紹介しましょう。



東京の麹町に住んでいた畠山さんは、愛犬タチに毎日近所のタバコ屋へ、お使いに行かせていました。

タチのほうも、日課として喜んでお使いに行き、主人にタバコをくわえて帰ってきておりました。このお使いの出来る名犬は、近隣に知れわたり、飼い主の畠山さんも鼻が高かったのであります。

昭和六年、畠山さんは仕事の都合で、静岡へ移り住まなければならなくなり、家族、そして愛犬のタチと共に、静岡市へ居を移されます。

移り住んでみると、転居先のそばにもタバコ屋があつたので、畠山さんは早速タチを連

れてタバコ屋に赴き、「明日からこの犬をお使いに行かせるので、チェリーをくわえさせて下さい。タバコ代は月末に精算するから」と話をつけました。

翌日、麹町にいた時のようにタバコを貰いに行かせようと、タチを玄関まで連れていった畠山さんは、これまで同様「タチ、タバコ！」と言いつけます。

ところが、タチは主人の顔を見つめたまゝ、その場から一歩も動こうとしません。

さらに語気を強めて命令しても、いつものように外へ向かって元気よく駆け出してこのとはしません。タチに腹を立てた畠山さんは、タチを往来へ追い出しました。タチは一度主人のほうを振り返って、悲しげな顔をしていましたが、主人が取り合わないと知ると、とぼくと歩き出しました。

しかし、五分が過ぎ、十分が過ぎても、タチは帰ってきません。

「さすがに引越してきて初日からお使いに行かせるには、無理があつたかな」。

心配になった畠山さんは、タバコ屋まで迎えに行きました。タバコ屋にタチが来たかどうかを尋ねると、「見てない」との返答。それ以来、タチは姿を見せなくなってしまいました。

姿を消して8日を過ぎた昼下がり、玄関にやつれて変わり果てたタチがフラク／＼になつ

て戻ってきました。その口には濡れてぼろ／＼になった汚いチェリーの空き箱をくわえているではありませんか。

「タチ、悪いことをしたな。怒って出て行ってしまったと思ったよ。とにかくよく戻ってきてくれた」。タチを抱きかゝえた畠山さんは、愛犬のやつれた姿に改めて感謝と反省の気持ち湧いてきました。しかし、衰弱していたタチは、その3日後に息をひきとってしまったのでした。

それから数年後、東京へ出向いた時のことです。立ち寄りついでに旧宅へ訪れ、近所の人と昔話に花を咲かせ、たま／＼話題がタチのことになりました。

「引越してからむこうのタバコ屋へ買い物に行かせたが、うまくいかなかったんだ。無理に行かせようとしたら、怒って出て行ってしまったよ。それでもどこをふらついていたのか、帰ってくる時にはチェリーの空箱をくわえていたんだから、たいしたもんだよ」。それを聞いたタバコ屋の店主^{あるじ}が、いぶかしげにこう言うではありませんか。

「あなたが引越していつてから3、4日して、お宅のタチがうちに来ましたよ。後片付けにでもしに戻ってきたのかと思って、いつものようにチェリーをくわえさせてやったんですがね・・・」。

そうです！　タチは静岡・東京間を8日もかけて、主人のためにチェリーの買い物をしていたのでした。

畠山さんはその瞬間、外に出されたタチの一度だけ振り返った悲しげな顔が、はつきりと蘇ってきたのであります。



終りに、戌歳三つの教訓を、犬づくしでご披露しましょう。

一、煙草は吸わんほうがよい。

二、酒の飲み過ぎは、身体に毒ドツグです。

三、人がたとえ見ていぬとも、怠けたらいけん。

人生は一回きりのオンリーワン。わんだフルな充実した生活をお送り下さい。

— 参考文献・吉澤英生著「戌歳生まれは、お金に困らない人」 —

(京都府　松尾大社　宮司)

おじいちゃんの子育て論

芦原高穂

最初にお断りしておきますが、私はおじいちゃんではありません。

本日は長寿感謝の年祝いのお祭りにご参列いただきまして誠に苦勞様です。

長寿社会といわれる時代ですが、ただ単に生きていればいいとの話ではありません。如何に生きるかが問われるのであります。

その一番の問われているのが、年配者の見識と言うことであります。私どもの町に屯田兵で豪商でならした屯田兵村上英太郎がおります。

彼はその後米などの穀物を扱う商いで留萌から天塩一円の漁場で米などを販売し、また、それらの地域でとれる海産物を内陸部に運び商いをするということで、当然大金持ちになったわけです。その資金で小樽の米市場でも有名な相場師として勇名をはせるほどで、村上が動くとも米相場が動くと言われたくらいでありました。

そうした活躍に関心を抱いた少年がおりました、名前は加賀美長吉という人で、私も晩

年の加賀美少年、私が知るのは八十歳を越えたおじいさんでしたが、この加賀美少年があるとき村上商店の店主が小樽の米相場で大儲けしているそうだという話を聞きつけまして、小遣いを一生懸命ためて、汽車に乗り実際にどんなことをするのかみたいと思って小樽まで出かけたそうです。

そして、うまいことにその米相場で実際に相場を張っている村上英太郎の姿を見ることに成功したのでありますが、村上英太郎もたまたま加賀美少年の顔を覚えておりまして、大人に混じって市場を覗いている少年を見つけて大きな声で「貴様、こんなところで何している、ここは子供の来るところでない」と一喝され、這々の体で帰ったそうですが、理屈抜きでしかるあの時代の年配者の良識というものを感じる次第で、見識を感じるわけがあります。

少子化という言葉が頻繁に叫ばれるようになりようやく世の中も事の重大性に気付き始めている様ですが、あらゆる命も常に世代の交代を求められているわけです、それは常に生物学上の成長を求めているのであり、特に動物では生きるうえでの訓練は必須条件であります。

そうした努力を間断なく続けることが生存の前提となってきましたが、それを怠ってきた

のが我が国の少なくとも戦後六十年のあゆみといつて過言ではありません。

目の前の繁栄に目を奪われ、家庭を含め教育上の厳しさや忍耐といった要素を排除し、個性を伸ばすというもつともらしい謳い文句やまやかしに社会の規範を軽視し、それは野望欲望のなすがままに等しい放任を呼び、結果は皆さんの憂いておられるとおりの現状でございます。

人は教育という行為によってのみ人間になることが出来るといわれております。その教育の危機が叫ばれて久しいのでありますが、今日は特に家庭教育のあり方について思うところを述べさせていただきます。

人には必ず親がおりその親をたどることでご先祖様の存在が見えてくるわけですが、単に親の親を辿ることでもいいのかという問題がありますが、いまはそれさえも曖昧にされようとしている、プライバシーか個人情報なのか知りませんが、血筋を辿ることが全く根拠のない越権行為と認められる事もありまして、ご先祖様の事績が若い世代になかなか伝わりにくいこの現状が核家族化であります。

そうした現状を嘆いてばかりも居られません、あらゆる社会の枠組みや仕組みというものは当然社会基盤の健全で安定していることを前提にしている以上、そうした枠組み仕組

みを支えるのは何かといえればそれは取りも直さず人であるといえるわけですが、その人が社会を構成するうえでの社会的価値の共有が常識ということであり、それは一朝一夕で完成するものではなく、長い歴史風土の中で醸し出されてくるものと思います。

そうしたことを考えますと、乱れている世の中というものを悲観するのではなく、今一度歴史の中に子育てを含む教育のあり方をひもとくヒントが隠されているのではないかと思います。

戦後の我が国は急速にグローバル化していったとよく言われますが、それ以上にもっとも大きな変革は明治開国であつたのではないか、鎖国政策などで門戸を閉じていた我が国ですが、幕末から明治にかけての欧米による交易の要求はすさまじく、各地で小競り合いを起こしていたわけで、国家の命運も左右しかねない状況の中で、新たな国作りが求められたわけです。

我が国を取り巻く状況の中、国内では国学の影響を受け急速に尊皇攘夷論が台頭、しかし、その中からも外国と積極的に交流し、且外国に進出して植民地を経営すべきと主張した佐久間象山や、儒学の徳を以て正々堂々諸外国と交流すべしと主張した横井小楠のような学者による主張や、ペリーのアメリカ艦隊のような外国船の度々の来航により幕府も開

国をせざるを得なかった訳ですが、そうした状況に価値観の激変が走り、特に急激な西洋化の流れは、押し寄せる大波の如く我が国を液化化しかねない状況が見られたのであります。

そうした中で、明治四年大久保利通の推挙により明治天皇の侍講として出向した熊本藩士元田永孚（もとだながざね）という人がおります。

この人は横井小楠と共に熊本藩の藩校であります時習館に学び、その優秀にして真摯なる学問への態度が評価され藩政においても中心的役割を果たすわけですが、私が惹かれますのは、元孚のひたむきで決して出しゃばることなく物事に取り組む姿勢であります。

勝海舟は、「元田という人とはひどく懇意にしました。もう、あんな人はいません。黙っていて、議論はせず、それで誠実で、しっかりしていて、とても熊本には、もうありません」。

私もはともすれば豊かさやお金持ちになることをうらやんだり目標にしたりそうしたことに捕らわれてしまいいまいがちになります。が、そうしたことは結果としてあることが在るかも知れませんが、決して人生の目標とすべき事ではないということでもあります。

同じ朱子学に基づき実際の政治に反映させることを求めた実学の輩として永孚は、決し

て出しゃばることなく、課せられた職務使命に忠実に生きていった

同じ学問を志した横井小楠は、その利発さから評価が高く松平春嶽公の招聘に応え福井藩の藩政改革を断行し、その実績と諸外国との対等なる交流を訴え明治維新に大きな影響を与えた一人で在りますが、攘夷派の浪士に惨殺されたのに比べて、その時代決して表に出ることなく只菅に熊本藩において改革を進め、中央に出仕することを心良しとしなかった元孚の生い立ちを見ると、幼児教育の手本があるようです。

永孚の父三左衛門は参勤交代で留守がちで、祖父八右衛門が隠居の身ながら孫の養育を担当したのです。

永孚が晩年に記した『還暦の記』によれば、文政元年の生まれで幼名は大吉、名前は出産後初宮で藤崎八幡神社（宮）にて名付けされたそうですが、元田家ではご先祖様と神棚のある部屋への出入りが振るっておりまして、出入りの家人は必ず、貴人がまるで在室しているように出入りに声をかけて丁重で慎ましやかな態度で出入りしたそうです。

妊娠中母へは、過食を禁じ茶を飲むことも禁じせしめ、労働を過ぎし怒気を起こすなどは言うに及ばず、誠に身を保つことこま困れり」だったそうです。しかし、男子誕生にその喜悅誠に極まれり、しかしながら生まれ乍らにして母の乳汁不足にて三歳まで乳母の懷に

て育てられ、弟武雄が誕生後も母の懷で育てられしも、われは三歳で乳母を離れた後祖父母大姑の懷で寝起きし、六・七歳で祖父祖母大姑の教訓を受け孝敬家を継ぎ、忠誠國に報じ貞固慈愛よく人に篤くし、學問德行能く道理を明らかにし朝夕訓誡耳に絶えず。

十歳にいたりて唐詩選を誦し論語を読む、皆祖父の君の口授面命する所なり

十一歳八月時習館句讀通学せしむ

祖父の君に連れられて毎月三回發星山本妙寺内東光院中の墳墓に至る 距離半里ほど自ら箒を持ち清掃する、水を撒き先祖代々の墓前に拝謁し第一碑をさして先祖梅林府君の墓なり島原の賊を退治したのは此の人である

第三碑をさして家を興隆し大觀察に上りたる人である。殿様より佩刀を賜った人である。おまえはこのことを忘れることがあってはならないと、一々説明して漏れることなし、余これによりてそのことば骨に銘して痛切なることを覚え、爾來祖父について毎月先祖に閱するを楽しみとした。

成長するに従つて父母の君に代わつて墓参したと述懐しています。

又古典の読むのも祖父の指導で、多くの古典を読み書きしたことが書かれています。が、当時の読み物としての日本外史や南総里見八犬伝などは非常に興味深く楽しんで読んでい

たことも記されています。

後に時習館で学び後輩を指導する頃には、その文才は、時の江戸の昌平黌にも居ないと
言われるほどでありました。

後に明治四年、宮中に出仕し、明治天皇のお側で改革を進め、後に幼学綱要や教学聖旨
などを表し、明治二十三年には井上毅と共に教育勅語の編纂にも大きく関わりました。

そこには明治天皇のお心を体し政府の西洋迎合の姿勢に深い危機感を持って、我が国の
伝統護持に影響を与えました。

(北海道 旭川神社 宮司)

プラス発想

原 茂子

北海道の夏はすばらしい。なかでも六月が一番だ、と言われておりますが、その時期に、士別神社さまにお参りできる良いご縁をいただきほんとうにありがたく思います。今回は一日早く、昨日のお昼に旭川に着きましたので、是非訪ねたい処がありまして行ってまいりました。JR旭川駅からそんなに遠くないところに、最近とっても人気のある旭山動物園があります。十年ほど前には、閉園かとも言われておりましたのに、今日では、上野動物園の入場者数を抜いて日本一になったとのことです。それは動物園に係っている人達が、動物の目線にとらえ、それぞれの動物の能力・習性・行動を考えて、園内を新しく造り替える取り組みをしている成果だそうですが、本当にその通りで、動物たちは自然に似せた環境の中で、人間を仲間と思つて近づいて来たり、獲物と思つて跳びかかってくるのです。そんな楽しい動物園であることとは別に、私にはもう一つ旭山動物園に行つてみたい理由がありました。

ここに『幸せな動物園』という旭山動物園を紹介している本があります。実はこの本のスケッチ画を描いている はまのゆかさんは、私が住んでいます大阪府岸和田市から、少し南の泉佐野市出身の女性です。一ヶ月余り前の四月二十九日から五月十四日まで、ゆかさんの原画展が地元で開催されました。泉州地方一帯は、タオルや綿布などの織物業が盛んな土地柄でしたが、今はほとんど廃業となり、残されてあったノコギリ屋根とレンガ造りの工場を改装した、とつても雰囲気のあるレンガ館が会場でした。以前から彼女のおばあちゃんと知り合いでありましたので、家族みんなで観にいったのですが、ゆかさんが描いた絵本や、挿絵を手掛けた数々の本の中に、この一冊をみつけ、当日はサイン会もあるとのこと、ばっちりサインをもらいました。

はまのゆかさんは二十七歳。小さい頃から絵が大好きだったとおばあちゃんが話してくださいました。京都精華大学在学中に、村上龍さんのファンであった彼女は、大阪で開催された講演会に出向き、終了後に、可愛い包みをプレゼントしたそうです。村上龍さんは、好きで好きでしょうがないことを職業にしてみませんか？と問いかけた『十三歳のハローワーク』という本の中に、（勿論この本にも、ゆかさんが二百枚もの挿絵を描いています）次のような文章を書いています。すぐに包みを解かず、何が入っているのか確かめた

のは、ホテルに帰ってから。なかには、はまのゆかさんの作品・動物をスケッチした絵はがきが入っていた。その頃の私は『あの金で何を買えたか』という絵本を準備していて、画家を探していた。有名な人はたくさん仕事を抱えていて忙しいので、できれば新人に描いてもらいたいと思っていたところだった。この人なら描けるだろう、と思って はまのゆかという名前だけを頼りに連絡先を探し出し、絵を依頼しようとした。二十歳の無名の学生に絵をまかせていいのかという疑問がスタッフから出たが、歳なんか関係ない、と私は言った。その時私が言ったのは、おれだつて二十三歳の無名の学生のときに、『限りなく透明に近いブルー』を書いたんだから、ということだった。自分もやっただから彼女だつてやるだろうと思つた。問題はできるか、できないかではない。やるかやらないかだ。当時のはまのゆかさんは、こたつに入つたまま一日十六時間以上絵を描き続け、眠くなつたらそのまま寝て、目が覚めるとまた描き続けるという生活を、二ヶ月以上続けたらしい。はまのさんに会うとき、彼女はいつもスケッチブックを持っている。編集者が「はまのさんは村上さんに発見されて幸運だつたね」と言つたことがある。「それは違う」とわたしは反論した。と彼女のことを紹介しています。自分の作品を村上龍さんに手渡した勇氣と、与えられた仕事に、前向きに取り組み、努力した彼女の生き方に、私は心を揺さぶられま

した。

私たちは、日々の暮らしをする中で、色々なことにいくわしますし、たくさんの人との出合いもあります。物事が旨くいったときや、人と良い関係にあるときは、素直に喜びますが、病氣になったり、大きな失敗をしたり、困難なことが起こってきたときは、（この世は神も仏も無い。）と嘆きます。

私も、今日まで六十何年間、特にお宮に嫁いでは、思いがけないことや、大きな失敗が次々とありました。

氏子さまにご寄付をお願いし、社務所を改築して、いよいよ竣功式の当日を迎えました。午前中は竣功奉告祭、午後には奉祝の稚児行列を予定していましたが、当日は早朝から大雨でした。無事式典は終わりましたが、社務所の電話はひっきりなしに鳴り続けています。「もしもしお宮さんですか。こんなに雨が降ってんのに、お稚児さん出るんですか。」「はい、予定通りさせていただきました。」「皆んな、ええ着物着るんやで。それでもやるんかいな。」「はい、そのつもりです。」次から次の問い合わせに同じような応答をしている私は（どうなるんやろう）と身体が震えていました。中止にすればいいと、お思いでしょうが、中止には出来ないんです。建物の費用はご寄付で支払えますが、その他の諸費用が足りなくて、

稚児行列をして出きるわずかなお金も当てにして予算に入れていたのですから・・

三ヶ所の集合場所から、可愛く化粧をして装束を付けた稚児たちが、お宮に向けて出発する時がきました。ふと気がつくと、雨はぴたりと止んでいたのです。足元はぬかるんですが、子どもや付き添いの人達は、濡れることなく参道の入り口に勢揃いし、雅楽の音色と神職さんの先導で、参進してくるお稚児さんの姿を見たとき、私は涙が止まりませんでした。（ああ、神様が見ていて下さったんだ。神様は、この世においてになる。）と思いました。昭和四十四年春。宮司の夫と私が、共に三十歳の時の出来事です。あの日の心痛と、大きな歓びを、四十年ちかく経った今でも、はつきり思い出します。そして神様は、いつも身近においでになって、私たちの全てを見守って下さっている。いや、見張っておられる。と申し上げる方がびつたりのように思えるのです。

私をご奉仕させていただいております夜疑神社は、夫が五歳の時に父が戦死。姉二人弟一人の子ども四人を義母が和裁の仕立ての内職をして育てて下さったそうです。戦後、神様にお供えするお米を作る田んぼである神饌田は農地解放で地元のお百姓さんの手に渡り、私が昭和三十八年秋に嫁いだ折には、義母は五年前に亡くなっており、木造の社務所は雨漏りがして、室内はすきま風が吹き抜けるありさまでした。

五年毎と申し上げても過言で無いほど次々と、ご寄付の願いを氏子総代さまにお諮りし、若い神主の境内整備の願いに、ご賛同いただき、何度もご浄財をお寄せいただきました。拜殿改築の折、ご寄付下さった方々のご芳名の顕彰碑を建てることになり、据付も終りましたが、石屋さんに現物大の下書きを見せてもらい、総代さんと文字の確認をしたにも拘わらず、姓や名前の誤記が見つかりました。（どうしよう。石に刻み込んだものを・・・）とパニックになりました。長老の総代さんにご相談致しましたら、「奥さん、心配しなさんな。この世で起きたことは、この世で解決がきます。山より大きな猪は出ん。あんたさんが試されてますのや。石屋さんが良い知恵授けてくれますやろう。」と言われました。

（総代さんにも下書きを見てもらったのに・・・）と不満な気持ちがあった自分に気づき、私が間違いをしたのだ。と素直に受け入れようと思いました。神様が私に、「しっかりとやれ。」と試練を下さったのだと・・・。石屋さんが機材を持ち込み、誤字の部分を剥ぎ取り、正しい文字に直してくれました。「奥さん、いい時代になりましたなあ。強力な糊が出来るますんで、貼り付けた石は絶対剥がれまへんで。」とのこと。大仕事が終わった気持ちで、不手際のあったお宅に伺いお許しをいただきました。

それから後も、どんどんとハードルが高くなって、試練がつづきますが、その度に「しっかりおやりなさい。これを持ち越えると、今以上に生きる知恵を授かり、心が豊かになるよ。」と囁く声が聴こえるような気がします。

去年の暮、寒い寒い日に、五・六人の人がお百度を踏んでおられるのを目にしましたが、よくあることで別に気にしておりませんでした。杖をもった白髪のおばあちゃんとその長男、そして高校生らしい姉と弟とその母親が、次の日も、又次の日も、朝と昼と夜にも、お百度踏みのお参りが続きました。何年も前から、朔日の早朝には、いつもお参りになつてゐるおばあちゃんと長男で、名前も住居もよく知つてゐる方でしたが、とても声を掛けられる雰囲気ではなかつたので、私たちは、そおつと見守つてゐるだけでした。それから十日余りの日が過ぎ、手水舎の前でばったり出会つた折「どうかなさいましたか。」と、咄嗟に声をかけました。「奥さん、弟が脑梗塞で倒れまして・・・。脑梗塞いうたら、どんな状態か想像できますやろ。何にも知らずに眠り続けるだけですわね。けど今に奇跡起こしますよって、まあ見とつてください。」と大声で私に宣言されました。私は（まあなんてこと…。すごいこと言はる。）とショックでした。と同時に、神様にお祈りして、奇跡を起ここそうとしている前向きな姿に、感動も致しました。年が明け、五月半ばに、なんと

弟さんが、子ども二人と奥さん、それにおばあちゃんもお揃いでお宮に来られました。少し足が不自由なご様子でしたが、石段を一人で登り、拍手を打ってお参りです。祈る・念ずるということは、どんなにすごいことかを私に見せてくれました。くじけそうになる心を、家族で支えあつて、プラス発想して、皆で病に立ち向かった結果、この日を迎えられたのだ。と思いました。六月の朔日、何事もなかったかの様に、お参りしているご長男の肩の力が抜けた自然な姿は、私にとって心が温まる一コマでありました。

(大阪府 夜疑神社 権禰宜)

日本国の終わりの始まり

田代壽興

世の中には、一度間違えてもやり直しが効くものと一度間違えたら絶対にやり直しが効かないものの二つがあります。

例えば消費税の問題、税収がないからといって現行五パーセントを二十パーセントにしたら景気が悪くなって、税収が更に悪くなり、それではということで五パーセントに戻して景気の回復を図るといふようなことは、現実にはあり得る事です。

銀行の金利は上がったリ、下がったリを日常的に繰り返しています。

「歴史は繰り返す」という言葉がありますが、政治や経済の面では、やり直しの効くことの方が多いいのではないかと思います。

それに対して、一度間違えたら絶対にやり直しの効かないものもあります。今問題提起されている皇室典範改定問題、改正なのか、改悪なのか、後で申し上げますが、これは正にこの後者に属するものでございます。「覆水盆に返らず」の例えの如く、一度間違えたら

絶対にやり直しがきかないのです。従って慎重の上にも慎重に考えねばならない問題なのであります。

「万世一系」という言葉、お聞きになった事がお有りかと存じますが、この言葉が日本の国柄を最も良く表している言葉だと思います。

「万世」とは、よろずよ・万代・永世・永遠という意味で、「一系」とは、同一の血統・一つの血筋という意味で、「万世一系」とは、天皇の家系が、同一の系統が続くということです。ところが、今度の改正原案では、万世一系で無くなる恐れが出てきたのです。

三笠宮家の寛仁親王殿下は、この改定は、「日本という国の終わりの始まり」と表現されました。実にこの問題の核心を衝いた言葉であると思います。

さて、皇室典範とは何かという事からお話を進めたいと思います。皇位の継承・皇族・皇室会議その他皇室に関係ある事項を規定する法律で、一九四七年（昭和二十二年）に制定されました。明治二十二年制定の旧法は大日本帝国憲法と並んで日本の成文憲法たる性質を具えていましたが、現行の皇室典範は通常の法律となり、従って、国会議員の手で簡単に変えられるのです。内容も簡略化されています。

その第一章は、「皇位の継承について」で、

第一条 「皇位は、皇統に属する男系の男子がこれを継承する」と規定されています。これは明治期の旧典範と同じで、我が国の根幹に関わる点で、万世一系という言葉が生きている所以です。戦後のGHQもここまでは手を付けられなかった日本という国の根幹に関わる規定です。

ところが小泉首相の私的諮問機関「皇室典範に関する有識者会議」は、皇位継承の資格を革命的に変革する報告を行いました。

報告書の五つの重大改変事項、

- ①は女性天皇を新たに認めること。
 - ②は女系の天皇を歴史上全く初めて導入すること。
 - ③は男女を区別せず長子（第一子）を優先して継承させること。
 - ④は皇族女子は婚姻しても皇族の身分を離れず皇室に残ること。
 - ⑤は皇族女子と婚姻した皇族以外の男子を歴史上初めて皇族とすること。
- というもので、皇位継承資格の重大な変更です。女系則ち母方の血筋を引く天皇の誕生です。万世一系という言葉が使えなくなってしまうということです。

寛仁親王殿下は、このことを「万世一系、一二五代の天子様の皇統が貴重な理由は、神

話の時代の初代・神武天皇から連綿として一度の例外も無く、『男系』で今上陛下まで続いて来ているという厳然たる事実です。生物学的に言う、高崎経済大学の八木秀次助教授の論文を借りれば、神武天皇のY染色体が継続して現在の皇室全員に繋がっているという事でもあります。歴史上八名十方の、女帝がおられました、全員在世中、独身又は寡婦（未亡人）でいらして、配偶者を求められておられませんので、『男系』が守られ、『女系』には至っていないわけですから」と述べておられます。そして「二六六五年間の世界に類を見ない我が国固有の歴史と伝統を平成の御世でいとも簡単に変更して良いのか」と警鐘を鳴らしておられます。

大正十一年に日本を訪れたアインシュタインはこう言っています。「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない。万世一系の天皇を戴いていることが今日の日本をあらしめた。……我々は神に感謝する。日本という尊い国を造っておいでくれたことを」。万世一系とはかくの如き世界の奇跡だということです。これを変えらるゝということが許されるのか、二千六百六十五年間続いて来た日本文明の伝統・歴史の核である天皇制を変えらるゝのは、絶対にしてはならないことだと思います。

①の女性天皇の容認は、皇位継承の資格の変更で、皇室典範第一条の改変です。憲法の

男女平等の原理を皇室にも取り入れさせようとしたものですが、天皇という皇位は、皇祖神への祭り主でもあります。従って、天皇にとって最も大事な宮中祭祀を行う場合、女性であることにさまざまな不都合が生じてきます。

生理時の問題、また天皇と皇后の役割を一人で担う事になるなど。

キリスト教の最高司祭者・ローマ法王、チベット仏教のダライラマ、イスラム教のイマームも初代から男性のみが祭の主宰者で、男女平等の原則は適用されておりません。

②の女系の天皇を認めることは、歴史上全く例がないことで、日本皇室の「万世一系」の国民的信頼の核を壊す、二千年来の最も貴い伝統の根底を改変する、皇室の正当性の最大の根拠を破壊する事になります。

③の長子（第一子）優先の継承は、今日の社会通念（男子に跡を継がせるのが普通）に反していると云えます。社会通念に反してまで第一子主義を採ったのには、何かの狙いがあったと思われます。

④の皇族女子は婚姻後も皇族の身分を離れず。ということとは、現在おられる八方の未婚の女性皇族にとっては大変なことだと拝されます。

⑤の皇族女子と婚姻した皇族以外の男子を皇族とすることは、全く例が無い事で、国民

に受け入れられるとは思われません。お隣のお兄さんがある日から突然「殿下」と呼ばなくてはいけなくなったら、どうなるでしょう。尊厳などあったものではないでしょう。

皇室という制度そのものが崩れていく事になると思います。

さて、この度の皇室典範の改悪が、いつから、またどこで考えられていたのか、興味深いものがあります。

平成十七年十一月「皇室典範に関する有識者会議」は、歴史上初めて女系による皇位継承を導入し、継承順位については長子を優先する改定を提案しました。

これに対し、当初は、百二十五代、二千年以上の歴史を有する皇位継承の変更について、僅か十ヶ月三十時間の審議という短時間で結論を出すとは何事か、拙速に過ぎるという反対論が出されましたが、平成十八年二月十七日、産経新聞は、この有識者会議が発足する七ヶ月も前に、政府の非公式検討会は、女性・女系天皇を認めるための法改正を想定していたという極秘文書があることをスクープしました。

それによると宮内庁で皇位継承制度に関わる基礎資料の作成が始まったのは平成八年。

翌九年四月から十二年三月まで、内閣官房が加わった非公式の「特別研究会」が、二期に分かれて設置されており、第一期メンバーには、工藤敦夫元内閣法制局長官、古川禎二郎

内閣官房副長官、大森政輔内閣法制局長官らのほか、元宮内庁幹部らが名を連ねていたということ。古川氏は、後の有識者会議の委員でもあります。

女性天皇とか女帝とかの言葉がマスメディアに登場するのは、最初が『THIS IS 読売』平成八年（一九九六年）一月号で、そこには「女性天皇の時代」が特集されていたそうです。

このキャンペーンは、

- ① ジェンダーフリー（性差破壊）教育
- ② ジェンダーフリー社会づくりとして男女共同参画社会基本法の策定
- ③ 家族解体のための夫婦別姓の制度導入、これに加えて
- ④ 皇統断絶にいたらしめる劇薬として女性天皇の制度化運動が含まれていたと言われています。

この影響を受けてか、宮内庁が動き出したのが同じ年の平成八年、政府の非公式検討会は、平成十六年五月には、女性・女系天皇導入を打ち出した極秘文書を作っていたということ、古川前内閣官房副長官らが関与し、有識者による懇談会の立ち上げから皇室典範改正に向けた手順までもがその文書の筋書き通りに進められたということです。

有識者会議のメンバーに関して、吉川座長は共産党系の学生運動出身だとか、園部副座長は、家永教科書裁判で家永さんに与する立場を取ったとか、佐々木東大前総長も左翼の運動に熱心だったとか、様々な情報が寄せられているようですが、いわば反皇室の人達が中枢を占めている組織で、革命思想があることを危惧する方もあります。

女性天皇・女系天皇の発信元が宮内庁であったとは全く意外です。伝統を守るべき立場の者が、逆に伝統を壊すべく秘策を練るといのは驚きです。日本国解体へ向けての大きな何かを感じます。

とは言え、男子皇族のご誕生がないじゃないかと言われそうですが、もしそうだったとしても日本の伝統「万世一系」を守る方策はあります。戦後GHQの強大な力によって臣籍に降下させられた十一宮家の中で、復帰可能な元宮家に、皇籍に復帰していただき、皇室の藩屏となって頂くことです。藩屏とは皇室の守護者、この場合は「血統のスペア」になつて頂くということです。

何を今更という意見と宮家の増加は金が掛かるという意見もあるかと思いますが、前者については、今後廃絶する宮家も出て来るし、将来的には皇室の藩屏としての宮家は絶対必要です。後者については、皇族の一家当たりの費用は、本年度は三千五十万円となつ

ています。他の費用もいくらか加わるとしても、日本の国力からして大きい金額ではないでしょう。

皇室が無くなったら、日本という国はバラバラになり、やがては滅ぶでしょう。二千六百六十五年間守り伝えてきた日本の国柄・国体を絶対に変えてはならない、と申し上げて私の話を閉じさせて頂きます。

ご静聴有り難うございました。

(熊本県 牛深八幡宮 宮司)

心の絆が権威を紡ぐ―昭和祭に念う―

木下 鉄二

青丹によし奈良の都、といえ、大仏さん。大仏さんは東大寺。八世紀の半ば聖武天皇により創建されたのですが、その偉容と強大な勢力により日本仏教の中心的存在でした。その大仏殿の北西の裏手に校倉造りの正倉院と呼ばれる宝物殿があることはあまりにも有名です。二棟の校倉をつなぎ、中間も倉となっています。南北三十二・七メートル、東西九メートル、高さ十四メートル、床下二・五メートルの大きな宝庫に、聖武天皇の遺品を中心として、多種多様の宝物が、アジア大陸は勿論、西方諸国よりの伝来の美術・工芸品・日常の調度品等、その品数九千余点が収蔵されているようですが、その中に中国から渡来したという有名な香木、あの香りを楽しむという香木の蘭奢待と呼ばれる名香があるそうなんです。テレビで紹介していたのを一度見た事があるのですが・・・。

実はその香木蘭奢待を削って香を聞いた人が、歴史上に三人存在するのです。その最初の人物が、室町幕府第八代將軍足利義政とのことです。

二人目の人物が、織田信長です。將軍義政は征夷大將軍として權勢をほしいままにした人物です。信長にいたっては、比叡山延暦寺を焼討ちするなど、神仏をも恐れぬ傍若無人の振舞に終始し、世の武將達がおそれた戦国武士であつたことは皆さまもご存知の通りでございます。

大きな権力と武力を兼ね備えたこの二人の武將でさえ、香木蘭奢待をけずるのに独断では出来なかつたのです。天皇陛下のお許しが必要だつたのです。正倉院の扉には天皇さまの勅封、即ち封印がしてあります。その勅封を破つて中に入るためには天皇さまのお許し、勅許を必要としたのです。

香木には、足利義政、これを切る。織田信長これを切るとの付箋がつけてあると申します。

三人目は誰が削つたか、それは他でもない明治天皇さま自らがなさつたのです。

武將の二人は、その強大な権力と武力をもつてすれば、封印をはがし正倉院に押し入つて香木のほんの一部を削り取る位朝飯前の事だつたでしょう。しかしそれが出来ないのは何故か。それは天皇の權威をおそれ畏んだからに他なりません。

くどいようですが、皆さま御存知の京都御所を思い起こして下さい。実に無防備なたた

ずまいです。周囲に堀をめぐらしてもない。城郭を構えてもない。常備の軍隊が警備しているわけでない。しかし、青人草、民草は、ほらあそこに天子さまがいらっしゃる。京には天皇さまが私達の倅せを祈つて下さっている。

天子さまと国民一人一人との心の絆がしっかりと結び合い、その絆が天皇、皇室の権威という綾錦を織りなしていると思うのです。

ではその心の綾錦はどのようにして織りなされているのでしょうか。皆さまとともに考えてみたいと思います。

終戦から四ヶ月後、昭和二十一年二月十九日を振り出しに始められた御巡幸がございす。

た、かひのわざわひうけし 国民を

おもふ心に いでたちてきぬ

「この際、私としてはどうすればいいかと考えたが、結局、広く地方を歩いて遺家族や引き揚げ者をなぐさめ、励まし、元の姿に返すことが、自分の務めであると思う。私の健康とかなんとかはまったく考えなくてもいい。その志を達するよう全力をあげておこなってほしい」悲しみ途方に暮れる国民の中へ飛びこんでいかれたのです。

御巡幸再開、佐賀県基山町の因通寺の引き揚げ孤児を世話している「洗心寮」へ立寄られます。県の計画にはなかったのですが、香淳皇后と龍叡和尚との絆があることを御存知の陛下の御希望による訪問でした。

龍叡和尚はすでに亡くなられ、次の代寛雅住職になっていましたが、住職に声を掛けられました。「親を失った子どもたちはたいへんかわいそうである。人の心のやさしさが子どもたちを救うことができると思う。あずかっているたくさんの方の子どもたちが、りっぱな人になるよう心から希望します」

天皇さまは各部屋でお迎えする子どもたちの前に立たれます。天皇さまのほうから子どもたちに、頭をぐっとおさげになられ、お腰をかがめられ、笑みをたたえてひとりひとりにお言葉をかけられます。「どこから」「満州から」「北朝鮮から帰りました」とお答えすると、「ああ、そう」「おいくつ」「七つです」「ぼく五つです」天皇さまはひとりひとりに顔を近づけられて、「りっぱにね。元気だね」とおっしゃいます。

いちばん最後の部屋の前で天皇さまは立ちどまれ、そのまま部屋にはいつていかれました。そこには両親の位牌をだいた女の子が立っています。「だれの?」「父と母です」「どこで?」「父はソ満国境で、母は引き揚げて死にました」「おひとりで」「日本のおじさんお

ばさんに連れられて」陛下はじつとこの子の顔をご覧になって、何度もうなずいておられました。「お淋しい」と、それは悲しそうなお声で言葉をかけられました。ところがその子は首を横にふったのです。

「いいえ、淋しいことはありません。私は仏の子どもです。お父さんお母さんに会いたくなったらみ仏さまの前に座ります」一瞬天皇さまのお顔が変わったようでした。右の相手の帽子を左に持ちかえられて、女の子の頭をお撫でになりました。一回、二回、三回。「仏の子どもはお幸せね。これからもりっぱに育ってね」と申されました。このとき天皇さまのお目からハラハラと数滴の涙がたみの上に落ちていったのです。

お車へ向われる天皇さまの服のはしをつかんでなさないで、くっついて歩きます。とうとう車のところまでついていきました。「また来てね」「またくるよ」・・・。

このようなスメラミコトとクニタミの日々の心の交流が絆を深めてまいります。

もう一つ昭和天皇さまのお若い頃の感動的なお話しをさせて頂きます。

昭和三年十一月十五日昭和天皇御即位奉祝行事の一環として計画されました分列行進奉唱式の折のことです。

陛下からの御指示がなされました。

一、雨天の場合、青年たちに雨具を着用させること。

一、自分の立つ場所には雨でも屋根を張らないこと。

この二点が陛下の命令ともいえる強いお達しであつたのです。

その前日、木下道雄侍従は、会場を一巡いたしました。会場のお立ち台は、高さ一米強約四平方メートルの大きさなのですが、陛下のご指示通り、上に雨除けのシートはない。ただまわりにぐると白い布がめぐらしてあるだけの簡素なものでした。ところが、夜が明けると、大変な豪雨となつたのです。ビュービューと音を立てて北よりの風が吹いています。荒天というより、まさに嵐なのです。

木下侍従は「雨天であつても天幕を張らぬように」との陛下のお言葉を思い出しながら、会場の二重橋前へと急いだ。心の内で、この雨と風だ。きつと天幕は張られているにちがいないと思つた。

お立ち台が見えた。案の定、ご指示にそむいて天幕が張られている。「この雨風では、張らずにはいられなかつたろう・・・」と、思わずつぶやいた。

雨は、依然としてやむ気配をみせない。

分列式が予定されている午後までには降り止んでくれと、木下侍従は心の中で祈つたと

申します。

昼近く、木下侍従は、侍従長室に呼ばれて行ってみると、そこには宮内大臣と次官も同席しています。

宮内大臣がたずねました。

「その悪天候だが、分列式は予定どおりだろうか」「はい、予定どおり行なわれます」「天幕は張ってあるだろうか」

下見してきていますから、即座に「はい」と答えます。

「陛下は天幕をどうお思いだろうか」

ご指示にそむいて、シートを張ってしまった。そこにお立ちになって下さるだろうかと心配しているのです。さすが宮内大臣だけに、陛下のお気持ちがよくわかるからでしょう。

「多分―お入りにならぬと存じます。」「それはよろしくない。今日はぜひお入りになっていただく。これからわしをお願いしてくる」と大臣は立ちあがったが、思い出したように、「ところで陛下の防水マントは用意してありますか」万一のことを心配しての一言でした。「はい、それは準備いたしてございます」結局のところ、どうなったかと申しますと、大臣は、「荒天ゆえ、是非天幕の中で」とお願いするのですが、陛下は、ご自説をおまげに

ならない。大臣は、更に言葉を続けます。「兵が弾雨の中にたつからといって、司令官自身第一線に出るものではありません。後方で指揮いたします」

だが陛下は、「時と場合では、第一線にも立つ。今日はそのつもりゆえ天幕はとり除くよ」と。この時陛下は二十七歳でした。

大臣はついに、天幕取りはずしの命令を出します。雨の中、撤去の作業が始まります。式は中止かと軍の将校が走り寄ってきます。ことの次第を告げると、その将校は「有難いことです」と駆け戻る。伝令が四方にとぶ。「陛下のご指示により天幕は撤去」「陛下の命により天幕が撤去になった」と。

そのことが、豪雨と寒気の中で整理していた八万余の青年男女に疾風はやてのように伝わった。天幕撤去は陛下の「一緒に濡れよう」を意味するのです。

五日前の「御即位礼の勅語」が発表になっていた。その中に「君民体をいっにす」つまり陛下も国民も常に一体である。この事が「一緒に濡れよう」となって具現されたのです。雨の降りしきる中、行進が始まった。どうであろう。みんな小脇に雨具をかかえている。陛下もマントをお脱ぎになったのです。

一時間二十分の、みぞれまじりの寒気の中での出来事でした。

ある女学校長が歌を詠みました。

「天幕をとり払へとお言葉に若人の顔かがやきにけり」

天皇さまと、くにたみとの心の絆はこのようにしてかたくく結ばれていくのです。

おろかなる心ながらに国民の

なほ安かれと思ふ明け暮

後桜町天皇の御製です。明けても暮れても国民よ安かれと祈って下さるのです。

国やすく民のかまどのにぎはひを

見も聞きたきぞ我が思なる

見たきもの、聞きたいのも国民の幸せであり国の平安なのだ。これこそ歴代の天皇さまの祈りなのです。

天皇さまと、国民とは共に守り護られているのです。

最後に三笠宮寛仁親王殿下のお言葉をご紹介します。

「皇族というのは国民に護ってもらっているんだから、過剰な警備なんかいらぬ。堀をめぐらして城壁を構えて、大々的に警護しなければならぬような皇室なら、何百年も前に滅んでゐるよ」

スメラミコトとクニタミとの心の絆が、織りなした綾錦こそ天皇の権威なのです。

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には「うねり」を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもつて語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十二回神道講演全国研修大会 北海道大会の記録

於 士別神社

神社本庁研修所所長 矢田部正巳

顧問 阿部 信 (神社本庁長老)

々 佐藤 公聰 (北海道神社庁庁長)

々 真弓 常忠 (住吉大社宮司)

々 大野 俊康 (元靖國神社宮司)

々 黒岩 龍彦 (宮崎神宮宮司)

々 矢野 憲一 (元神宮禰宜)

大会 会長 佐藤 公聰 (士別神社宮司)

実行委員長 村田 和之 (長束神社宮司)

実行副委員長 佐古 一洌 (松尾大社宮司)

実行委員 渡邊 知宣 (正野神社宮司)

々 二橋 一彦 (砥鹿神社宮司)

々 々 々 々 々 々 々 々

(元神宮禰宜)

(神明社宮司)

(櫻山八幡宮宮司)

(多賀大社宮司)

(檀森神社宮司)

(久能山東照宮宮司)

(大江八幡宮宮司)

(旭川神社宮司)

(松尾大社権宮司)

(松尾大社権禰宜)

(長束神社禰宜)

(長束神社権禰宜)

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第1回 東京大会	昭和46年8月4～6日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第2回 広島大会	昭和50年8月8～10日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第3回 伊勢大会	昭和54年8月27～29日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第4回 九州大会	昭和58年6月7～10日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第5回 みちのく大会	平成元年8月21～23日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第6回 伊勢大会	平成2年8月20～22日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第7回 東京大会	平成3年8月27～29日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第8回 宮崎大会	平成4年8月24～26日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第9回 愛媛大会	平成5年7月19～21日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第10回 東京大会	平成6年7月21～23日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第11回 北海道大会	平成7年8月3～5日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第12回 広島大会	平成8年7月16～18日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	

大会	開催年月日	開催場	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第13回 伊勢大会	平成9年7月17～19日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第14回 京都大会	平成10年8月27～29日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一冽	嶋田 達久	追憶
第15回 東京大会	平成11年9月9～11日	全国神社社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第16回 愛媛大会	平成12年8月23～25日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第17回 石川大会	平成13年9月4～6日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第18回 鹿児島大会	平成14年8月21～23日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第19回 愛知大会	平成15年6月25～27日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第20回 島根大会	平成16年7月13～15日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第21回 宮城大会	平成17年8月23～25日	志波彦神社 鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第22回 北海道大会	平成18年6月21～23日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき

神道講演全国協議会 役員

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事長	副会長	会長	顧問	顧問	顧問	顧問	顧問
谷田	藤井	秋野	二橋	渡邊	佐古	村田	矢野	黒岩	大野	真弓	阿部
勉	昭彦	義正	一彦	知宣	一洌	和之	憲一	龍彦	俊康	常忠	信
櫻山八幡宮宮司	元神宮禰宜	神明社宮司	砥鹿神社宮司	正野神社宮司	松尾大社宮司	長束神社宮司	元神宮禰宜	宮崎神宮宮司	元靖國神社宮司	住吉大社宮司	神社本庁長老

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事・監査	事務局長
中野	大野	落合	木下	芦原	生寫	
幸彦	順弘	偉洲	鏌二	高穂	經和	
多賀大社宮司	檀森神社宮司	久能山東照宮宮司	大江八幡宮宮司	旭川神社宮司	松尾大社權宮司	

平成十八年六月現在

あとがき

今年は何と暖かい冬であろうか。雪まつりに雪不足、大変であるとのニュースに、昨年の開催地、北海道に思いを巡らせた。

平成十八年六月二十一日より二十三日迄、第二十二回神道講演全国研修大会、北海道大会が士別神社で開催された。北海道での開催は、平成七年六月の鳥取神社に次で二回目となり、本庁理事、神社庁庁長でもある士別神社宮司佐藤公聰先生の大会会長。神社庁を始め支部長のバックアップで道内より多数の参加者、又、特別ご高配と協賛を賜わり、まれにみる盛大な大会となりました。佐藤宮司のご厚情で豪快なおもてなし、北国の味覚にも舌鼓。崇敬者、婦人会の皆様方にも大勢でご協力只々頭の下る思いでした。

佐藤宮司ご夫妻をはじめ職員の方々、崇敬会、婦人会の皆様に参加者を代表し厚く御礼申し上げます。

扱て、多忙な社務に心を残し十分間の発表に遠くは九州からも馳せ参じ研讃された諸兄には三日間の魂の禊ぎ、精進に意気揚々と郷里に帰られ神明奉仕に邁進されていることと

思います。この度の北海道大会は研修に先立ち、石井寿夫先生十五年、佐古幸嬰先生十年の合同慰霊祭を親族代表の参加を頂き斎行。偉大なる両先生の古えを偲び献身的な尊い教えに感謝の誠を捧げご冥福を祈ると共に、日本民族の先達として恥じない神道人として歩むことを霊前に誓うことができました。

唯一つ北海道大会での慰霊祭を斎行するに当り、大先達、旭川神社名誉宮司芦原巖夫先生の斎主お引き受けを賜わり久し振りに五、七調の慰文を拝聴できるものと楽しみにしておりましたが、急ぎ身籠られ残念でなりません。今回もささやかな講話集を発行します。参加者の悲願と祈りを汲み取って頂ければ幸甚に存じます。

最後に、この度ご支援頂いた関係各位、又、何時もながら日陰役で会を盛り上げ、講話集製本迄協力を頂いている事務局員一同に厚く御礼申し上げ挨拶いたします。

平成十九年初春

第二十二回神道講演全国研修大会

北海道大会実行委員長 村田和之

講話集 朔北のいぶき

—第二十二回 神道講演全国研修大会 北海道大会—

発行 平成19年6月1日

編集者
装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所 吳市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 — 神道講演全国協議会
〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

